

青の山の教育

第36集



令和3年度

香川県立香川丸亀養護学校

はじめに

—教育実践から特別支援教育の今を探る—

本誌「青の山の教育」は2年ぶりの発刊となり、令和2、3年度の各部での教育実践を掲載しています。今年度で36集になりますが、終始一貫、発刊当初より貫かれているものの一つに授業づくりがあります。我々は教員で有り続ける限り、日々、授業改善を続けていかなければいけません。授業改善はP（計画）－D（実行）－C（評価）－A（改善）のサイクルにそって行っています。本誌の掲載内容でざっくりとサイクルを説明するならば、さしずめ指導案がP（計画）、D（実行）の部分に当たり、研究討議会と授業評価アンケートがC（評価）、A（改善）の部分にあたるのでしょうか。そのサイクルの記録が克明に掲載され、それは、まさしく教員達が最近の特別支援教育で問われているテーマを授業づくりの課題として引き受け、悩みながらも挑んでいるドキュメントであると言えます。

さて、第36集に掲載している内容は学習指導案、研究討議の記録、授業評価アンケートになります。特に読んでいただきたいのは次の2点です。

1点目、学習指導案の児童生徒観に注目してください。児童生徒の実態把握を適切に行うことにより、単元観、指導観が明確になってきます。この視点で児童生徒観を読んでいただき、それに基づいた学習活動を展開しているか、手立ては適切か、適切な評価ができているかをご覧になると、学習指導案に込められた教員の思いや現在の特別支援教育の流れが浮かび上がってくると思います。

2点目は研究討議会の記録です。討議会は、授業者は責任をもって授業の意図を説明し、参観者は授業者の意図を汲んで、授業での気づきを語り、次の授業への提案をするのが基本です。討議会の記録内容は主に授業者の振り返りと同僚との学びあい、授業者、参観者共に何に気づいたのか、何を学んだのかを掲載しています。特別支援教育ではティームティーチングは欠かせません。教員複数の視点から討議会で何が話題となり、何を共有しているのかを読み取って欲しいです。そこにはチーム丸養の今も垣間見えると思います。

最後になりますが、令和3年度に公益財団法人 日本教育公務員弘済会より「児童生徒の『学び』をつなぐ授業づくり」というテーマで優良賞をいただきました。これまで香川丸亀養護学校に携わった教員一人一人の授業実践が今に繋がり、賞をいただいたものと思っております。一人一人の教育実践の積み上げをまとめ、次に実践をする者に繋いでいくことも本誌の役割だと考えます。

ぜひ、「青の山の教育」を一読していただき、本校教員の授業に対する思いや児童生徒の指導に携わっている熱意を感じ取っていただければ幸いです。

今後とも、ご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

令和4年3月

校 長 内山 宜子

目 次

はじめに（巻頭言）

I 研究の概要 1

II 各部の取組

小学部 7

中学部 5 7

高等部 8 1

III 2年間の研究を終えて . . . 1 1 3

日本教育公務員弘済会

香川支部令和3年度研究論文 . . . 1 1 5

あとがき

I 研究の概要

本校では、令和2年度及び3年度の2年間、「児童生徒の『学び』をつなぐ授業づくり ～主体的・対話的で深い学びの視点に立って～」の全校研究テーマの下、実践に取り組んできた。ここに、2年間の研究の取組について報告する。

1 全校研究テーマについて

児童生徒の「学び」をつなぐ授業づくり

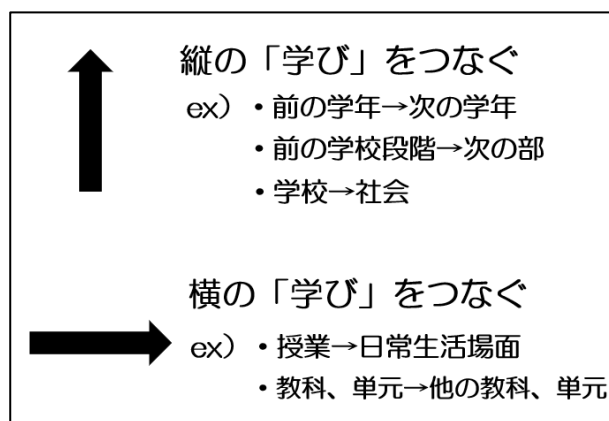
～主体的・対話的で深い学びの視点に立って～



本校では、「つながれた手と手で育てる丸養」を教育ビジョンとして、「三つの部をつなぐ」「保護者とつなぐ」「地域とつなぐ」を共有し実行している。自己肯定感や自己有用感を育みながら生活する力と働く力を培い、キャリア教育の視点を意識した指導や支援を、小学部から中学部、そして高等部、卒業後へとつないでいくことを目指している。

令和元年度までの2年間は、「三つの部をつないで育てる丸養流「生きる力」」という研究テーマの下、児童生徒の内面の育ち（自己肯定感、自己有用感）を促しながら、生活する力と働く力を培うための授業研究や三つの部をつなぐ取組を実践し、その支援の在り方について研究に取り組んだ。そこで、令和2年度からは、それまで研究してきた自己肯定感、自己有用感を育てる支援や、丸養流「生きる力」をつなぐ取組を土台としながら、全校の研究のメインテーマを「児童生徒の『学び』をつなぐ授業づくり」とし、児童生徒の「学び」に焦点を当て、「学び」をつなぐ授業の実現を目指し、研究に取り組むことにした。

授業を通して児童生徒が学んだことは、単にその授業やその時期での学びとして独立したものではなく、各授業間や学期間、学年間、部間、あるいは家庭生活へとつなげていくことが、自立や社会参加する力を育むうえで大切である。児童生徒の「学び」が生活する力や働く力などにつながっていくようにするためには、「学び」を縦や横方向につなげていくことが必要である（資料1）。そこで、児童生徒の「学び」をつなぐ授業を実践し、指導者同士で協議することで、「学び」の連続性を確保していきたいと考えた。



(資料1)「学び」をつなぐ方向

また、新しい学習指導要領では、育成を目指す資質・能力を育むために、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の必要性が示されている。そこで、主体的・対話的で深い学びの視点で授業づくりを行うことを通して、主体的な学び、対話的な学び、深い学びが実現できている児童生徒の様子や実現するための手立てについて協議し、授業改善に取り組んでいきたいと考えた。

以上のことから、児童生徒の「学び」をつなぎ、主体的・対話的で深い学びの視点で授業を実践し、学習活動や手立てなど授業づくりの在り方について研究を行うため、本研究テーマを設定した。

2 研究の進め方

(1) 各部の研究テーマ

各部の目標や目指す児童生徒像を基に、「学び」をつなぐ授業づくりに取り組むため、部ごとに下記のテーマを設定し、研究を進めた。

〈小学部〉 **令和2年度** なかよく げんきに がんばる 特別活動

令和3年度 単元や教科等をつなぐ視点からの授業づくり

〈中学部〉 **令和2年度、3年度** みんなで考える 実態に応じた指導や支援を踏まえた授業づくり

〈高等部〉 **令和2年度、3年度** 生きる力を育む授業づくり ～仕事・生活・余暇の視点から～

(2) 授業研究

研究テーマの下、年間、小学部3回、中学部3回、高等部2回の研究授業を行い、そのうち各部1回を全校研究授業とした。

令和2年度

＜全校研究授業＞

回	日程	部・学年	教科等・単元名
1	9月11日	高等部 全学年	作業学習 軽作業班 「受注作業（うちの袋づくり）をしよう」 
2	10月14日	小学部 4、5、6年	 特別活動 おもてなしキッズ班 「おもてなしの気持ちを届けよう」
3	10月23日	中学部2年	音楽科 「丸養まつりに向けて器楽演奏をしよう」 

＜各部の研究授業について＞

回	日程	部・学年	教科等・単元名
1	7月14日	中学部3年	数学科 「水とかさ」
2	9月10日	高等部2年	職業科 「『働く大人』になるために」
3	9月25日	小学部2年	特別活動 「力を合わせて掃除をしよう」
4	10月2日	小学部1年	特別活動 「やってみよう！～びかぴか はなまる 1ねんせい～」
5	11月6日	中学部1年	生活単元学習 「相手の立場に立って考えよう！」

令和3年度

<全校研究授業>

回	日程	部・学年	教科等・単元名
1	6月16日	中学部3年	生活単元学習 「お茶会をしよう『みんなでチャ・チャ・茶』 ～すべてはみんなのうまいのために～」 
2	10月4日	高等部3年	職業科 「働く力や態度を身に付けよう」 
3	10月13日	小学部2年	国語科・算数科 「おかいものおかいもの」 

<各部の研究授業について>

回	日程	部・学年	教科等・単元名
1	6月7日	小学部5年	図画工作科 「花火を打ち上げよう」
2	6月30日	中学部1年	音楽科 「『めざせ！和太鼓マスター！』 リズムを合わせてかっこよく打とう」
3	9月30日	高等部1年	生活単元学習 「働くことについて考えよう」
4	10月27日	小学部 4、5、6年	体育科 「めざせ金メダル！丸リンピック ～あの感動をもう一度～」
5	10月29日	中学部2年	体育科 「器械・器具を使った運動 ～マット運動～」

①研究授業について

全校研究授業と部研究授業については、例年、直接参観できるようにしていたが、昨年度と今年度は新型コロナウイルス感染防止のため、直接参観を中止し、ビデオ視聴での参観に変更した。視聴期間を1週間ほど設けて放課後に放映することで、全ての職員が授業を始めから終わりまで見るようにした。小グループに分かれての活動がある授業では、各グループの様子が分かるようにビデオを編集し、授業の全体像とともに児童生徒の活動内容がつかめるように工夫した。

また、授業を参観した後は、授業評価アンケート（資料2）を授業者に提出し、授業改善や討議会に活用した。



②授業評価アンケート（資料2）

授業参観後に記入する授業評価アンケートは、研究テーマに沿った考察ができるように書式を工夫している。授業者が授業づくりをするに当たり、「学び」をつなぐために工夫したことが参観者に明確に伝わるように、アンケートの①の欄に、授業者が工夫した内容を記述してからアンケートを参観前に配布するようにした。また、授業の改善点だけでなく、手立てとして良かった点を見付けて書く形式にしたことで、授業者の意図や支援の方法に目を向けられるようにした。



R3授業評価アンケート 単元名() 授業者名() 記入者名()

研究テーマ 児童生徒の「学び」をつなぐ授業づくり ～主体的・対話的で深い学びの視点に立って～

①「学び」をつなぐために授業者が工夫したこと

授業者が入力をしてください。

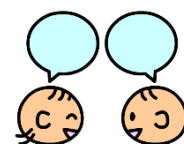
② ①の視点について評価をしてください。

③授業のなかで見られた「主体的・対話的で深い学び」が実現されていた児童生徒の様子と、そのための手立てについて授業評価をしてください。

視 点 (複数可)	児童生徒の様子 主体的・対話的で深い学びが実現できていた児童生徒の様子を書く。	手立て 以下の観点で良かった場面を書く。 教材教具、学習活動、言葉掛け、指導者の関わり方、評価の方法
①・対・深	A君は、前時のワークシートを振り返って、目標を考えていた。「前はここが難しかったから…」と前回の課題を意識し、目標達成にむけて意欲的に活動に取り組んでいた。	イラスト付きのワークシートを使って本時の目標を決める場面が設定されていた。
主・対・深		
主・対・深		
授業者や授業を行ったチームへひとこと	よかったところ	質問や次につながるアドバイスなど

③討議会の方法

授業説明では、学習のねらいや意図を理解するとともに、授業者から「学び」をつなぐためや児童生徒の主体的・対話的で深い学びを実現するために工夫したことを聞き、有効な学習内容や学習活動、支援や手立てについて参加者全員で共有できるようにした。また、小グループに分かれて設定されたテーマに基づく意見交換を行ったり、児童生徒の変容を追ったりすることで、授業の内容や支援の在り方について考えを深めた。



全校研究授業の討議会は部ごとで行うようにし、部のテーマに沿った討議会をもてるようにした。他部の職員からは授業評価アンケートを通して意見やアドバイスを得、授業改善に役立てた。全校研究授業の討議会の結果も含めた各部の研究成果は、年度末に行うまとめの全体現教として、全校で共有する時間を設けた。

(3) 研究収録作成

2年間の各部の研究実践を「青の山の教育」第36集として刊行する。

<参考・引用文献>

- ・特別支援学校学習指導要領解説 総則編 文部科学省
- ・学びの質を高める授業づくり
～主体的・対話的で深い学びの視点から～ 香川県教育センター
- ・知的障害教育ならではの主体的・対話的で深い学びができる本 神山努 学研教育みらい
- ・視覚シンボルで楽々コミュニケーション 障害者の暮らしに役立つシンボル 1000
ドロップレット・プロジェクト編 エンパワメント研究所
- ・視覚シンボルで楽々コミュニケーションおかわり 2 障害者の暮らしに役立つシンボル New 1000
ドロップレット・プロジェクト編 エンパワメント研究所



なお、本冊子のなかでドロップレット・プロジェクトのシンボル「ドロップス」を使用することについて、快く承諾をしていただいております。
本校の研修で使用したスライドの他、挿絵としても使用させていただきました。

ドロップレット・プロジェクトの皆様、ありがとうございました。



小学部 図画工作作品「おでかけかばん」



中学部 作業作品「水筒バッグ」



高等部 作業作品「干支の置物」

本校学校キャラクター
「まるちゃんす」



Ⅱ 各部の取組

小 学 部

- 1 小学部の研究について
- 2 令和2年度の研究
- 3 令和3年度の研究
- 4 2年間の研究のまとめ

1 小学部の研究について

(1) 小学部のテーマについて

令和2年度

なかよく げんきに がんばる 特別活動



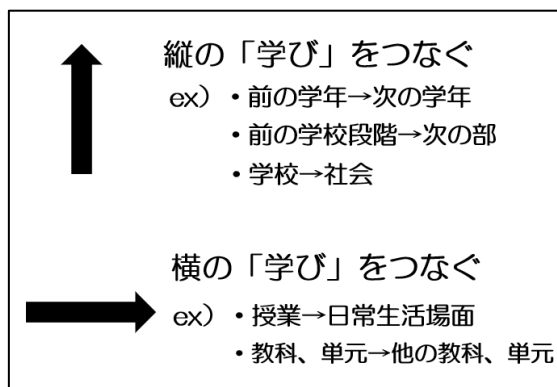
令和3年度

単元や教科等をつなぐ視点からの授業づくり



小学部では、全校の研究テーマ「児童生徒の『学び』をつなぐ授業づくり」を受けて、児童の「学び」が生活する力や将来の働く力につながっていくようにするためには、「学び」を縦や横方向につなげていく（資料1）ことが大切であると考えている。

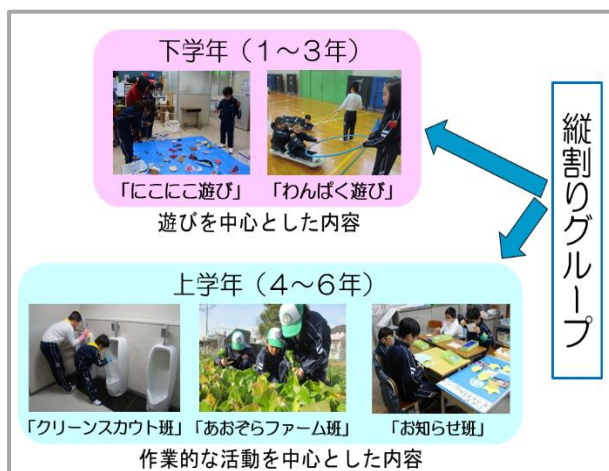
そこで、1年次の令和2年度は縦の「学び」をつなぐことに、2年次の令和3年度は横の「学び」をつなぐことに重点を置いて研究を進めることとした。そのため、年度ごとに研究内容に合ったテーマを設定し、研究に取り組むことにした。



(資料1) 「学び」をつなぐ方向

(2) 令和2年度小学部のテーマ設定について

本校小学部の特別活動は「みんなのじかん」と呼ばれ、学習指導要領の主旨を生かすため学習内容や学習活動を工夫して取り組んでいる。授業は週に1単位時間で行われている。平成27年度には、「望ましい集団活動」をキーワードに特別活動の授業内容の見直しを行い（資料2）、令和元年度まで見直した内容で実施をしてきた。しかし、小学部では近年の児童数増加に伴って教育課程の検討を行った。その結果、令和2年度からの特別活動は、1～3年の下学年は学年別、4～6年の上学年は縦割りの3グループで実施することとした。授業形態の変更、さらには令和2年度より小学部では、新学習指導要領が全面実施されることもあり、昨今の児童の実情を踏まえながら、再度特別活動の学習内容や学習活動の見直しが必要であると考えた。そこで、小学部の目指す児童像である「なかよく 元気に がんばる子」を育てるために、キャリア教育の要となっている特別活動を取り上げ、下学年と上学年の児童の「学び」をつなぐ授業づくりを目指して研究を進めることとした。



(資料2) 平成27年度の特別活動

(3) 令和3年度小学部のテーマ設定について

児童が授業を通して学んだことは、各授業間でつなげていくことが大切であると考えている。そこで、授業づくりを通して、単元や教科等の横の「学び」をつなぐ学習内容や指導方法等について検討し、小学部の目指す児童像を具現化する実践を進めることとした。

2 令和2年度の研究

(1) 研究の進め方

以下の三つの取組を通して、特別活動の授業研究を進めることとした。

取組1 授業づくり

新学習指導要領に基づき、学習内容や学習活動の検討を行う。



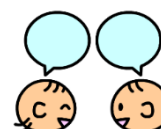
取組2 研究授業

全校の研究テーマである『学び』をつなぐと「主体的・対話的で深い学び」の視点で研究授業を行う。



取組3 下学年と上学年の「学び」をつなぐ

互いの実践を知り、「学び」をつなぐ視点から大切にしていることを共有する。



以上の三つの取組を進めるに当たり、部で行う現職教育では以下の内容を実施した。

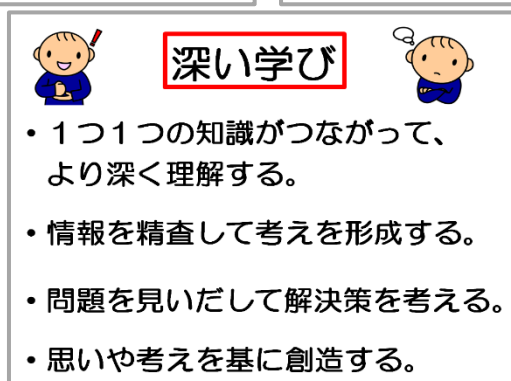
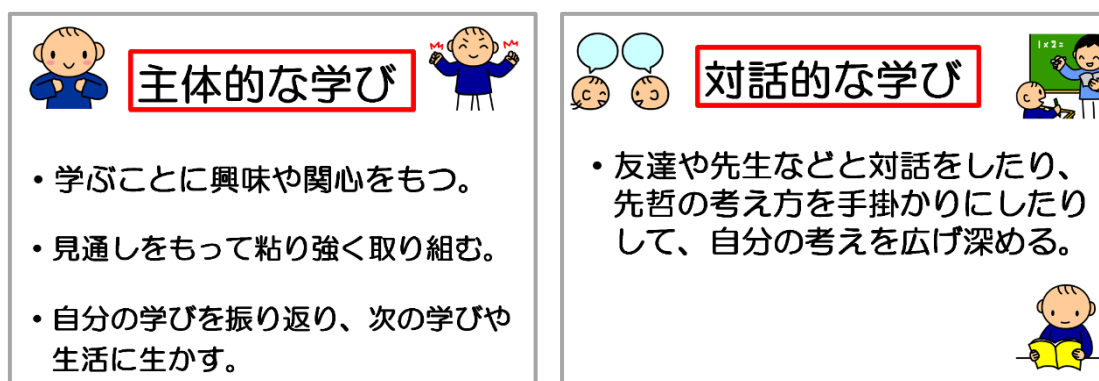
時期	内容
4月	・ 小学部の研究の概要について
6月	・ 特別活動について ・ 授業づくり〈グループワーク〉
7月	・ 主体的・対話的で深い学びについて ・ 授業づくり〈グループワーク〉
9月	・ 3年、クリーンスカウト班、あおぞらファーム班の取組紹介
10月	・ 1年 部研究授業討議会 ・ 2年 部研究授業討議会 ・ 特別活動において、児童の内面を育てるために大切にしている学習内容や学習活動、支援や手立て〈グループワーク〉
11月	・ おもてなしキッズ班 全校研究授業討議会 ・ 研究のまとめ

(2) <取組1 授業づくり>について

年度初めに指導者間で話し合い、大まかな学習内容や学習活動の検討を行った。下学年は学年別に清掃を中心とした内容で、上学年は中学部や高等部の作業学習とのつながりを意識し、キャリア形成を中心とした清掃（クリーンスカウト班）、園芸（あおぞらファーム班）、校内環境整備（おもてなしキッズ班）に分かれて活動を行うこととなり、六つのグループがそれぞれ授業づくりを進めていくこととなった（資料3）。

まず、授業づくりの研究を進めるに当たり、本校小学部の特別活動の教育課程上の位置付け、学

習指導要領の特別活動の目標や内容、全校テーマにある主体的・対話的で深い学びの視点（資料6）について、小学部の指導者全員で確認した。その後グループごとに、「小学校学習指導要領解説特別活動編」を基に、特別活動の三つの視点（資料5）や三つの柱（資料6）、主体的・対話的で深い学びの視点（資料4）に沿って活動内容の検討を行った。



（資料4）主体的・対話的で深い学び

特別活動の三つの視点

・人間関係形成



・社会参画

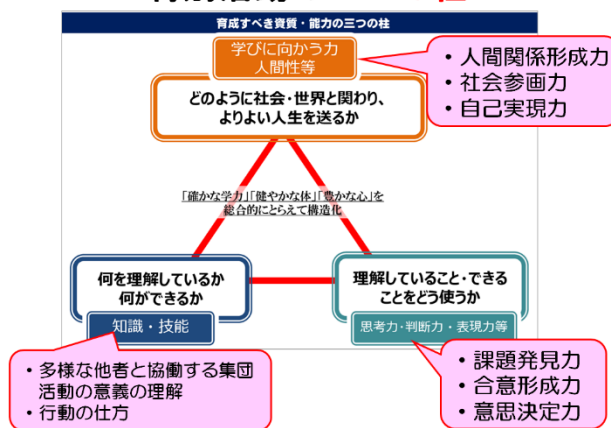


・自己実現



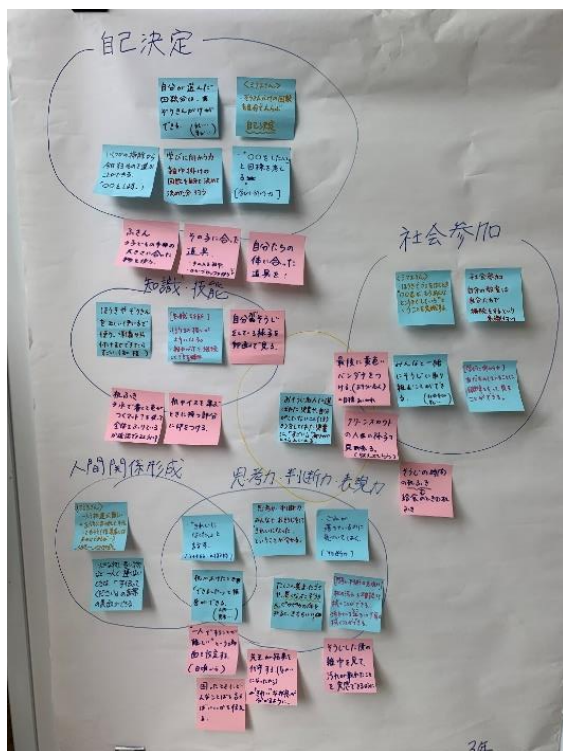
(資料5) 特別活動の三つの視点

特別活動の三つの柱

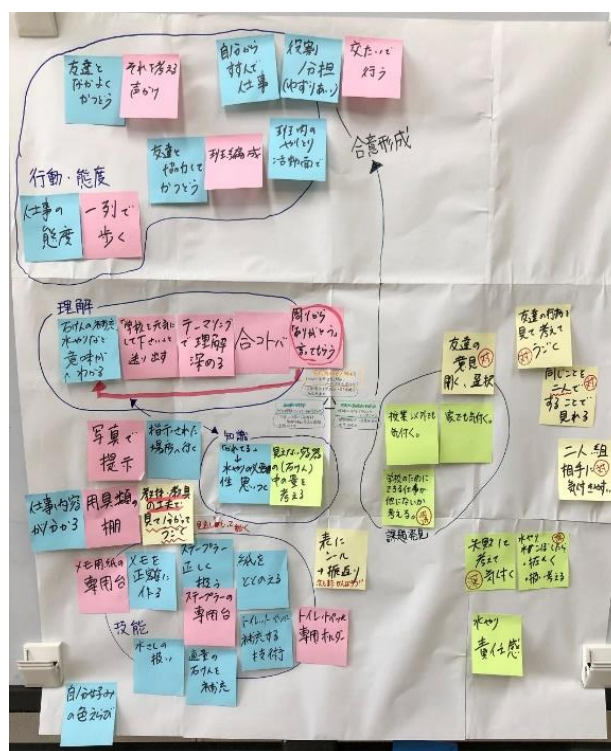


(資料6) 特別活動の三つの柱

各グループ、意見交換しやすいうように付箋を使いながら話し合いを行った(資料7、8)。学習内容や学習活動を検討する機会を重ねたことで、特別活動の三つの視点や三つの柱、主体的・対話的で深い学びの視点に沿った内容で授業づくりを進めていくことができた。



(資料7) 3年団



(資料8) おもてなしキッズ班

(3) <取組2 研究授業>について

1年、2年、おもてなしキッズ班の3グループにおいて、特別活動の研究授業を実施した。そのうち、おもてなしキッズ班を全校研究授業、1年と2年を部研究授業とした。

(4) 令和2年度 全校研究授業学習指導案（児童の実態と個別目標は省略）

特別活動学習指導案

指導者 教諭 塩見祐子（T1） 教諭 古市幸士（T2）
教諭 橘 紀子（T3） 教諭 小島慶子（T4）
教諭 逸見晴香（T5） 講師 成行恭子（T6）

- 1 日 時 令和2年10月14日（水曜日）第5校時（13：15～14：00）
2 学 級 小学部高学年 おもてなしキッズ班 12名 4年5名（男子3名、女子2名）
5年4名（男子1名、女子3名）
6年3名（男子2名、女子1名）
3 場 所 小学部4年1組教室（107教室）、小学部4年2組教室（108教室）
4 単 元 名 おもてなしの気持ちを届けよう
5 単元について

- (1) おもてなしキッズ班の校内美化の活動は、トイレトペーパーや液体石けんの補充、校内を植物で飾る活動など、学校を過ごしやすくするための大切な役割を担っている。物の補充や植物への水やりは、児童にとって具体的で分かりやすく、課題や問題点を見付け、自分で判断して行動する力を育てることができる。また、活動に対する周囲からの称賛は、自分たちの活動が人に喜ばれていることや人の役に立っていることを知らせ、やる気を喚起し、達成感や自己有用感を高めることができる。さらに、活動場所を限定し、ペアで取り組むことで動きを合わせたり、協力したりする場面が生まれ、認め合う気持ちの育成やより良い人間関係の形成につなげることができる。

児童はこれまでに学級や学年という小集団での係活動を通して役割を果たす経験を積み重ねてきている。おもてなしキッズ班の活動はこの経験を生かし、学校全体に視線を向けた、より良い学校づくりへと活動を広げることができる。班の一員として、役割を果たす活動の繰り返しで獲得していく様々な力とおもてなしの気持ちは、今後の学校生活や社会生活にとって大切な生きる力になると考え、本単元を設定した。

- (2) 小学部高学年4、5、6年生の特別活動は縦割りの三つのグループに分かれ、前期と後期でメンバーを入れ替えて活動している。本グループは5月から10月の半年間、おもてなしキッズ班として活動しているグループである。今年度から新しく立ち上げた班であるが、一学期からの活動を通して、ほとんどの児童がおもてなしキッズ班の一員としての自覚が芽生えてきている。意欲や関心の面では、活動の内容を理解し、目的意識をもって取り組むことのできる児童から、見通しがもちにくかったり、自信がなかったりして、多くの場面で支援が必要な児童がいる。また、友達とのやり取りの面では、友達が困っているときに手伝うことができる児童、どの活動も自分一人でしたい気持ちが強く、役割分担や譲り合いがまだ難しい児童、指導者の支援が必要な児童など、その実態には大きな差がある。

- (3) 指導にあたっては、おもてなしキッズ班のワッペンが付いたベレー帽をかぶって集合することで所属意識や連帯感を高め、始まりを意識して集合後すぐに活動ができるようにする。学習の始まりには、活動の内容や目的が盛り込まれた歌「おもてなしキッズのうた」（古市幸士作詞、作曲）を歌うことで、活動内容を意識させ、期待感を高めたい。また、話し合いや協力の場面を想定し、児童の実態や相性を考えて班編成をする。

児童が自分たちで判断して活動を始められるように、液体石けんや水指し、トイレトペ

ーパーがセットできる用具棚を準備しておく。液体石けんの補充や植物への水やりは友達と順番や量を相談しながら活動する場となるよう、容器はそれぞれ1個ずつとする。また、各トイレにはトイレトペーパーを2個挿し込めるラックを置き、減っていれば視覚的にすぐ確認できるようにしておく。児童が自ら分かって活動に取り組める教材教具を使用することで、自分の力で役割を果たす経験を積み重ね、主体的に取り組む態度を育てたい。

毎時間活動の終わりには、おもてなしチェック表におもてなしブルーシールを貼り、目に見えないおもてなしの気持ちを視覚化して知らせるとともに、1～6班のおもてなしブルーシールが増えていくのを見ることで、達成感や連帯感を高めたい。また、トイレトペーパーや鉢におもてなしキッズ班のロゴを付け、活動を校内に広く知らせることで、児童が称賛される機会を増やし、自己肯定感や自己有用感を高めたい。さらに、児童の活動が学校の役に立っていることや人から喜ばれていることを繰り返し伝え、誰かのために働くことの喜びを実感できるようにすることで、中学部、高等部の作業学習や将来の就労へとつなげたい。

6 目 標

- (1) おもてなしキッズ班の活動内容が分かり、意欲や目的をもって活動する。
- (2) 足りない状況を見付け、自主的に行動する。
- (3) 班の友達と役割分担をしながら活動する。
- (4) 友達と協力して、最後まで責任をもって活動する。

7 指導計画（全17時間） 本時 16/17

内容 \ 時数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
結団式をしよう	○																
おもてなしキッズ班の活動を知ろう	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
植物を飾りに行こう		○															
植物の世話をしよう		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
トイレトペーパーと液体石けんの補充をしよう			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
メモ帳を作ろう						○	○	○		○	○		○	○	○	○	
メモ帳を配りに行こう									○			○		○			
修了式をしよう																	○

8 児童の実態・個別目標（省略）

9 本時の学習

(1) 目 標

- ・おもてなしキッズ班の活動内容や目的を知る。
- ・水やりやトイレでの補充場面では、足りない状況を見付け、自分で考えて行動する。
- ・自分の意見を伝えたり、友達の意見を聞いたりする。
- ・学習を振り返り、頑張ったことを発表する。

(2) 準備物

用具棚（水指し、おもてなし用トイレトペーパー、籠、液体石けん、クロス）、ベレー帽、トイレトペーパーラック、植物、歌詞、CD、CDデッキ、タイマー、チェックカード、トイレの写真カード、キャスター付きホワイトボード、おもてなしチェック表、顔写真、おもてなし中看板、おもてなしブルーシール、トイレトペーパー、トイレトペーパー包装紙、マスキングテープ、メモ用紙、用紙台、ステープラー、ステープラー台、振り返りボード

(3) 学習指導過程

学 習 活 動	活動への支援と手だて												
＜始業前＞ ・ベレー帽をかぶる。 ・用具の準備をする。 ・班ごとに着席する。	・おもてなしキッズ班の活動への意識や意欲を高められるように、休み時間に行う活動を設定しておく。 ・自主的に準備に取り組むことができるように、担当する準備物や用具の置き場所を決めておく。 ・班ごとに着席できる座席にしておくことで、一緒に活動する友達を確認できるようにする。												
1 始まりの挨拶をして、「おもてなしキッズのうた」を歌う。	・学習の始まりが意識できるように、Aには、全員が注目しているのを確認してから号令を掛けるよう促す。 ・自信をもって歌えるように、「おもてなしキッズのうた」の歌詞をホワイトボードに貼っておく。 ・活動への期待感や仲間と一緒に活動する意識がもてるように、「おもてなしキッズのうた」に簡単な振りを付け、全員で歌う。歌詞のなかに活動内容や合言葉を入れることで、見通しや目的意識をもって活動できるようにする。 ・Aが前に出てみんなの手本となることで、班長としての意識が高まるようにする。												
2 本時の活動を確認する。	・目的を意識できるように、気持ちを込めて水、トイレトペーパー、液体石けんを届けることを伝え、学校のみんながおもてなしを待っていることを知らせる。 ・おもてなしの気持ちや意欲を高めるために、おもてなしチェック表が「おもてなしブルーシール」でいっぱいになってきていることを伝えたり、全員で準備物がそろっているかを声に出して確認したりする。												
3 班ごとに活動する。 （1）役割分担をする。 <table><tr><td>1班</td><td>A・B／T4</td><td>4班</td><td>G・H／T6</td></tr><tr><td>2班</td><td>C・D／T3</td><td>5班</td><td>I・J／T1</td></tr><tr><td>3班</td><td>E・F／T5</td><td>6班</td><td>K・L／T2</td></tr></table>	1班	A・B／T4	4班	G・H／T6	2班	C・D／T3	5班	I・J／T1	3班	E・F／T5	6班	K・L／T2	・児童同士で役割分担をすることができるように、必要に応じて指導者が言葉掛けをする。 ・D、F、Hが役割を選択することができるように、T3、T5、T6は水指しとチェックカードを提示する。
1班	A・B／T4	4班	G・H／T6										
2班	C・D／T3	5班	I・J／T1										
3班	E・F／T5	6班	K・L／T2										

(2) 準備をし、植物に水やりをする。

活動場所	
1 班	正面玄関
2 班	プレイルーム
3 班	正面玄関
4 班	プレイルーム
5 班	中央玄関
6 班	プレイルーム

(3) 教室に戻り、水やりの道具を片付け、トイレでの活動の準備をする。

(4) 補充をする。

・おもてなし用ペーパー

活動場所	
1 班	身障者トイレ 2 階中央トイレ
2 班	高等部職員室トイレ
3 班	保健室前トイレ
4 班	東トイレ 2 階東トイレ
5 班	小・中学部職員室トイレ
6 班	正面玄関トイレ 2 階中央トイレ

- ・液体石けんや水指し、おもてなし用トイレットペーパー、籠をセットした用具棚を定位置に置いておくことで、児童が自分たちで準備したり片付けたりできるようにする。
- ・整列して前から順番に番号を言うことで、並んで歩くことが意識できるようにする。
- ・歩くペースが速くなる児童や、列になって歩く意識が低い児童には、その都度言葉掛けをして意識付ける。
- ・友達と交代して水やりをする場面を設定するために、水指しは一つだけ用意しておく。
- ・交代するタイミングが分かるように、水指しには半分の水量のところに印を付けておく。
- ・T 1～T 6 は鉢の受け皿が満ちていることや植物に元気がなくなっていることに気付けるよう支援する。
- ・D、F、H が水を注ぐことができるように、T 3、T 5、T 6 は必要に応じて手を添えて援助する。
- ・水やりを交代するときは、「どうぞ。」「ありがとう。」と言って友達とやり取りできるように、指導者が語頭音を言って促したり、一緒に言ったりする。
- ・水やり後は、植物が元気になり、喜んでくれる人がいることを伝えることで、学校のために活動することの大切さややりがいを感じることができるようにする。
- ・友達同士のやり取りを大切にするために、困っている児童がいれば同じ班の児童に手伝ったり言葉を掛けたりするよう促す。必要に応じて近くにいる指導者が言葉掛けや指さしをする。
- ・本時の活動場所が分かるように、写真カードを掲示しておき、移動の前には確認するよう促す。
- ・周囲の人におもてなしの活動中であることを知らせるために、トイレの入り口付近に設置する看板を用意しておく。
- ・置く場所や必要数が明確になるように、専用のトイレットペーパーラックをトイレに設置しておく。
- ・予備のトイレットペーパーは一つのトイレに最大 2 個までとし、ラック以外の場所に置こうとする場合には、次回の補充に使うことを伝え、持ち帰るよう促す。
- ・トイレの中へ入ることに抵抗がある F が安心して活動できるように、T 5 はトイレの外にラックを持って行き、補充ができるようにする。

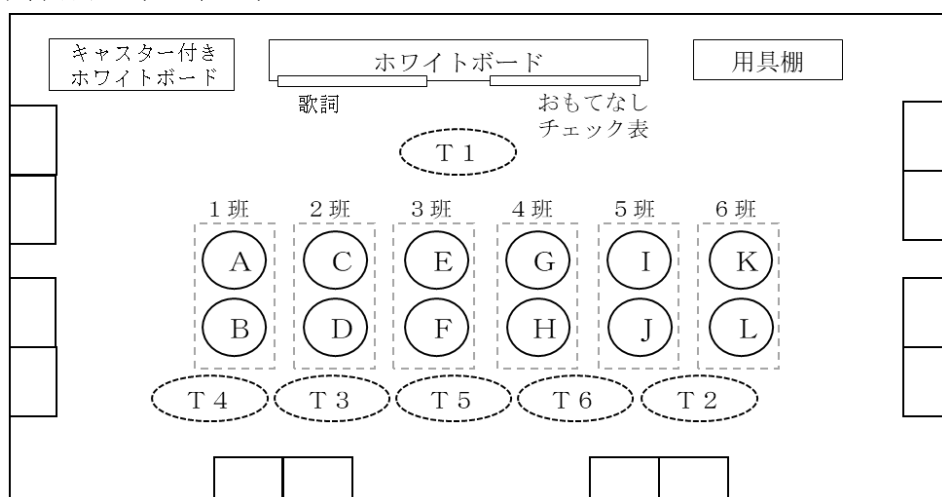
液体石けん	C、I、J、K、Lが適量を意識できるよう、T 1、T 2、T 3は補充する前に注意を促す。 - Dが適量を補充することができるように、T 3は手を添えて援助する。 - こぼれてしまった場合には、なぜこぼれてしまったのか児童が原因を考えたり、次の活動のヒントとなる言葉掛けを行ったりする。こぼれた液体石けんはクロスで拭き取るよう促す。
(5) 活動を振り返り、「おもてなしブルーシール」を貼る。	- 達成感を味わえるように、活動ごとに「おもてなしブルーシール」を貼れるようにしておく。 - シールを貼る位置が分かりにくい児童には、貼る箇所を指さしたり、印を付けたりする。
(6) 次時の準備をする。	- スムーズに活動に取り掛かることができるように、各班の机には、必要な道具を入れた籠を準備しておく。 - 用具棚のおもてなし用トイレットペーパーが減っていることを伝え、次回補充するためのトイレットペーパーを作ることを意識付ける。 - 作ったメモ帳を校内の人に配ることを知らせ、目的意識をもって活動できるようにする。 - できるだけ一人でメモ帳を作ることができるように、用紙台やステープラー台を用意しておく。 - 活動の終わりが分かるように、タイマーで知らせる。
4 振り返りをする。	- 自己評価をしたり、友達を選んだ活動を知ったりすることができるように、活動のイラストが付いた振り返りボードと顔写真を用意する。 - 児童が自分の活動を振り返ることができるように、水、トイレットペーパー、液体石けんの三つのおもてなしを無事に届けることができたか、一つ一つの項目について確認する。 - 児童の頑張りを称賛するとともに、三つの活動が人の役に立っていることや喜ばれていることを伝えることで、おもてなしの気持ちを感じることができるようにする。
5 合言葉を言い、終わりの挨拶をする。	- Aの掛け声に合わせて、「つながって役立って笑顔にしたい」という合言葉を全員で振りを付けて言うことで、所属意識を高め、次時への意欲を高める。 - 学習の終わりが意識できるように、Aには、全員が注目しているのを確認してから号令を掛けるよう促す。
<授業後> 教室や道具の片付けをする。	準備した物と同じ物を片付けするように役割を分担しておくことで、最後まで責任をもって活動する態度を身に付けられるようにする。

(4) 評価

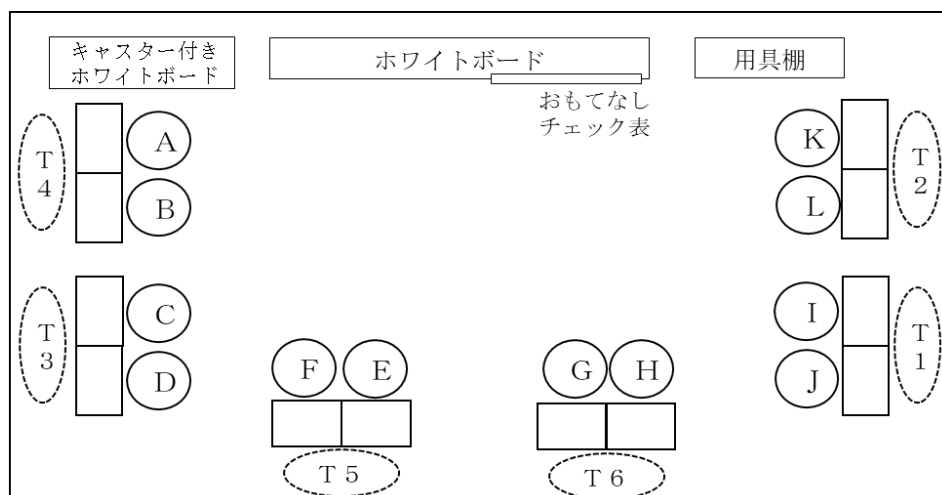
- ・「おもてなしキッズのうた」を歌ったり、音楽に合わせて体を動かしたりして活動を知ることができたか。
- ・届ける相手のことを意識して活動することができたか。
- ・友達と代わり合って水やりをすることができたか。(A、B、C、E、G、I、J、K、L)
- ・指導者と一緒に水指しを持ち、水やりをすることができたか。(D、F、H)
- ・必要な数だけトイレトペーパーを補充することができたか。
(A、B、C、E、G、I、J、K、L)
- ・トイレトペーパーを置く場所が分かり、補充することができたか。(D、F、H)
- ・液体石けんが減っていることに気付き、適量を補充することができたか。
(A、B、C、E、G、I、J、K、L)
- ・指導者と一緒に液体石けんを補充することができたか。(D)
- ・自分の意見を言ったり友達の意見を聞いたりして話し合い、役割分担することができたか。
(A、B、C、E、G、I、J、K、L)
- ・2種類の具体物から、自分のやりたい役割を選ぶことができたか。(D、F、H)
- ・頑張った活動を選んだり発表したりすることができたか。

10 配置図

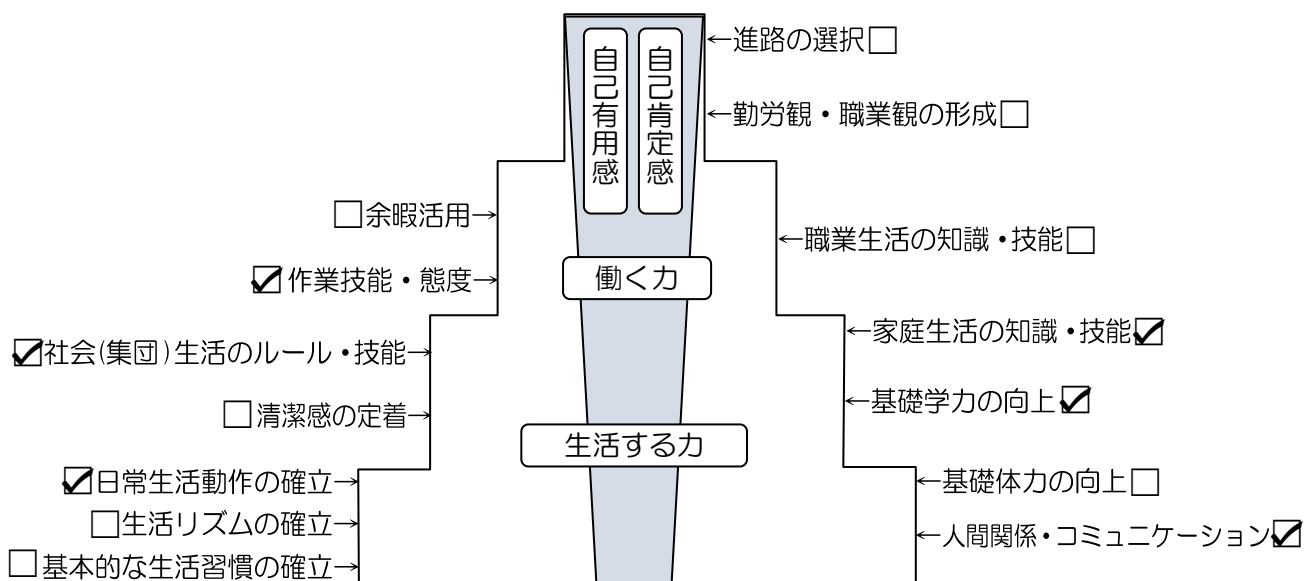
<学習活動1、2、4、5>



<学習活動3 (1)、3 (5)>



11 自立と社会参加に向けた学習内容のピラミッドのチェック



(5) 令和2年度全校研究授業 研究討議の記録

①研究テーマに沿った授業づくりで工夫したこと

「学び」をつなぐ授業

- ・ 中学部や高等部の作業学習につながるように、水やり、トイレトペーパーや液体石けんの補充、メモ帳作りなど作業学習的な活動で授業を組み立てた。
- ・ 作業学習や将来の就労につながるように、教材や賞賛方法を工夫し、誰かのために働く喜びを実感できるようにした。
- ・ 学級での係活動や他の教科等の学習で役割を果たしてきた経験を生かして、おもてなしキッズ班の活動では、場所や相手を学校全体に広げ、役割を果たす場面を設定した。



水やり



トイレトペーパーの補充



石けんの補充

主体的・対話的で深い学びの視点

【主体的な学びの視点】

- ・ 毎回活動の流れを同じにすることで、見通しをもって取り組めるようにした。
- ・ 使用する水やり用の水指し、補充用のトイレトペーパーや液体石けんなどをセットできる用具棚を準備し、自分で道具の準備や片付ができるようにした。

【対話的な学びの視点】

- ・ どの活動も二人組のペアで行うことで、役割分担や協力する場面が生まれるようにしたり、友達が活動する様子を見て良いところを学んだりできるようにした。

【深い学びの視点】

- ・ 液体石けんの補充という少し難しい課題を設定することで、適量を補充するためにはどうすれば良いかを児童自身で思考できるようにした。



用具棚



話し合いで役割分担



協力してメモ帳作り

②児童の様子や変容

活動の流れを毎回同じにしたことで、児童は見通しや自信をもって、意欲的に取り組むことができた。最初是指導者と一緒に確認して準備していた活動に必要な道具を、児童は自分で考えて用具棚から準備したり、片付けたりするようになった。水やりでは、水指しの印をよく確認しながら、「どうぞ。」「ありがとう。」のやり取りを覚えて、友達と交代し協力しながら取り組めるようになった。トイレトペーパーの補充では、トイレに行くとすぐにトイレトペーパーラックを確認するようになり、必要な個数を自分で判断して補充することができるようになった。また、

液体石けんの補充では、最初は多く入れすぎてこぼしていた児童が、次の時間にはほんの少しだけ補充するようになり、そこから徐々に量を調節し、適量を入れることができるようになった。メモ帳作りにおいては、メモ用紙台やステープラー台といった教材教具を工夫したことで、どの児童もすぐにやり方が分かり、友達と役割分担しながら集中して作業に取り組むことができた。そして、どの活動もペアで取り組んだことで、指導者を交えながら友達と話し合うなかで、自分の思いを友達に伝えたり、やりたい役割が重なったときは友達に譲ったり、分担し協力して道具を運んだりするようになった。

繰り返し活動するなかで、おもてなしチェック表にシールが溜まっていくことで、児童は達成感を味わうことができていた。また、活動中に通りがかった指導者から「いつもありがとう。」と言葉を掛けられたりすることで、児童は自分たちの活動が周囲の人の役に立っていることや喜ばれていることを実感し、やりがいをもって活動に取り組むことができるようになった。



用具棚から道具を準備



分量が分かる水さし



ピッキングしやすい補助具（メモ用紙台）



不足分を判断できる
トイレトペーパーラック



活動の成果が分かる
おもてなしチェック表



留める位置が分かる補助具
（ステープラー台）

③本単位における特別活動の三つの視点

【人間関係形成】

異学年の友達と協力して活動したり、相手への思いやりの気持ちをもったりすることと考えた。そのために、ペアの友達と話し合うなかで、役割分担したり譲ったりする場面を設定した。

【社会参画】

学校みんなの役に立つ活動をしたり、自分の役割を責任をもって果たしたりすることと考えた。そのために、水やり、トイレトペーパーや石けんの補充、メモ帳作りといった学校みんなから喜ばれる活動を設定した。また、活動に必要な道具をペアの友達と役割分担して持っていくようにした。

【自己実現】

自分で決めたことを実際に取り組んで達成したり、生活のなかに課題点や問題点を見付け、役割を果たしたりすることと考えた。そのために、自己選択し、友達に自分の意思を伝えて役割分担する場面を作ったり、トイレトペーパーや石けんの補充といったような、足りていない状況に児童自身が気付いて役割を果たすことができる学習活動を設定したりした。

④授業評価アンケートより



【「学び」をつなぐ工夫に対するコメント】

- ・トイレットペーパーや石けんなど、生活で使用しているものを補充することは、役に立っている実感がもちやすくとても良い活動だと思う。
- ・今まで学年やクラスのなかで果たしてきた役割を学校全体に視野を広げて行うことは、今後社会へ出るための取組につながり、まさに学びをつなぐことになっていると思う。
- ・生活意欲につながり、課題や役割に挑戦し遂行できる。中学部や高等部での作業学習に移行する前の般化する力を身に付けられる学習内容であると思う。
- ・誰かのために働く喜びは、高等部の進路学習でも取り組んでいるので、小学部で学んだことが高等部の学習にもつながっていると思う。



【主体的・対話的で深い学びが実現できていた児童の様子とそのための手立て】

視点	児童の様子	手立て
主	どの児童も使う水指しや籠、クロスなどを自分たちで準備し、それらを持って移動ができていた。メモ帳を作るときも、指導者の支援なしで、紙を取ったりステープラーで留めたりすることができていた。	トイレットペーパーがぴったりと収まる大きさの籠や児童の手の大きさに合った水差し、それらを整然と並べて収納できる用具棚、高等部のピックアップ作業に使えるようなメモ用紙置きやステープラー台など、使用する道具類がとてもよく考えて作られていた。
主・対	トイレットペーパーの補充をした児童が、指導者から「(使う人が)もっと元気になる方法があるよ。」と助言をもらい、おもてなしのマークが見えるように向きを変えていた。	児童に思考するきっかけを与える言葉掛けをしていた。この言葉は、そこにいない誰かのための活動であることを含んでいて、何のために補充しているのかという活動の意義を伝えていた。
対	ペアで活動するとき、友達と声を掛け合ったり、歩調を合わせて移動したり、物を手渡したりと互いを意識して取り組んでいた。	話し合いで役割を決める場面を設定したり、水差しを一つにして半分の所に印を付けて交代するようにしたりして、児童同士が関わられるように配慮していた。
対・深	液体石けんがこぼれたとき、指導者が「どうしてでこぼれたのかな。」と質問をすると、自分で考えて「多かった。」と答えていた。	なぜこぼれてしまったのかを児童が自分で考える場面が設定されていた。自分で考えることで、どうすべきだったのかが分かって、次の活動に生かすことができるようにしていた。

【次につながるアドバイス】

- ・授業中に、他部の人たちからの感謝のメッセージを伝える場面を作ると、良いのではないかな。

【チームへ一言】

- ・グループで活動しながらも個々の実態に合った言葉掛けをし、児童が考えながら活動する機会を作っていました。賞賛の言葉掛けがたくさんあり、子どもたちが達成感を得られていました。
- ・作業や仕事に対して、ポジティブなイメージがもてる授業だと思いました。ぜひ、低学年の子どもたちにも、おもてなしキッズ班の児童のかっこいい姿を見せたいと思いました。
- ・校内での小さな働きがこれからの将来的な作業や仕事につながり、勤労の喜びを感じることができる場所が良かったです。



(6) <取組3 下学年と上学年の「学び」をつなぐ>について

下学年と上学年の「学び」をつなぐためには、互いの実践を知ることが大切であると考えた。そこで、研究授業を参観したり、研究授業を実施しなかった3グループ(3年、クリーンスカウト班、あおぞらファーム班)の取組内容については、9月の現職教育で実践紹介をしたりして、活動を伝え合いながら情報共有する機会を設定した。

また、平成27年度に行った小学部の研究(「青の山の教育 第31集」参照)を通して、特別活動の実践が児童の内面の育ちにもつながるということが明らかとなった。そこで、令和2年度も児童の内面の育ちに着目し、下学年と上学年の指導者に分かれ、それぞれの特別活動において、児童の内面を育てるために大切にしていることについて話し合いを行った。意見については、「学習内容と学習活動の設定」、「支援や手立て」で大切にしていることを表(資料9、10)にまとめて整理し、下学年と上学年の指導者が互いに共通理解することができるようにした。

その結果、下学年では、同学年の指導者や友達と一緒に、係活動や教室の清掃など自分の身の回りのことをすることで、自分の役割を理解させることを大切にしていることが分かった。また、役割を遂行させるため、児童に分かりやすい活動内容を設定したり、児童が達成感を味わえるように賞賛する言葉掛けをしたりするなど、工夫点も明らかとなった。

上学年では、他学年の縦割りで活動する機会を設定し、友達と協力して活動することで、学校のみんなのためにという意識を理解させることを大切にしていた。また、班長等グループ内での役割意識や児童が主体的に動けるような言葉掛けなどの支援や手立てをしていることが明確になった。

互いの実践を共有し、大切にしていることを共通理解することは、「学び」をつなぐという視点でさらに授業づくりを高めていくことにつながった。

学習内容と学習活動の設定	支援や手立て
・学級や学年に所属していることを意識できるような活動を設定する。 ・身近な友達や指導者と一緒に活動したり、協力したりする場面を設定する。 ・友達と一緒に活動する楽しさを実感できるような活動を設定する。 ・達成感を味わえる活動を設定する。 ・自分の役割が分かるように、係の仕事や手伝いなど、友達や学年など身近な人たちのために役に立つ活動を設定する。 ・自信や見通しをもって取り組んだり、新しいことにもチャレンジしたりできるように、「できた」「わかった」の経験を積み重ねることができるような学習活動を設定する。 ・感謝されるとうれしい気持ちになる経験を重ねられるようにする。 ・できたことがすぐに分かるように、分かりやすい活動を設定する。 ・「自分はできる」という自信がもてたり、「できた」という達成感を味わったりすることができるように、必ず最後は「できた」で終わる活動内容にする。	・子どもたちが、自分は大事にされているということを実感できるような関わりをする。 ・自分から友達や指導者とやりとりできるように、児童が安心できるような人間関係づくりを行う。 ・係活動ができたとき、指導者は「ありがとう。」の言葉をたくさん伝えることで、達成感を味わえるようにする。 ・指導者が児童に「ありがとう。」を伝えることで、児童も友達に対して「ありがとう。」が伝えられるようにする。 ・なぜ掃除をしているのか、活動の意味を伝えることで、自分からやろうと思えるようにする。 ・「～さんがきれいにしてくれたからみんなが勉強できるね。」「助かったよ。」「みんなのためにありがとう。」などの言葉掛けをすることで、身近な人のために役に立ってうれしいと思える気持ちを育てる。 ・毎時間活動の最後には、お掃除名人を選ぶことで、「～さんすごいな。」「自分もお掃除名人に選ばれるように頑張ろう。」と、友達の頑張りを認めたり、友達の姿に憧れる気持ちをもったりすることができるようにする。

(資料9) 下学年が特別活動で大切にしている学習内容や学習活動の設定、支援や手立て

学習内容と学習活動の設定

	学習活動の設定		
学習内容	クリーンスカウト班	あおぞらファーム班	おもてなしキッズ班
①集団活動	・縦割りで活動することで、他学年の友達と協力して活動する機会を設定する。 ・少人数で活動することで、全ての児童に活動の機会を設定し、友達と協力したり、友達の活動に注目したりできるようにする。		
②話し合い	・児童同士で話し合い、役割分担をする。		
③自己選択、自己決定	・やる気を向上させて頑張る気持ちができるように、やりたい役割を自分で選ぶ。 ・授業の始めに自分で目標を決めることで、意欲的に取り組めるようにする。 ・小グループのなかで、今日自分がする活動を選択する。 ・活動後、頑張った活動をみんなの前で選択することで、互いの頑張りを認め合う。		
④役割	・班長や副班長の役割を設定する。		
	・掃除場所を分担することで、責任をもって、意欲的に活動に取り組めるようにする。	・グループリーダーの役割を設定する。 ・水やり当番を設定することで、役割を果たしたり、役に立っていることを実感したりできるようにする。	・作業に必要な用具を分担して持って行くことで、自分の役割を果たせるようにする。 ・水やりをする鉢と補充をするトイレの場所を分担することで、責任をもって役割を果たせるようにする。
⑤生活に結び付ける	・学校みんなの役に立つ活動を設定する。 ・誰のために、何のために、その活動をしているのかを伝えたり考えさせたりする。		
	・普段、自分たちがよく使う場所を清掃する。	・育てたものを小学部の友達にプレゼントする機会を設定する。	・自分たちがよく使うトイレトーパーや石けんを補充したり、よく目にする場所に植物を飾って世話をしたりする。
⑥自主性	・班の目標をみんなで言うことで、活動の目的を意識できるようにする。	・水やりを当番制にすることで、自主的に活動できるようにする。 ・前日に、「あおぞらノート」に集合場所や活動内容を記入することで、見通しをもって自分で行動できるようにする。	・必要な個数や量のトイレトーパーや石けんを補充するなど、ちょっと難しい課題を設定することで、意欲的に取り組み、達成感も味わえるようにする。
⑦般化	・生活に即した内容で分かりやすい活動を設定し、繰り返す行う。		
⑧振り返り	・毎時間、個別（個人やグループごと）に振り返りをし、全体でも振り返りをする。		
	・「そうじしましたカード」で、自分たちの頑張りを確認できるようにする。 ・活動の最後に、友達の前で発表をする。 ・動画を使って評価することで、自分や友達の頑張りを振り返れるようにする。	・グループごとに、3つの約束を守ることができていたかどうか振り返りをする。	・作業した後に、班ごとに「おもてなしチェック表」にシールを貼ることで、達成感や連帯感を味わえるようにする。 ・全体の場で、自分が頑張った活動を選択し発表したりすることで、互いの頑張りを認め合えるようにする。
⑨その他	・中学部や高等部の作業学習につながる活動で授業を組み立てている。		

支援や手立て

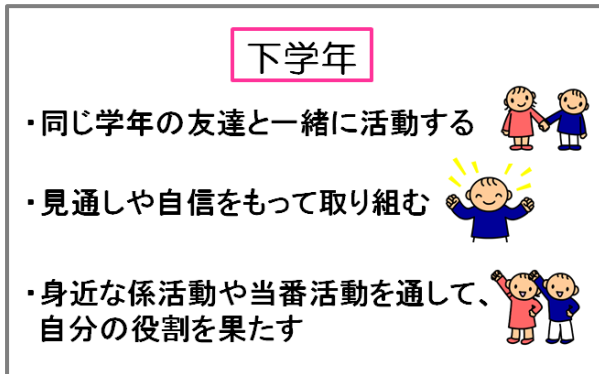
観点	クリーンスカウト班	あおぞらファーム班	おもてなしキッズ班
①教材教具	・所属意識を高められるように、そろいのユニフォーム（帽子、バンダナ）を用意する。 ・自分で分かって動ける教材教具を準備する。		
②学習活動	・学校みんなの役に立つ活動を設定する。 ・少人数で個別に活動することで、褒める機会を増やす。		
	・連帯感を深め、活動に意欲をもって取り組めるような合言葉をつくる。	・活動内容を分かりやすく表現した合言葉をつくる。	・活動の目的や活動内容を分かりやすく表した合言葉やテーマソングをつくる。
③言葉掛け	・何のためにしているのか活動の意味を伝える。 ・他者を意識し、自分たちの活動は誰かの役に立っているということを実感できるように、「みんなが喜んでくれるよ。」「ありがとう。」などの言葉掛けをする。 ・できたことだけでなく、頑張りや活動の過程を褒める。 ・子どもたちが自分で考えて行動できるように、児童の気づきを促す言葉掛けをする。		
④指導者の関わり方	・児童の気づきや児童同士の協力を促すために、基本的に見守る関わりをする。		
⑤評価の方法	・活動中のエピソードを指導者が全体に伝える。 ・評価カードで振り返ることで、担当の指導者に褒められたり、シールがたまることで達成感を味わったりすることができるようにする。 ・縦絞りを披露し、「縦絞りマスター」のバッジを渡す。 ・「そうじしましたカード」を貼ることで、清掃した教室の友達からお礼を伝えてもらえるようにする。 ・達成感を味わえるように、活動の終わりに認定証（終了証）を渡す。	・毎時間授業の最後に、3つの約束について素晴らしかった人の様子をテレビに映し出して紹介する。 ・「あおぞらノート」の裏側に、グループの指導者が賞賛のコメントを書き、修了式で渡す。	・全体での振り返りの場面で、指導者が活動中のエピソード（児童が頑張っていたことや、活動中校内の先生たちからありがとうと言われたことなど）を伝える。 ・おもてなしの気持ちを、「おもてなしチェック表」や「おもてなしブルーシール」で可視化する。 ・達成感を味わえるように、「おもてなし認定証」を渡す。
⑥その他	・中学部や高等部の作業学習や将来の就労につながるように、教材教具や学習活動、賞賛の方法を工夫し、誰かのために働く喜びを実感できるようにする。		

（資料 10）上学年が特別活動で大切にしている学習内容や学習活動の設定、支援や手立て

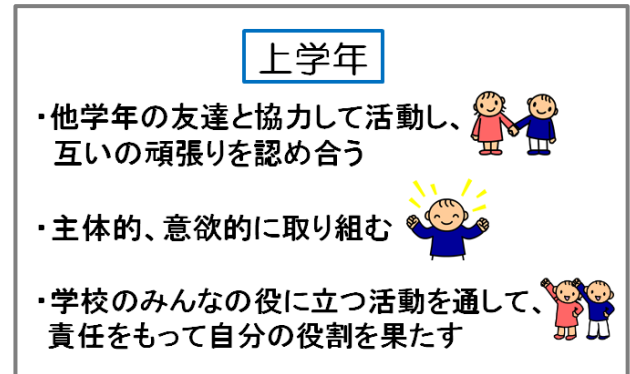
(7) まとめ

特別活動の授業づくりを行うなかで、下学年と上学年の縦の「学び」をつなぐ研究を進めてきた。

(6) の資料 9、資料 10 を作成したことにより、特別活動を通して期待する児童の姿が下学年（資料 11）と上学年（資料 12）それぞれにおいて見えてきたことで、下学年と上学年の目標とする児童の姿を指導者間で共通理解することができた。



資料 11 下学年で期待する児童の姿

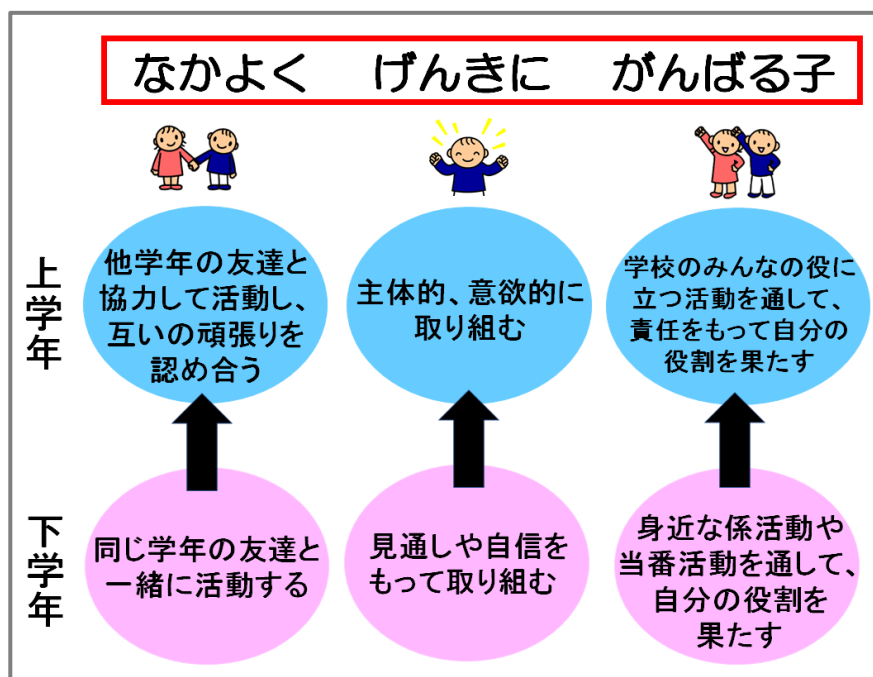


資料 12 高学年で期待する児童の姿

そして、下学年と上学年の期待する児童の姿を並べてみると、それぞれの姿は、小学部の目指す児童像「なかよく」「げんきに」「がんばる」を具体化した姿であるということが分かった（資料 13）。以上のことから、特別活動を通じて、小学部の目指す児童像である「なかよく げんきに がんばる子」を育てているということが明らかとなった。

今後の課題としては、下学年と上学年のそれぞれが大切にしている学習内容や学習活動、支援や手立てを下学年と上学年でつないでいくことで児童の「学び」をつなぎ、さらには下学年から上学年へと、期待する児童の姿もつないでいくことができる特別活動の授業を実践していくことが大切であると考えている。

また、主体的・対話的で深い学びの視点での授業づくりについては、令和 2 年度から取り組み始めたところであるので、今後も授業実践を積み重ねていくなかで、学習過程や手立てなど授業づくりの在り方について引き続き協議していく必要があると考えている。



資料 13 特別活動を通して期待する児童の姿

2 令和3年度の研究

(1) 研究の進め方

令和3年度は、小学部の研究の3本柱（資料14）を示し、以下の二つの取組を通して研究を進めることとした。また、令和3年度より、小学部では児童一人に1台ずつタブレット端末が配布され、授業実践のなかでタブレット端末の活用を進めていく必要がある。令和2年度末に小学部の指導者全員にとった研究や現職教育に関するアンケートでは、次年度への要望として、「タブレット端末を活用した研究を行いたい」という内容の意見がいくつか出ていた。そこで、研究の3本柱にタブレット端末の活用を設定し、授業づくりや教材研究に取り組むこととした。

小学部の研究の3本柱

- ①「単元や教科等をつなぐ」授業
- ②「主体的・対話的で深い学び」の視点
- ③「タブレット端末」の活用

（資料14）

取組1 授業研究

- ・学年中心に、小学部の研究の3本柱に沿って授業づくりに取り組む。
- ・研究授業や実践紹介を行う。



取組2 タブレット端末の教材研究

- ・操作やアプリケーションの活用方法などについての研修を実施する。
- ・活用方法について情報交換する。



以上の二つの取組を進めるに当たり、部で行う現職教育では以下の内容を実施した。

時期	内容
4月	・小学部の研究の概要について ・タブレット端末の操作方法やアプリケーションの活用方法について
5月	・「主体的・対話的で深い学び」について〈グループワーク〉
6月	・5年 部研究授業討議会
7月	・6年 実践紹介 ・タブレット端末の活用方法〈グループワーク〉
9月	・1年、3年、訪問学級 実践紹介
10月	・2年 全校研究授業討議会
11月	・上学年（4、5、6年） 部研究授業討議会 ・研究のまとめ1
1月	・研究のまとめ2

(2) <取組1 授業研究>について

①授業研究の進め方

学年、あるいはグループごとに、小学部の研究の3本柱に沿って授業づくりに取り組んだ。令和3年度は、授業研究を行う教科等は自由に設定できるようにした。そして、2年の算数科・国語科、5年の図画工作科、上学年（4、5、6年）の体育科の3本で研究授業を実施した。そのうち、2年を全校研究授業、5年と上学年体育を部研究授業とした。また、全校と部の研究授業を実施しなかった1年、3年、6年、訪問学級については、7月や9月の現職教育で実践紹介する機会を設定し、全学年等の取組について小学部の指導者全員で共有できるようにした。

(5) では、全校研究授業を実施した2年以外の学年等の実践について紹介する（4年と5年については、部研究授業の実践である）。

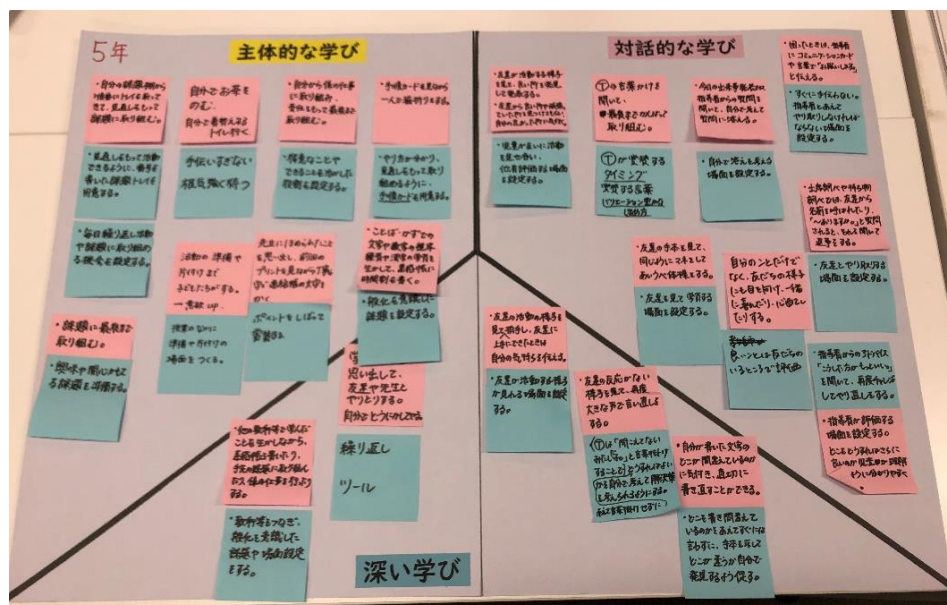
②「主体的・対話的で深い学び」についてのグループワーク

本校小学部の児童にとっての主体的・対話的で深い学びについて、学年ごとにグループワークを実施した。

具体的な内容としては、1校時の日常生活の指導を取り上げ、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」が実現できている児童の具体的な姿や様子を挙げ、姿や様子を基に、授業づくりにおける指導者の工夫（支援や手立て）を考え、主体的・対話的で深い学びの視点について分類や整理を行った。その際、意見交換しやすいうように付箋を使いながら話し合った（資料15）。

グループワーク後には、「身近な場面で、身近な児童の様子を基に考えることができたので、主体的・対話的で深い学びについてイメージがもてるようになった」「今までできていた支援や手立てが、主体的・対話的で深い学びを実現するための支援や手立てであったことを改めて確認することができた」「普段ゆっくりと学年の指導者全員で児童の様子について話し合う機会がもてないので、今回児童の様子を情報共有する良い機会となった」などの感想があった。主体的・対話的で深い学びについて、指導者間でイメージの共有を図ることができたとともに、具体的な児童の様子や指導者の支援の方法などについて、蓄積したり活用したりする良い機会となった。

しかし、「主体的な学び」や「対話的な学び」については考えやすかったが、「深い学び」が実現できている児童の様子を考えるのは難しかったという意見もあったので、研究授業や授業実践に取り組むなかで、引き続き主体的・対話的で深い学びについては協議していくこととした。



(資料 15)

国語科・算数科学習指導案

指導者 教諭 尾崎沙織（T1） 教諭 吉田 歩（T2）
講師 高畑舞子（T3）

- 1 日 時 令和3年10月13日（水曜日）第3校時（10：30～11：15）
- 2 学 級 小学部 第2学年 Aグループ8名（男子8名）
- 3 場 所 小学部2年1組教室（106教室）
- 4 題 材 名 おかいものおかいもの
- 5 題材について

(1) 買い物は、児童の生活にとって身近なものである。金銭を扱う学習は、数への興味を高めるとともに、今後の生活に役立つスキル習得につながる。買い物を題材にした絵本「おかいものおかいもの」（さいとうしのぶ作 株式会社ひさかたチャイルド）は、カエルが読者に買い物の手伝いを依頼する形で話が展開していく。簡単な買い物の歌を歌ったり身振りをしたりしながら一つ一つ品物を選んでいくことで、期待感をもって話を見聞きすることができる。数の導入段階にある児童にとって、友達と買い物でのやり取りをする活動を通して、数的要素について主体的に学ぶことができると考え、本単元を設定した。

(2) 本グループは、男子8名で構成されている。どの児童も買い物や金銭に興味があり、家庭やデイサービスで買い物の経験があるが、自分で金銭を扱ったことのある児童は少ない。10円硬貨や100円硬貨の金種を理解し、指示されたちょうどの易しい金額を出すことができる児童もいるが、種類ごとに分類することがまだ難しい児童もいる。また、書くことや読むことについての実態も様々であり、平仮名や片仮名の読み書きがある程度できる児童から平仮名を覚える段階の児童までいる。さらに、言葉によるコミュニケーションを進んで図ろうとする児童や決まった場面でのやり取りであれば発言する児童、ほぼ発語がない児童もいる。

学習活動全般において、初めてのことや環境の変化に対して不安や緊張感を抱いたり、集中力を持続させたりすることが難しい児童もいる。しかし、活動の流れをパターン化して見通しをもてるようにしたり、友達とやり取りする場面を設定したりすることで意欲的に学習に取り組める児童も多い。

(3) 指導に当たっては、学習に見通しがもてるよう、最初に学習内容を確認し、毎回同じ流れで進める。児童が興味をもって話を見聞きできるよう、プレゼンテーションソフトを用い、話の展開に合わせてイラストや文字を提示し、内容が理解しやすいよう工夫する。また、値段表示を日常生活に近い簡単な数値に変更し、後の買い物でのやり取りにつなげられるようにする。買い物でのやり取りでは、毎回店員と客の役割を交代したり、いろいろな友達とペアになったりし、楽しい雰囲気の中で活動できるようにする。全員が主体的に取り組むことができるように、値段表を見ながら金額を確認したり、タブレット端末のアプリケーションソフトを活用したりする。実態に応じたグループでの個別学習では、自分が買った（売った）品物や値段を記録して、本時の学習を振り返ることができるようにしたり、指導者と買い物のやり取りを繰り返して、次時の学習へつなげたりできるようにする。また、生活単元学習との関連を図り、学習したことを模擬店での買い物の場面で生かせるようにしたい。さらに家庭生活とのつながりも意識して学習を展開する。保護者に事前にアンケートを実施し、保護者のそれぞれの願いを指導につなげられるようにする。

6 目 標

- (1) 絵本に出てくる品物の名前や値段を読んだり書いたりする。【知識及び技能】
- (2) 選んだ品物の値段を見て、表示通りの金額を出したり、金額を確認して受け取ったりする。【思考力、判断力、表現力】
- (3) 言葉のもつ楽しさに気づき、物語の場面に合わせて身振りをしたり、買い物のやり取りをしたりする。【学びに向かう力、人間性等】

7 指導計画（全7時間） 本時 5 / 7

	1	2	3	4	5	6	7
「おかいものおかいもの」の話を見聞きする	○	○	○	○	○	○	○
品物の名前や値段を読んだり書いたりする		○	○	○	○	○	○
買い物でのやり取りをする		○	○	○	○	○	○
個別課題をする	○	○	○	○	○	○	○

8 児童の実態・個別目標（省略）

9 本時の学習

(1) 目 標

- ・絵本に出てくる品物の名前や値段を読んだり書いたりする。
- ・値段表を見ながら表示通りの金額を出したり、受け取ったりする。（A、B、C、D、H）
- ・指導者と一緒に表示通りの金額を出したり、受け取ったりする。（E、F、G）
- ・物語の場面に合わせて身振りをしたり、買い物のやり取りをしたりする。

(2) 準備物

テレビ、パソコン、タブレット端末、タブレットスタンド、HDMI ケーブル、配膳台、移動式ホワイトボード、品物、精算機、硬貨（1 円、5 円、10 円、50 円、100 円、500 円）、財布、買い物籠、金銭授受トレイ、エコバック、値段表、金額確認シート、ワークシート、ファイル、除菌スプレー、ウェットティッシュ、店員用サンバイザー、タイムタイマー、片付け用の籠、児童顔写真カード、話型カード、花丸カード

(3) 学習指導過程

学 習 活 動	活動への支援と手だて
1 始まりの挨拶をする。	・学習の始まりが意識できるように、当番の児童に号令を掛けるよう促す。
2 本時の学習内容を知る。	・学習内容をホワイトボードで掲示し、見通しをもって学習に取り組めるようにする。終わるごとに「終わり。」と言いながら、カードを外していく。
3 「おかいものおかいもの」の話を見聞きする。	・主体的に話を見聞きできるよう、プレゼンテーションソフトを用いて、テレビ画面で読み聞かせを行う。 ・視覚的に理解しやすいよう、話の展開に合わせて、イラストや文字、数字を提示する。その際、イラストの値段表示を簡単な数値に変更し、後の買い物でのやり取りにつなげられるようにする。

4 ペアで買い物の学習をする。		・繰り返し出てくる「おかいもののうた」に簡単な身振りを付け、歌ったり身振りをしたりすることで、話の展開を意識して、言葉と動作を結び付けられるようにする。 ・楽しい雰囲気で行活動ができるよう、買い物籠や各自の財布、エコバック、店員用サンバイザーを用意する。感染症予防のために、品物や籠はグループ数用意し、共用物については適宜消毒するようにする。硬貨を扱う観点からも、買い物の前後には消毒をするように言葉掛けをする。 ・いろいろな児童とやり取りができるように、毎時間異なるペアで店員と客になり、順番に買い物をする。役割は、最初に表にして示す。EとGは、アプリケーションソフト（DropTalk）を活用してやり取りできるようにする。																			
<table border="1"><thead><tr><th></th><th>客役</th><th>店員役</th></tr></thead><tbody><tr><td>1</td><td>D</td><td>F</td></tr><tr><td>2</td><td>B</td><td>H</td></tr><tr><td>3</td><td>A</td><td>E</td></tr><tr><td>4</td><td>G</td><td>C</td></tr></tbody></table> 【客役の児童】 ・絵本に出てきた5種類の品物のなかから買いたいものを一つ選ぶ。 【店員役の児童】 ・受け取った硬貨が正しいかを確認する。			客役	店員役	1	D	F	2	B	H	3	A	E	4	G	C	<table border="1"><thead><tr><th>客役の児童</th><th>店員役の児童</th></tr></thead><tbody><tr><td> ・支払場所には、品物と値段を対応させた値段表を置き、実態に応じて赤枠で印を付けたり、めくり式の金額確認シートを提示したりする。 ・値段表を見ながら、できる限り自分でちょうどの硬貨を出して「お願いします。」と伝えられるように話型カードを示す。 </td><td> ・めくり式の金額確認シートを精算機の手元に置き、受け取った硬貨が正しいかを確認することができるようにする。 ・合っているかどうかを言葉で伝えられるように、話型カードを付けておく。 </td></tr></tbody></table> ・T1、T2は、それぞれの課題に応じて達成できていたかどうかを伝え、花丸カードを渡す。自分で顔写真カードの下に貼るよう促し、達成感を味わえるようにする。 ・ホワイトボード下に写真で示した片付け用の籠を置き、各自使用したものを入れることができるようにする。 ・友達の買い物でのやり取りを主体的に見て学ぶことができるように、1グループ終わるごとに買った品物の名前や値段を全体で確認する。	客役の児童	店員役の児童	・支払場所には、品物と値段を対応させた値段表を置き、実態に応じて赤枠で印を付けたり、めくり式の金額確認シートを提示したりする。 ・値段表を見ながら、できる限り自分でちょうどの硬貨を出して「お願いします。」と伝えられるように話型カードを示す。	・めくり式の金額確認シートを精算機の手元に置き、受け取った硬貨が正しいかを確認することができるようにする。 ・合っているかどうかを言葉で伝えられるように、話型カードを付けておく。
	客役	店員役																			
1	D	F																			
2	B	H																			
3	A	E																			
4	G	C																			
客役の児童	店員役の児童																				
・支払場所には、品物と値段を対応させた値段表を置き、実態に応じて赤枠で印を付けたり、めくり式の金額確認シートを提示したりする。 ・値段表を見ながら、できる限り自分でちょうどの硬貨を出して「お願いします。」と伝えられるように話型カードを示す。	・めくり式の金額確認シートを精算機の手元に置き、受け取った硬貨が正しいかを確認することができるようにする。 ・合っているかどうかを言葉で伝えられるように、話型カードを付けておく。																				
5 個別課題をする。		・実態に応じたグループに分かれて個別課題を行う。																			
全員	・絵本に出てくる品物の名前や値段を、書いて読みたりする。 ・指導者と買い物のやり取りをする。	・一文字ずつ正しく文字を書くことができるように、十字リーダーの付いた升目のワークシートを用意する。 ・意欲的に書く学習に取り組むことができるように、登場人物のイラストを用いる。（A、B、H） ・手本をそれぞれ用意し、手元に置いてまねて書くことができるようにする。手が止まっていたら手本を指さしたり、升目の横に指導者が小さく書いて示したりする。（E、F、G） ・花丸を付けて賞賛し、指導者が指さしたところを正しく読めるようにする。 ・指導者と買い物のやり取りを繰り返し行い、次時の買い物学習につなげられるようにする。																			

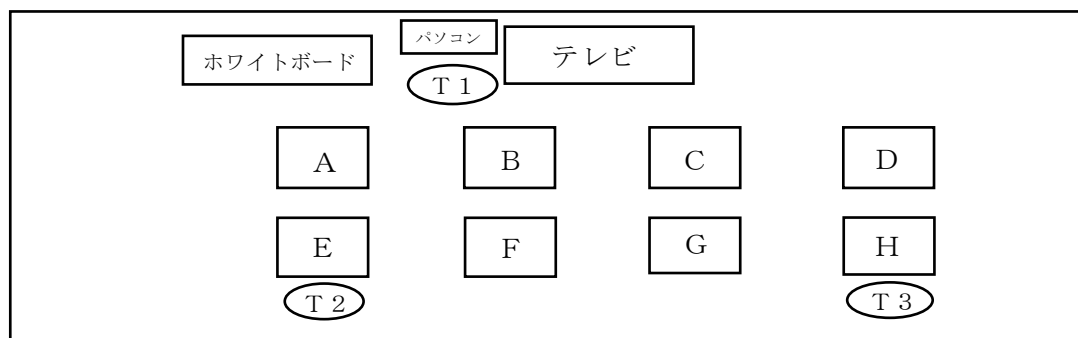
C D	・買い物学習を振り返り、課題プリントに取り組む。 ・値段や金銭についての文章問題に取り組む。	・ヒントカードを用いて、買い物学習で扱った品物や値段、買い物した感想を文章で書き表すことができるようにする。 ・絵本に出てくる品物を扱った文章問題を用意する。難しいときは、指導者と一緒に問題を読んでポイントとなるところを示し、自分で正しい答えを導き出せるようにする。
6	本時の学習を振り返る。	・取り組んだ課題プリントはおかいものファイルにとじ、学習の成果を振り返ることができるようにする。 ・課題を早く終えた児童は、アプリケーションソフト（BitsBord）を活用し、意欲的に絵本に出てくる品物や金銭の名前を学習できるようにする。
7	終わりの挨拶をする。	・各グループ1名ずつ前に出て振り返りを発表する。T2とT3もそれぞれの児童の賞賛すべき点を全体に伝え、次の学習への意欲につなげられるようにする。 ・学習の終わりを意識できるように、当番の児童に号令を掛けるよう促す。

(4) 評価

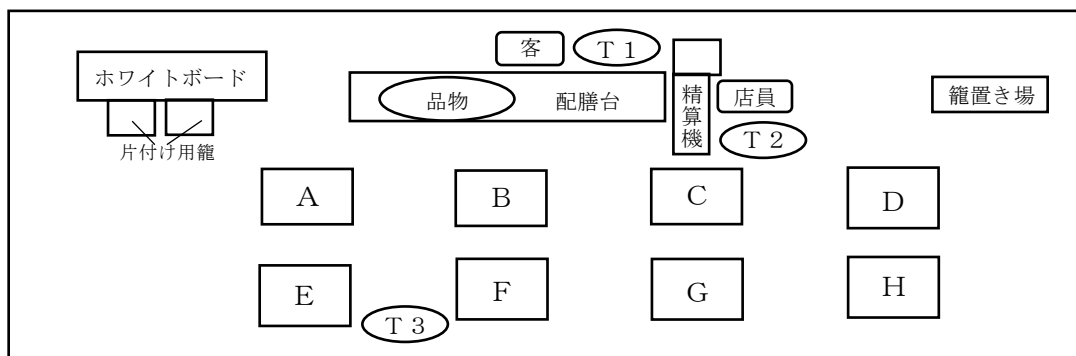
- ・絵本に出てくる品物の名前や値段を、指導者のヒントや升目の十字リーダーを手掛かりにして正しく読んだり、ワークシートに書いたりすることができたか。（A、B、C、D、H）
- ・絵本に出てくる品物の名前や値段を、指導者と一緒に読んだり手本を書き写したりすることで正しく読んだりワークシートに書いたりすることができたか。（E、F、G）
- ・値段表を見ながら10円、100円硬貨の金種が分かり、表示通りの金額を出したり、受け取った金額が正しいかどうかを確認したりすることができたか。（A、B、C、D、H）
- ・指導者と一緒に硬貨を出したり、金額を確認したりすることで、10円、100円硬貨を使って表示通りの金額を出すことや、受け取った金額を金額確認シートに対応させることができたか。（E、F、G）
- ・絵本を見聞きし、物語の場面に合わせて身振りをしたり、ポイントとなる話型を使って買い物のやり取りをしたりすることができたか。

10 配置図

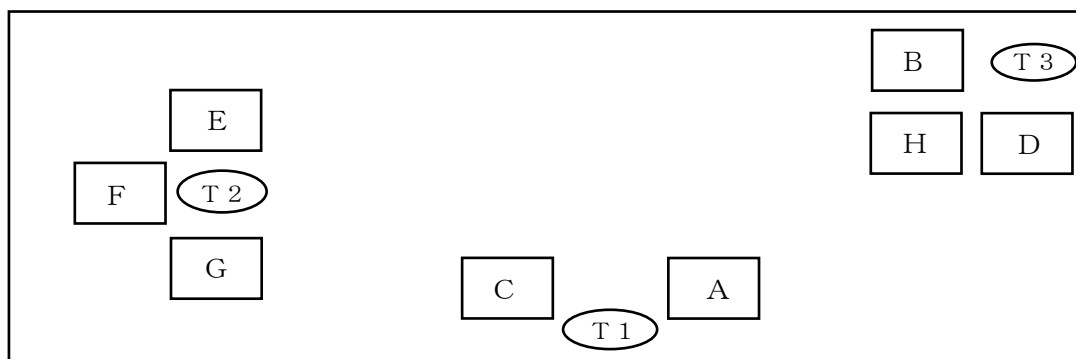
【学習活動1、2、3、6、7】



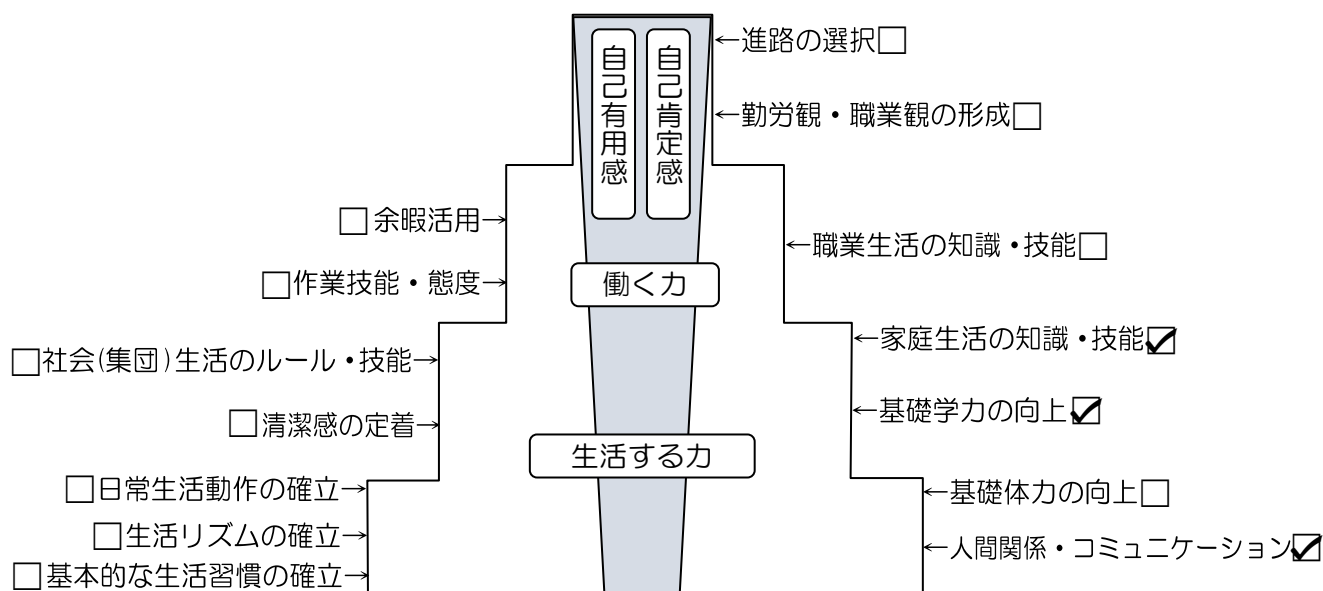
【学習活動 4】



【学習活動 5】



11 自立と社会参加に向けた学習内容のピラミッドのチェック



(4) 令和3年度全校研究授業 研究討議の記録

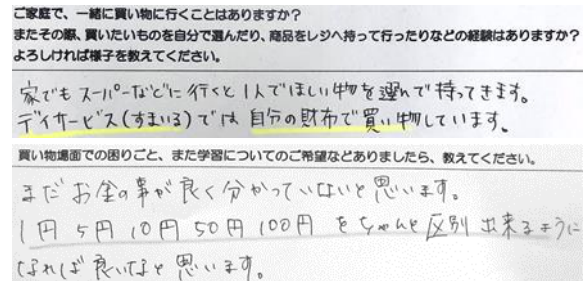
①研究テーマに沿った授業づくりで工夫したこと

「学び」をつなぐ授業

- ・金銭を扱う学習を繰り返し行い、生活単元学習での買い物学習に生かせるようにする。
- ・学んだことが家庭や社会生活とつながっているという実感がもてるように、事前アンケートで各家庭の買い物の実態や保護者の願いを把握する。買い物でのやり取りや個別学習のなかでそれぞれに応じた学習目標や内容を検討し実践する。



生活単元学習での買い物学習



事前アンケート

主体的・対話的で深い学びの視点

【主体的な学びの視点】

- ・見通しをもって取り組むことができるように、最初に学習活動を確認したり、活動の流れをパターン化して進めたりする。

【対話的な学びの視点】

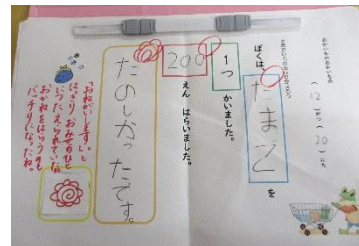
- ・友達とペアで買い物のやり取りをし、買った物や売った物を記録に残していくことで、自分の学習を振り返ることができるようにする。
- ・個別学習で指導者と買い物のやり取りをし、次時の学習へつなげられるようにする。

【深い学びの視点】

- ・個別学習での金銭を扱う学習を生かして、値段表や金額確認シートを使って、できる限り自分で金銭を扱うことができるようにする。



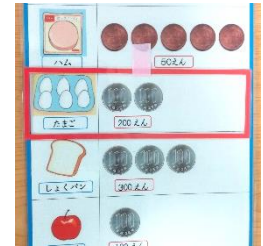
学習活動の提示



振り返りのワークシート



指導者との買い物のやり取り



値段表

タブレット端末の活用

- ・言葉によるコミュニケーションを図ることが難しい児童も、アプリケーション（DropTalk）を活用して自信をもって友達と買い物でのやり取りができるようにする。
- ・個別学習で、アプリケーション（BitsBord）を活用し、意欲的に品物や金銭の名前を学習できるようにする。



買い物学習での DropTalk の活用



個別学習での BitsBord の活用



②児童の様子や変容

絵本の読み聞かせでは、プレゼンテーションソフトを用いたデジタル絵本を用いて、歌ったり身振りをしたりしながら話を進めていくことで、ほぼ全員がT 1やテレビに注目して見聞きすることができるようになった。休み時間に絵本を本棚から取り、自分から読む児童も見られるようになった。

買い物学習では、客と店員の役割に分かれて取り組んだ。最初に順番を表にして示したり、それぞれの役割で使用するエコバッグや店員の帽子を一緒に準備したりすることで、見通しをもち役割を意識することができた。また、次の時間にしたい役を指導者に伝える児童もいて、主体的に取り組む姿が見られるようになってきた。買い物のなかでのやり取りについては、ポイントとなる話型を全体で確認し、実際の買い物学習の場面では、手元にも話型カードを置いて手掛かりになるようにした。最初は自信がなく小さな声の児童が多かったが、学習を積み重ねると大きな声で伝えられるようになった。アプリケーション（DropTalk）を用いた児童も、徐々にタイミングよく適切な言葉を選んで表出することができるようになった。

また、金銭の扱いについては、繰り返しの学習により、どの児童も学びが深まった。店員役の児童が、値段表と異なる金種を出そうとした客役の友達に対して「ぴったりじゃないよ。」と言葉を掛けたことがあった。また、半数の児童が1種類の金種であれば値札を見て正しく支払をすることができるようになった。そこで2種類の金種を組み合わせた値段の新商品を、毎時間一つずつ増やしていくことにした。少し難しい課題に挑戦することで、さらに意欲的に取り組むことができるようになった。

二人ずつの児童が順番に前へ出て学習する形にしたことから、待ち時間が長く、友達が買い物をする様子に注目しづらい児童がいた。そこで、買い物の様子をタブレット端末で撮影し、テレビに映し出すようにした。特に支払の様子に焦点を当て、全体で確認するようにすると「上手に払えたね。」といった児童の発言も増え、全体で学びを共有できるようになった。



絵本の読み聞かせ



ポイントとなる話型カード



金銭の確認をする児童



支払をする児童

③授業評価アンケートより

【「学び」をつなぐ工夫に対するコメント】



- ・国語科・算数科と生活単元学習の学習をつなぐことで、買い物するときに必要な知識やスキルの定着を図ることができると思った。
- ・買い物は直接生活と結びつく生きるために大切なものであるため、生活単元学習と算数科、数学科を結び付けながら、小学部から高等部へと積み重ねていかなければならないと思う。
- ・どの学年でも買い物にちなんだ学習をするので、金銭の種類や数え方などの基礎を算数科でしっかりと学んでおくことは大切だと思う。
- ・家庭との連携を大切に、保護者の願いをもとに学習目標や内容を設定することで、今後家庭生活にも般化させやすいと思った。
- ・各家庭から実態や願いを事前に聞いて学習を進めていき、その成果や子どもの変化など情報を共有することで実際の生活によりよくつながっていくと思う。



【主体的・対話的で深い学びが実現できていた児童の様子とそのための手立て】

視点	児童の様子	手立て
主	買い物練習では、どの児童も自分で買いたい物を選ぶことができていた。	実物に似せて作ったフェルト製のリンゴや食パンなどを買い物の商品として用意し、児童の興味を引き出していた。
主・対	全員が落ち着いて個別課題に取り組んでいた。真剣な様子でよく考えて、ワークシートの問題やタブレット端末の課題に臨んでいた。	実態に応じたワークシートが用意されており、児童が取り組みやすいように工夫されていた。児童が楽しみながら取り組めるタブレット端末のアプリケーション（BitsBord）を活用した課題も準備していた。
深	店員役の児童が、客役の児童がトレーに置いたお金を見て、「ぴったりじゃないよ。」と気付いて伝えていた。	店員役の児童が自分でぴったりかどうかを確認できるように、毎回同じ流れで買い物のやり取り練習を繰り返して行っていた。

【次につながるアドバイス】

- ・国語科・算数科の学習機会と考えると、金銭を扱う活動回数をもう少し増やしたり、指示された物を指定された個数選び出す機会を設定したりしても良いと思います。



【チームへ一言】

- ・物語を見聞きする、実践する、個別学習をするという流れが、意欲と学習効果を高め、さらに学んだことをそのまま生活に生かせる授業だと思いました。
- ・1時間を通して、導入、展開、振り返りがスムーズに流れていたと思います。
- ・前半で買い物したことを踏まえて後半の個別学習をすることで、児童一人一人が達成感を得ることができたと思います。
- ・タブレット端末を、やり取りする場面や個別課題で使用しており、学習場面のなかでタブレット端末が効果的に使われていたところが良かったです。

④実践の成果と課題

本単元で金銭を扱う学習を繰り返し行うことで、生活単元学習での模擬店の買い物学習は、自信をもって一人で金銭を扱うことができる児童が徐々に増えた。また、生活単元学習で毎回確認していた買い物でのマナーを本単元に生かすことができていた児童も多いた。それぞれの学びがつながり合うことで、買い物の基礎を押さえることができたと考えられる。また、「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」をもとに、各教科の見方・考え方を育てる教科指導と生活単元学習との関係性を踏まえ、それぞれの目標を押さえて指導することを通して、児童の学習内容を明確にすることができたと考ええる。

今後の課題は、学習したことを家庭や社会生活につないでいくことである。児童の将来の姿を見据えて、現段階で必要な買い物の力を明確にした上で、家庭や社会生活へ般化するための具体的な支援方法を検討し、提案していく必要があると考える。

本単元の授業において、タブレット端末の活用は、言葉でのやり取りが難しい児童も自信をもって友達とやり取りをすることができたり、個別課題の意欲付けになったりし、児童の主体的・対話的で深い学びを実現するための手立てとして有効であったと思われる。また、テレビに映す手段としても有効であり、友達の学習の様子に注目し、全体で学びを共有できると分かった。今後も児童の学びに効果的な活用方法を検討し、タブレット端末を有効に活用していきたいと考えている。

【単元名】 「仲良くチャレンジ」
【単元の目標】 ・友達や指導者と一緒にリトミックをする。 ・ペアの友達とペースを合わせて、おみこしリレーをする。 (ペアの友達を意識して、一緒におみこしリレーをする。) ・自分に取り組んでいる様子を動画で見て振り返る。
【主な学習活動】 ・本時の活動の流れを絵カードで知る。 ・リトミックをする。 ・友達とペアになり、自分の写真カードをみこしに乗せて運び、ボードに貼って来る。その様子をタブレット端末で撮影する。 ・撮影した動画を見ながら、振り返りをする。
【児童の実態】 ・初めての活動や慣れない活動に対し不安が強く、最初は活動に消極的な児童が多い。しかし、活動の流れを絵カードで提示したり、活動を重ねたりすることで、徐々に活動に関心を示し、意欲的に取り組むことができる。 ・友達同士の関わりについては、積極的に関わっていくがトラブルになってしまったり、友達がしていることに関心を示したりするなど、関わり方は様々であり実態差が大きい。どの児童も友達と一緒にする経験が少なく、自分のペースで活動を進めていこうとすることが多い。 ・振り返りでは、自分や友達が頑張ったところや良かったところを見つけたり伝えたりすることができる児童は少ないが、どの児童も動画に注目することができる。
【研究テーマに沿った授業づくりで工夫したこと】 1 「単元や教科等をつなぐ授業」 ・友達を意識したり、友達と積極的に関わったりすることができるように、ペアを固定して活動を設定した。次の単元でも同様に行う。 ・友達と力を合わせて一緒に運ぶことができるよう、体育の準備や片付けで友達とベンチや大型の物を、掃除で友達と机を運ぶ活動を取り入れる。  友達と机を運ぶ様子 2 「主体的・対話的で深い学びの視点」 主 ・本時の活動を絵カードで示し、毎回、同じ流れで取り組むようにする。 ・コース上にまたいだり、くぐったりできるような障害物を設置することで、意欲的に取り組むことができるようにする。 対 ・互いを意識できるように、毎回同じペアにしたり、友達とペースを合わせて歩くことができるように指導者が「いち、に、いち、に。」と言葉掛けをしたりする。 ・うまく付き合うことが難しい児童同士をペアにし、互いに協力が必要な状況を作る。 深 ・友達同士で工夫していたことを、毎回指導者が評価することで、どうしたら上手に運べるか考えられるようにし、友達とペースを合わせたり待ったりして、相手を意識しながら活動に取り組めるようにする。 ・友達と一緒に活動することの楽しさを味わうことができるようにする。

3 「タブレット端末の活用」

- ・ 友達が活動する様子を児童が操作して動画撮影することで、意欲的に振り返りに取り組めるようにする。
- ・ 動画を見ることで、最初の頃と現在の様子を比較できるようにし、ペアの友達と協力できるようになったことを自分たちで評価できるようにする。

【児童の様子や変容】

本時の活動の流れを絵カードで示し、一つ終わるごとに外していったり、ペアの友達やリレーの順番が分かるように写真カードを提示したりすることで、活動に見通しをもち、最後まで落ち着いて授業に取り組むことができるようになった。他の教科や単元でも絵カードや写真カードを多用していることもあり、児童には分かりやすかったようだ。授業の前には、順番通りに絵カードを貼り、活動が終わると、自主的に絵カードを外しにいく児童もいた。また、写真カードを手掛かりにペアの友達の元に行ったり、「一緒にしよう。」とペアの友達を誘いに行ったりし、誘われた児童もすぐに応じることができるようになった。みこしに自分の写真カードを乗せる場面では、友達の写真カードも探したり、「はい、どうぞ。」と言って渡したりして、指導者の促しが必要ながらも「ありがとう。」と伝え、児童同士でやり取りすることもできるようになった。

みこしリレーでもしっかり持ち手を持って、友達の動きを見てペースを合わせないと、写真カードを落としたり持ち手から手が放れたりすることが分かるようになった。また、上手にみこしを運ばない、「一緒にしたくない。」と言っていたペアも活動を重ねることで、友達の動きを見ながらみこしを運べるようになった。

振り返りにタブレット端末をテレビに接続して用いたことで、指導者の話を聞きながら、テレビに映し出された動画を最後まで集中して見聞きすることができた。また、みこしから手を放さずに運べたか、写真カードを落とさずに運べたか、ということを意識し「上手に運べた。」「写真を落とさなかった。」と発言することもできるようになった。授業に消極的だった児童も、監督、助監督の役割を設定して撮影を頼むことで、授業に意欲的に参加し、撮影を通して友達の様子を見ることができた。



絵カードを外す様子



みこしリレー



みんなで振り返りをする様子

【成果と課題】

普段、関わりが少ない、上手く付き合うことが難しい児童同士をペアにしたことで、体育や清掃などにおいて、二人で協力しなければならない場面に遭遇したとき、指導者の言葉掛けを聞いてすぐに近くにいる友達とペアになってベンチや机などを運ぶことができるようになった。また、一人で運んでいる友達を見てすぐに手伝うことができる児童の姿も見られるようになった。休み時間でも、特定の友達とだけでなく、同じ遊びをしている児童同士で集まる場面が増え、人間関係が広まってきている。今後児童同士の関わりを広げ、さらに深めていけるような学習活動を考えていきたい。

また、本単元では、授業の振り返りの場面でタブレット端末をテレビに接続して活用すると、児童の注目度が高く、振り返りにはとても有効な手立てであった。どの児童もタブレット端末を使用することに興味や関心が高く、国語や算数、音楽など他教科でアプリケーションを用いて読み聞かせをしたり、事前に動画を撮影して手本を示したりすることで、理解を深めることができた。

今後も、様々な単元や教科等の学習活動のなかで、有効にタブレット端末を活用し、児童の主体的、対話的で深い学びを実現するための一つの手立てとして活用していきたい。

【単元名】「朝顔を作ろう」

【単元の目標】

- ・材料を貼ったり、色付けをして変化に気付いたりする。
- ・複数の色のなかから、好きな色や、朝顔をイメージした色を選んで制作する。
- ・自分の作品を発表したり、友達の発表を聞いたりすることで、自分の作品と友達の作品の違いに気付いたりおもしろさを感じたりする。

【主な学習活動】

- ・コーヒーフィルターを折り、絵の具や朝顔で作った色水で色付けをし、朝顔を作る。
- ・最初に4色の絵の具から1色選んで色付けをする。次に、自分たちが育てた朝顔を使って作った色水を使って色付けを行う。
- ・割り箸の枠組みに、両面テープを使って、画用紙の葉っぱや朝顔を貼り付ける。
- ・自分の作品を発表したり、友達の作品を鑑賞したりする。

【児童の実態】

- ・手順の動画を見て、一人で制作ができる児童や、手順を指導者と一緒に確認しながら行う児童がいる。
- ・休み時間に絵を描いたり、塗り絵をしたりするなど、意欲的に制作活動に取り組む児童が多い。
- ・色を選んだり、両面テープを剥がして貼ったりする活動は、他の学習場面で経験をしている。
- ・発表や鑑賞では、自分で完成させた作品に達成感を感じている様子が見られる一方で、友達の作品に興味を示す児童は少ない。

【研究テーマに沿った授業づくりで工夫したこと】

1 「単元や教科等をつなぐ授業」

- ・生活単元学習で行った朝顔の栽培を通して得られた植物への興味関心を、自分たちで作る朝顔の制作意欲へとつなげるために朝顔の花を教材として用いる。
- ・図画工作以外の学習場面でも使用している順番ボードを用いることでどの場面でも友達を意識したり、順番を守ったりすることが定着できるようにする。



朝顔の種を植える様子

2 「主体的・対話的で深い学びの視点」

- 【主】・白いコーヒーフィルターを使用することで、色が付いた変化に付きやすいようにする。
 - ・手順を示した動画や手順表を示すことで、手順を理解し、見通しをもって次の活動に移ることができるようにする。
- 【対】・一人ずつ前に出て順番に制作を行うことで、友達の様子や、自分の作品と友達の作品との違いに気付くことができるようにする。
- 【深】・絵の具で制作をした後に朝顔から色水を作ることで、絵の具やクレヨンなどの道具以外にも身近な物から色が作れることに気付けるようにする。

3 「タブレット端末の活用」

- ・意欲的に取り組むことができるように、朝顔の栽培の様子を写真で見える。
- ・制作活動に見通しがもてるように、作り方や手順表を動画やプレゼンテーションで示す。
- ・作るときの注意する点に気付くことができるように、動画内であらかじめ拡大したり、印を付けたりしておく。
- ・友達が作っている様子に注目ができるように、制作の様子を児童が撮影する場面を設定する。

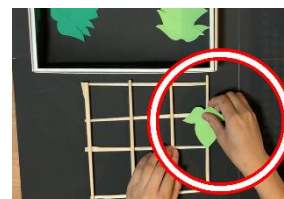
- ・完成した達成感を味わい、友達の作品に注目ができるように、完成した作品と一緒に写真撮影をし、授業の最後に写真を見ながら振り返りをする。



手順を示したプレゼンテーション



手を拡大した動画



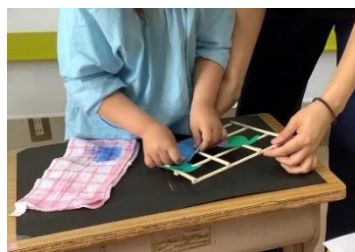
注意点に印を付けた動画

【児童の様子や変容】

タブレット端末をテレビに接続し、手順の説明や友達の作品の鑑賞を行ったことで、児童が注目することができていた。また、注意点を拡大したり印を付けたりしておいた手順動画を見ることで、児童が実際に行うときにも注意点に気を付けようとする様子が見られた。また、順番ボードを見て、自分の順番になったときに前に出たり次の友達の名前を呼んだりするなど、順番を守って制作活動に取り組むことができた。友達が一人ずつ前に出て制作している様子を見たり、タブレット端末で児童が撮影をしたりすることで、手順を繰り返し見聞きして自分の順番ではスムーズに次の手順に移る、意欲的に色を選択するなど主体的に取り組む場面が増えた。



完成した朝顔



児童が撮影した制作風景の動画



児童が撮影した写真

また、友達が自分と違う色を選んでいたり、花によってできる色水の色が異なったりしたことに注目して、「紫色や。」「ピンクだ。」などと言葉にして違いを表現する様子も見られるようになった。同じ手順で学習を積み重ねるなかで、友達の様子をよく見たり、自分と友達の作品を比較したりすることができた。

【成果と課題】

生活単元学習で育てた朝顔の花を図画工作の教材に用いることで、意欲的に制作に取り組むことができた。種から育てて花が咲いて完結するのではなく、その後、花を使って色が作れるという経験を通して様々なものの見方・考え方を学ぶ機会とすることができた。

今回の単元では一人ずつ前に出て順番に制作活動を行ったことで、友達の様子をよく見て手順の確認をしたり、作品の違いに注目したりすることができた。その結果、主体的に制作活動に取り組んだり、友達に対して称賛したりする様子も見られた。

また、児童がタブレット端末を使って撮影をすることで、友達の活動に注目するだけでなく、指導者は児童が撮影した動画から児童がどこに注目しているかということに気が付くことができた。タブレット端末を指導者が使うだけでなく、児童自身が活用することで新たな発見があった。

課題としては、友達同士のやり取りが十分にできておらず、発表や感想のやり取りを通して対話的な学びを深めていく必要がある。また、タブレット端末は児童の興味関心が高いために、目的と違った使用方法になってしまうことも多い。そのため、授業内では、写真の撮り方や使用する時間などルールを守って効果的に取り入れるようにしていきたい。

【単元名】「器械・器具を使った運動 ～マット運動～」

【単元の目標】

- ・両手で体勢を保持したり、全身伸ばしや丸めて回転したり、両脚で踏み切って跳んだりする。
- ・マットを使用した運動の特徴を知り、動作のポイントを確認して活動に取り組む。
- ・友達の前で発表したり、準備や片付けに積極的に参加したりする。

【主な学習活動】

- ・動画で取り組む種目のポイントを視覚的に確認し、自分の体の動きをイメージする。
- ・基本となる動きを全体で練習した後に、児童一人一人の目標とする種目をタブレット端末で確認してからマット運動を行う。
- ・一人ずつ全体の前で発表を行う。

【児童の実態】

- ・技能に関しては、実態が様々で、一人で活動に取り組むことができ、前転を目標にする児童から、指導者と一緒に活動に取り組み、両足ジャンプを目標とする児童までいる。
- ・どの児童も昨年度までの体育で、マット運動の経験はしており活動に見通しをもって取り組むことができる。言葉での説明で動きをイメージすることは難しいが、動画を見て視覚的に理解することができる児童が多い。
- ・発表では、自分から手を挙げて発表しようとする児童は少ない。

【研究テーマに沿った授業づくりで工夫したこと】

1「単元や教科等をつなぐ授業」

- ・体幹やバランス感覚を養うことで、正しい姿勢で学習に向かったり身の回りの生活動作の習熟につながったりするために必要な力を身に付けられるようにする。
- ・画像や動画で振り返りを行うことで、児童が目標を明確に理解したり、結果を客観的に振り返り、学習に対する自己評価を正確に行ったりする習慣を他教科等に生かす。

2「主体的・対話的で深い学びの視点」

- 【主】・学習意欲を高められるように、動画を使って視覚的に手本を示し、画面上に直接ポイントを書き込んで説明する。
- 【対】・動画を使って振り返りを行うことで、友達のよかったところを発表したり確認したりできるようにする。
 - ・すぐに見本を確認できる環境設定をすることで、自分で見返したりポイントを復習したりすることができるようにする。
- 【深】・自分の姿を画面で客観的に見ることを通して、自己理解を深めるとともに、手本との対比や学習の成果を確認しようとする姿勢を身に付けられるようにする。



静止画でポイントを説明



個別課題を確認する様子



動画での振り返り

3 「タブレット端末の活用」

- ・言葉では説明の難しい動きを動画で提示し、アプリケーション（Coachs Eye）を使用することで、スローモーションや直接書き込むことなどで理解を深めることができるようにする。
- ・活動の直前にもプレゼンテーションソフトのスライドにある自分の写真をタップすることで、自分の種目の手本が流れるようにし、活動への良いイメージがもてるようにする。



手本を確認する様子



ポイントの静止画



自分の種目を確認する様子



【児童の様子や変容】

自分たちの取り組む内容をプロジェクターで大きく映し出し視覚的に確認することで、その場で手本を見せるときに比べ、児童がよく注目するようになり、目標となる動きの理解度を高めることができた。そのため、ポイントを意識して取り組む児童の様子が多く見られ、動きの習得につながった。毎回の授業の流れを同じにし、動きのイメージと結び付けやすい簡潔な言葉で説明することで、児童から「手をピーン。」とポイントとなる発言も出るようになった。



スクリーンに注目する児童

さらに、タブレット端末にある自分の写真をタップして課題を確認することで、活動内容を理解して取り組むことができた。また、顔写真をタップして目標を確認するだけでなく、友達の写真にも関心をもつことができ、動画を使った振り返りをする中で、友達がしている様子を見て「すごい。」と拍手する場面が見られ友達を意識することができていた。

マット運動が苦手だった児童も動画で正しい姿勢を確認したり、みんなの前で発表して成功体験や称賛される体験を重ねたりしたことで、自分から「もう一回やりたい。」と発言し、自信をもって取り組めるようになった。

【成果と課題】

マット運動で体幹を鍛えることで、正しい姿勢を保てるようになり、児童の学習に向かう態度の育成にも効果があった。体育以外の学習場面では、雑巾掛けをするときに高ばいの姿勢が取れず膝を付いていた児童が、膝を付かずに教室の端から端まで雑巾掛けができるようになった。

本単元は大人数での一斉指導の学習形態であったが、ICT 機器を活用することで効率的に児童一人一人の実態に合わせた課題の提示ができることが分かった。これは、器械運動系の種目の特徴でもある、「自分の力にふさわしい動きを身に付ける喜びを味わうことができる運動」の達成にも効果的であった。また、動画を活用して言葉での理解が難しい動きを視覚的に提示することによって、児童が動きのイメージをもつことができ、児童と指導者が目標を共通理解しやすくなった。それによって直接指導や身体接触が苦手な児童でも助言や補助を受け入れやすくなったり、指導者も児童の目標にあった適切な補助ができるようになったりして、児童の学習意欲を引き出し、学習効果を高めることに有効であることが分かった。ラジオ体操や表現運動の単元でも手本動画を示したり、自分や友達の様子を動画で振り返りをしたりしたことは体育の活動の流れを一定にすることになり、児童が見通しをもって主体的に活動する機会を増やすことにつながった。

今後に向けては、複数の指導者が協力して指導に当たる学習形態では、児童一人一人に適切な支援を行うために目標達成までのプロセスについて指導者間で共通理解を図り、児童が試行錯誤して主体的に課題解決できるような学習環境や支援体制を提供したい。

【単元名】「花火を打ち上げよう」
【単元の目標】 ・材料を工夫して切ったり貼ったりする。 ・様々な材料のなかから思いに合う好きな材料を選んで制作する。 ・自分の作品を発表したり、友達の作品を見たりして面白さを感じる。
【主な学習活動】 ・スクラッチボードを削ったり、シールやスパンコール、モール、マフィンカップなどを使って画用紙に接着剤で貼り付けたりしてオリジナルの花火を作る。 ・最初は1人で小さな花火を作り、徐々に2人組、4人組、8人組と人数を増やしていき、友達と一緒に大きな花火を制作していく。 ・自分の作品を発表したり、友達の作品を鑑賞したりする。
【児童の実態】 ・昨年度までは、生活単元学習や自立活動での学習を通して、友達と一緒に活動したり協力して取り組んだりする経験を積んできた。図画工作の学習においては、個人での制作経験が多く、友達と一緒に作品を作った経験は少ない。 ・はさみを使用して紙を切ったり、ビーズやモールなどを接着剤で飾り付けたりする制作活動は経験している。 ・発表や鑑賞では、自分から工夫したことや頑張ったこと、良いところを発表できる児童は少ない。
【研究テーマに沿った授業づくりで工夫したこと】 1 「単元や教科等をつなぐ授業」 ・友達と一緒に作ったという達成感を味わえるように、グループで一つの花火を制作する。また、同じメンバーで構成されている自立活動や、その他の教科等の学習においても友達を意識して活動したり、仲間意識を高めたりすることにつなげる。 ・手先を使った細かい作業に意欲的に取り組めるように、日常生活の指導や自立活動のなかで、手指を使った課題を相互に取り入れる。 2 「主体的・対話的で深い学びの視点」 主・授業の最初に花火の映像を見る活動を設定し、制作活動への意欲を高める。 ・手順を示した動画や写真を提示したり、手順表を配付したりすることで、制作の手順を理解し、見通しをもって取り組むことができるようにする。 対・発表や鑑賞の活動を設定することで、自分や友達の作品の良さや違いに気付くことができるようにする。 深・友達と協力して作品を作ったり、様々な材料をもとに色や形を工夫したりすることで、楽しさを味わいながら新たなことを思い付いて加えていくことができるようにする。 3 「タブレット端末の活用」 ・花火のイメージをつかめるように、動画や写真を見る活動を設定する。 ・作るときの手順や注意点などを視覚的に理解できるように、作り方を示した動画や写真を提示する。 ・制作で工夫した点や頑張りが伝わりやすいように、児童の制作の様子や作品を写真に撮り、発表や鑑賞のときに見せるようにする。



様々な種類の材料



作り方を示した動画

【児童の様子や変容】

手順の説明や鑑賞にタブレット端末をテレビに接続して用いたことで、児童はテレビに映し出された動画や写真に注目し、指導者の話を聞いたり、友達の作品を見たりすることができた。普段、指導者の話を聞くときに注目することが難しい児童も、テレビ画面に注目することで動画や写真、話到最后まで集中することができた。また、タブレット端末で写真撮影した作品をテレビに映し出して発表や鑑賞をする場面では、最初は選択肢のなかから頑張った活動内容を選んで発表していたが、徐々に写真を指さしながら自分で考えて答えることができる児童が増えた。そして、友達の作品を見て、「ハートの形だ。かわいい。」「雪だるまに見える。」などの感想を発表し、より細かいところまで友達の作品の良さに気付くこともできるようになった。



作り方の動画を見る様子



作品の発表



友達の作品を鑑賞して発表する様子

また、繰り返し友達と一緒に制作活動に取り組んだことで、自分のお気に入りの材料を友達に薦めたり、友達が使う材料や貼り方をまねて作ったり、制作中に困っている友達がいると手伝ったりするなど、友達を意識して活動することができるようになった。4人組で作品を作るときには、4分割して担当を決めて作るのか、あるいは自由に好きな箇所に貼るのか、児童同士で作り方を話し合いながら制作を進めることができるようになった。



友達との話し合い



友達と一緒に花火を作る様子



完成した花火

【成果と課題】

学級とは異なるメンバーで構成したグループで、図画工作や自立活動の学習に友達と一緒に取り組んだことで、授業以外の場面においても、他の学級の友達と交流する姿が多く見られるようになった。休み時間には、自由に互いの教室を行き来したり、誘い合って一緒に遊んだりするようになった。また、集団活動への参加が難しかった児童が、学習を通して同じグループの友達と仲良くなったことで活動への意欲が高まり、さらには自分から友達を活動に誘うこともできるようになった。このように、昨年度に引き続き、今年度はさらに学年の友達と一緒に活動する学習機会を増やしたことで、学年全体の仲間意識が高まった。その結果、生活単元学習で取り組んだ学習では、どの児童も学年の友達の良いところをたくさん見付けることができていた。今後もあらゆる教科等を通じて、児童同士の相互の関わりを大切に学習活動を設定していきたい。

また、本単元の授業においては、タブレット端末の活用は、児童の主体的な学びや対話的な学びを実現するための手立てとして有効であった。本学年は、タブレット端末を使用することに興味や関心が高い児童が多いので、今後も、様々な教科や単元等の学習活動のなかで、タブレット端末を活用した学習場面を設定し、児童の実態に合った効果的な活用方法を検討していきたいと考えている。

【単元名】「弁当を作ろう ～あいうえおべんとう～」
【単元の目標】 ・はっきりと分かりやすい声で平仮名を読む。 ・絵本をヒントにして指定された文字から始まる食べ物を考えたり、気付いたりする。 ・言葉のもつ楽しさに気付き、物語の場面に合わせて身振りをしたり、クイズの問題に取り組んだりする。
【主な学習活動】 ・「あいうえおべんとう」の話を見聞きする。 ・「あいうえおべんとう」のなかに出てきた食べ物を選ぶクイズをする。 ・友達の名前を頭文字とした食べ物で弁当を作る。 ・個別課題(プリント課題)に取り組む。
【児童の実態】 ・絵本の読み聞かせが好きで、繰り返しのある内容であれば話の展開に興味をもって見聞きすることができる。食べ物が出てくる絵本については特に関心が高い。 ・簡単な漢字や片仮名を読むことのできる児童もいれば、平仮名を一文字ずつ確認しながら読む児童や平仮名で書かれた自分の名前であれば分かる児童まで実態は様々である。 ・発音は全児童が不明瞭なため、はっきりと話すことを目標に学習に取り組んでいる。 ・なぞり書きを練習している児童や、簡単な形の平仮名であれば書くことができる児童など実態に幅がある。
【研究テーマに沿った授業づくりで工夫したこと】 1 「単元や教科等をつなぐ授業」 ・聞き取りやすい話し方で食べ物の名前を読む学習に取り組むことで、朝の会や帰りの会、授業での発表場面につなげる。 ・食べ物の名前を学習することで給食やこれまでの学習した食べ物などに関連付けることができるようになる。 2 「主体的・対話的で深い学びの視点」 主・プレゼンテーションソフトを用い、話の展開に合わせてイラストや文字を提示することで、内容の理解につなげるようにする。 対・クイズの場面で、全員の前でタブレット端末を操作して発表し、操作している画面はテレビに映し出すことで、他の児童も確認できるようにする。 深・個別学習の場面で、弁当作りの振り返りを行うとともに、児童一人一人の実態に合わせた課題を設定することで、出てきた食べ物の名前を書いたり、他の食べ物がないか考えたりできるようにする。 3 「タブレット端末の活用」 ・クイズ場面で、児童一人一人が選択肢を選び、すぐに正誤が確認できるようにするために、タブレット端末を用いる。 ・学習への意欲が高まるようにするために、クイズの答えが出るときにはアニメーションや効果音を用いて提示する。 ・全員に出来た内容を共有し、称賛し合えるようにするために、個別課題のプリントを撮影し、画面に映し出す。 クイズの画面

【児童の様子や変容】

絵本の読み聞かせの場面では、プレゼンテーションソフトを用いたデジタル絵本を使用し、テレビに映し出して提示した。これまでも絵本をテレビに映し出して学習を行ったことがあり、どの児童もよく絵本の内容に注目することができた。繰り返し出てくる「なんだろうな」や「できました」の言葉に指導者が身振りをつけて読み聞かせをしていくうちに、それをまねるようになり、展開を楽しみながら絵本を見聞きすることができた。学習を進めていくと、絵本に登場する食べ物や出てくる順番を覚えた児童もあり、好きな食べ物が出てくる文字のときに尋ねると「エビフライ。」と答えることもできるようになった。

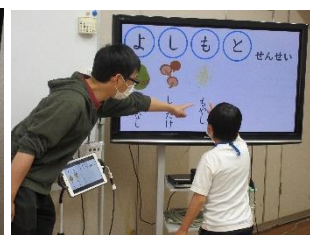
クイズや友達の弁当を作る場面では、タブレット端末を用いてプレゼンテーションソフトで作ったクイズを提示し、実際に画面に触れて選択できるようにした。選択した内容に対してすぐに正誤を音とアニメーションで知ることができたため、発表したくて挙手をする児童も増え、積極的にクイズに答えていた。間違えたときには、ヒントとなる文字を指導者と確認することで、すぐに訂正して答えることもできるようになった。



絵本の読み聞かせ



クイズをする様子



個別課題では、作った弁当の食べ物を確認しながら、文字を書いて振り返りを行った。弁当作りで使ったプレゼンテーションをテレビに提示しておくことで、分からないときには児童が画面を確認して、プリント課題に取り組むことができた。出てきた食べ物以外の食べ物はないか考える課題に取り組んでいる児童は、給食で出た食べ物や好きな食べ物を指導者が繰り返し伝えていくことで、自分で考えて答えられることが増えてきた。



個別学習

【成果と課題】

明瞭な発音で平仮名を読む発表に取り組んできたことで、朝の会や帰りの会だけでなく、他の場面でもはっきりと話すことが増えた。また食べ物に対する興味がさらに高まり、絵本のなかに出てきた食べ物が給食に出てくると「ハンバーグ。」と言って指導者に伝えたり、学級文庫の食べ物の絵本をよく読んでいたりした。他の教科や生活場面と結び付けることで、学習への意欲が高まったり、学習したことを継続して発揮したりすることができた。今後様々な学習場面と関連付けながら進めていきたい。

本単元の授業において、タブレット端末の活用は、児童の主体的な学びを実現するための手立てとして有効であった。特に音声やアニメーションを用いて即時的に評価を行うことができ、児童の学習意欲へとつながった。今後も児童への効果的な活用方法を検討していきたい。

【児童の実態】

本学級の在籍は女子1名で週1回1時間半程度の授業を行っている。本児は重度の障害があり、日常生活全般において手厚い支援が必要である。24時間呼吸器装着と酸素吸入、経鼻経管栄養、吸引等の医療的ケアも常時必要である。中心静脈カテーテルを挿入しており、体位の変換や胸部への接触にも注意が必要である。視覚、聴覚、体温や体内の水分量を調節する機能等がうまく働いていない状況にあり、常に心拍数と血中酸素飽和度を表すモニターを着けている。下肢に触れられると腕を伸ばし背中を反らすような緊張が入ることが多く、心拍数も上がる。自発的な動きは指先と肘伸展のわずかな動きだけで、表情の変化もほぼ見られない。

【研究テーマに沿った授業づくりで工夫したこと】

1 「つなぐ」取組

①学校の友達や先生と

- ・本児が外出するためには、2名以上の付き添いが必要ではあるが両親は可能な限り学校に行きたいと希望している。直接同年代の友達や複数の指導者に会える機会としてできるだけスクーリングを実施した。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で登校できたのは入学式を含め4回であったが、学校の友達と一緒に活動の場に参加することができた。
- ・折に触れてビデオレターをやり取りしたり、校内の掲示板で授業の様子を知らせたりしながら、図画工作や音楽などの授業で学校の1年生と同じ題材を取り上げ、共通の作品を制作したりリモートで授業に参加したりした。
- ・先輩の訪問生が行っていた人形を通しての交流を継続し、等身大の「Mちゃん人形」を作り常に教室に置いて学校の児童たちと一緒に過ごせるようにした。この人形は丸養まつりのステージ発表にも登場し、ビデオ映像だけでは伝わりにくい訪問生の存在感を表すことができた。



スクーリング



リモートで学校の授業に参加



丸養まつりステージ発表

②訪問の授業のなかで

- ・ビデオレターをやり取りしたり作品展の作品を一緒に作り上げたりするなど、訪問学級共通の課題に取り組むことで直接会うことが難しい訪問生同士の交流を行った。
- ・感覚受容器が限られている本児に対しては常に複数の感覚刺激を味わえるように配慮した。親しみやすい絵本を題材にし、話に登場する食べ物や植物や道具などの実物を準備し、視覚や聴覚だけでなく匂いや手触り、温冷感、振動、圧刺激等を感じられるように工夫した。



訪問学級共通の作品作り



触れる



匂う

2 「主体的・対話的で深い学びの視点」

①毎回、同じ流れで授業を行う

- ・授業の流れを以下のように決めそれを毎回繰り返した。
 - 始まりの歌 音楽に合わせて手や顔に触れ授業の始まりを伝え、今日の予定も提示する。
 - カレンダー 出席カードにシールを貼る、天気に合わせて色の光を見る。

○課題 その日の絵本、制作、音楽の活動を通して、視聴覚、触覚、嗅覚等に働きかける。

○身体の学習 音楽に合わせて身体全体を順に触れた後、肩や肘関節のストレッチを行う。

○終わりの歌 落ち着いた雰囲気曲を流し授業の終わりを伝える。



赤い光を見る



出席シール

②丁寧に反応を確認する

- ・自発的な動きや表情の変化が非常に読み取りにくい本児の場合、常に装着しているサーチレーションの変化に注目した。また刺激を与えた後は顔色の変化や指先の動きがないかなどをゆっくり待って観察し、できるだけ写真を撮って活動の記録を残すように心掛けた。

3「タブレット端末の活用」

- ・始まりの歌や終わりの歌だけでなくその日の授業に必要な音楽や音声をあらかじめ録音しておくことで、容易に再生が可能のため聞く活動のときには毎回活用した。
- ・その日の活動に必要なビデオレターなどの動画や写真を、見やすい位置に提示することができるので様子を伝えるときには音声と同時に活用した。
- ・家庭のWi-Fi利用を許可してもらったことで、学校のタブレット端末と安定した通信ができるようになり、授業にリモートで参加したり友達とメッセージをやり取りしたりすることが容易にできた。



ビデオレター

【児童の様子や変容】

本児は表出がわずかであることから、目に見える大きな変容はみられないが、心拍数の変化も意思表示の一つと捉えて関わってきた。落ち着いているときは100前後であるが、脚に触れられることが苦手で120から130程度まで心拍数が上がったり全身に緊張が入ったりしていた。段階を踏みながら身体の学習で毎回下肢への働き掛けを行うと、次第に受け入れられるようになっていき、一学期末には下肢に直接触れても大きく心拍数が変化することはなくなった。

また、毎時間の記録写真を見比べると、二学期には学校の友達とリモートで交流しているときや、複数訪問（指導者が2名以上で訪問）でにぎやかに活動を行っているときの表情が他の場面と比べて、和らいでいるような様子が見られるようになった。



学年始めの様子



二学期末の様子

【成果と課題】

数年前から本校の訪問学級は「つなぐ」をキーワードに様々な機会を捉えて訪問生と学校をつなぐ取り組みを行ってきた。それを継続することで、様々な「つなぐ」を入学当初から行うことができた。特に等身大の「Mちゃん人形」は低学年の児童にも受け入れられやすく、同級生が訪問生の存在を実感するためにとっても効果的な役割を果たしている。そのため、ビデオレター作成やリモート授業を行うときにも、訪問生の存在をしっかりと認識できているようであった。訪問生自身の反応はまだ乏しいが、タブレット端末を通して同じ時間を共有することで、保護者はつながりを実感している。



Mちゃん人形

今後はタブレット端末の動画撮影機能を使って訪問生の様子を客観的に記録し、その動きや表情のわずかな変化を捉えられるようにしたい。その変化と働き掛けを整理することが、訪問生の感じ方や表出を理解する手掛かりになっていくのではないかと考える。

(6) <取組2 タブレット端末の教材研究>について

取組1でタブレット端末を活用した授業づくりに取り組むに当たり、タブレット端末の教材研究を行うこととした。4月の現職教育では、メディア教育部とのタイアップで、タブレット端末の操作方法やアプリケーションの活用方法などについての研修を実施した。そして、7月の現職教育では、それまでの授業実践のなかでタブレット端末を活用した事例を一人一つずつ持ち寄り、グループワークを通じて情報交換する機会を設定した。情報交換できたことで、「今後使えそうなアプリをたくさん知ることができた」「二学期からの実践でぜひ活用してみたい」などの感想がたくさん聞け、今後の実践に役立つ情報を得る良い機会となった。



資料16は、グループワークで紹介されたアプリと活用事例をまとめた表である。

(資料16)

アプリケーション名	アプリケーションの活用事例
カメラ 写真	・授業中の児童の様子を動画撮影し、振り返りの場面で使用する。 ・図画工作の制作手順を動画撮影し、提示しながら説明する。 ・ラジオ体操の手本動画を撮影し、体育の時間に使用する。 ・買い物練習をする活動で、手元の様子を動画撮影し、友達の様子が見えるようにする。 ・訪問学級の児童の様子や通学の児童の様子を動画撮影し、ビデオレターを作成する。
写真（マークアップ）	・掃除の様子を撮影した写真にマークアップで花丸を付けて評価をする。
Coach's Eye	・体育のラジオ体操や交通安全教室の横断歩道を渡る練習で、手を上げたり伸ばしたりすることができているかを振り返る。
LINE	・訪問学級の児童と通学の児童の間で、ビデオ通話を行う。
時計	・ゲームの活動をするとき、制限時間を提示する。
ねずみタイマー	・活動の残り時間を提示する。
絵カードタイマー	・次の活動予定を提示する。
トーキングエイド for iPad タイマー	・給食の残り時間を表示する。
Drop Talk	・朝の会や帰りの会の司会、感想発表の場面で、コミュニケーションツールとして使用する。 ・着替えの手順を示す。 ・タイマーを提示する。
Keynote	・様々な授業で、プレゼンテーションソフトとして使用する。 ・朝や帰りの会の司会で、コミュニケーションツールとして使用する。
Bitsboard	・国語・算数の学習で、クイズ形式の問題を作成する。
ReplayCam	・体育のマット運動で、運動する様子を動画撮影し、再生スピードを選択して振り返る。
Microfoft PowerPoint	・Microfoft PowerPoint でイラストを使って歯磨きのやり方の動画を作成し、給食後の歯磨き練習で使用する。
ミュージック	・ピアノ伴奏を録音し、音楽の授業ではスピーカーにつないで使用する。
Safari	・調べ学習で使用する。
常用漢字筆順辞典	・国語・算数の学習で、漢字の筆順を確認する。
レジスタディ	・お店屋さんごっこで、店員役の児童がレジ係をするときに使用する。
メモ	・文字や写真を入力しながら日記を作成する。

(7) まとめ

以上のように、令和3年度は研究の3本柱に沿って授業実践に取り組み、研究を進めてきた。

① 「単元や教科等をつなぐ」授業について

単元や教科等をつなぐ視点からの授業づくりでは、全学年の研究授業や実践紹介が終わった後に、学年ごとに「単元や教科等をつなぐ（横の「学び」をつなぐ）授業実践を通して意識したことや、今後心掛けたいこと」について話し合った。そして、各学年から出た意見（資料17）より、単元や教科等をつなぐ視点からの授業づくりで大切にしたい五つのポイントが見えてきた。

- ・ 児童の実態把握
- ・ 年間指導計画、単元指導計画（系統性、発展性、連続性）
- ・ 学習内容の精選と設定、学習活動の充実
- ・ 指導体制と形態
- ・ 指導方法



「単元や教科等をつなぐ視点からの授業づくりで大切にしたいこと」

児童の実態把握

児童の学習の様子や成果、課題などの実態把握を行い、学年の指導者間で、児童の実態についての情報交換や情報共有を密に行う。

年間指導計画、単元指導計画（系統性、発展性、連続性）

単元や教科等のつながりを考えながら、学習内容をつないでいくことができるように、各教科等の指導計画を立てる。

学習内容の精選と設定、学習活動の充実

児童に身に付けてほしい力を明確にし、教科等を越えてつながりのある学習内容を設定したり、児童の興味、関心が高い学習活動を取り上げたりする。

指導体制と形態

学年の指導者で児童の実態について情報交換する場を設定したり、学級を取組を学年での活動につないだり、各教科等での学びを行事等につないだりしていく。

指導方法

支援や手立ての方法をつないだり、題材をつないだりすることで指導方法を工夫する。

「単元や教科等をつなぐ」視点からの授業づくりで大切にしたい五つのポイントは、1年間授業実践に取り組んだ成果として見えてきたものであり、今後も「単元や教科等をつなぐ」授業実践を継続していくうえでの課題であると考えられる。

新学習指導要領では、児童生徒に生きる力を育むためには、「教科等横断的な視点に立った資質・能力」の育成が重要であるとされている。今後も、各教科と教科等を合わせた指導との教科等間の指導の関連付けを図りながら、児童の「学び」を横につなぐ実践に継続して取り組んでいくことが大切であると考えられる。

また、各学年の実践の成果より、「単元や教科等をつなぐ」視点で行った授業によって、児童は他の教科等においても、意欲的に学習に取り組もうとする姿や、友達とのより良い人間関係が築けるようになった姿が見られるようになった。そして、学んだことを他の学習場面や授業以外の場面においても発揮しようとする姿も見られた。つまり、これらの姿は、小学部の目指す児童像「なかよく 元気に がんばる子」に当てはまるということが考えられる。単元や教科等の横の「学び」をつなぐ授業研究を行ったことで、小学部の目指す児童像を具現化する実践を進めることができたと考える。

②「主体的・対話的で深い学び」の実現と「タブレット端末」の活用について

全校研究授業や、部研究授業、各学年等の実践紹介より、タブレット端末の活用は、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に効果的な手段の一つであることが分かった。しかし、タブレット端末の効果的な活用方法については多くの指導者がまだ模索中である。次年度以降も実践をさらに積み重ねていくことで、タブレット端末を活用した授業づくりの在り方について研究を進めていく必要があると考えられる。

「『単元や教科等をつなぐ（横の学びをつなぐ）』授業実践を通して意識したことや、今後心掛けたいこと」

（資料 17）

1. 今年度の授業実践で意識したこと

1年

- ・指導者間で、学年会だけでなく日々児童が下校した後、児童の様子を情報共有した。
- ・各教科、単元において友達を意識する、友達と一緒に取り組む活動を意識して取り入れた。
 - 教室移動や歩行学習では手をつなぐ。
 - 朝の会での健康観察（友達の名前を呼んだり、タブレットで友達の顔写真をタッチしたりする）
 - 国語・算数で友達の名前の読み書きをした。
 - 友達同士で声を掛け合ったり、活動に誘ったりするよう促した。
 - 体育や掃除で、児童同士で机やベンチなどを運ぶ活動を取り入れた。
 - 自立活動でペアを固定してゲームを行った。
 - 訪問学級の友達とつなぐ。教室と自宅をリモートでつなぎ、音楽や生活単元学習を一緒に行った。
- ・集団で行う国語・算数で学習したことを、なかよし集会で発表するようにした。
- ・丸養まつりの劇で、みんなで仲良くしてほしいという道徳的要素、音楽や声に合わせて動くという音楽や体育とつながるような内容を取り入れた。

2年

- ・座席や教材の配置、学習の流れの大枠を決めるようにした。
 - 緊張が強い児童は安定した気持ちで取り組むことができた。
- ・活動の手順やポイントを動画で提示することで、子どもたちが見通しをもって取り組めた。また、「やってみたい!」という意欲につながるように、いくつか例を示して選んだり考えたりする機会をつくった。
- ・気を付けてほしいところや指導者が学習のなかで伝えたいことを「ポイント」として示した。
 - 「ポイント」という言葉を意識できるようになることで、指導者の話のなかで注目するところが明確になり、どの単元や教科等でも指導者の話を聞くことの意識付けにつながった。
- ・自分の体の動きを意識できる活動を自立活動で設定し、他教科や日常生活の体の動きにつながるようにした。
- ・生活単元学習、集団で行う国語・算数、個別で行う国語・算数で、各教科の学びを般化できるように授業を検討した。
 - 生活単元学習で「買い物に行こう」、集団で行う国語・算数で「おかいものおかいもの」、個別で行う国語・算数で金銭の学習を行った。

3年

- ・体を動かす活動を様々な教科や場面で取り入れることで、教科間のつながりがとれるようにした。
 - 例：自立活動のサーキット運動や体育のマット運動を、着替えやトイレなどでの動きにつながるようにした。
- ・普段の授業のなかで、単元や教科をつなげようと意識していなくても、児童の興味のあるものを授業に取り入れることで、自然とつながっていたことが多かった。
 - 例：数に興味がある児童がいるので、音楽で「すうじのうた」に取り組んだ。
- ・あえて意識して、同じ題材を扱うことで教科をつなげると、児童も教科のつながりを感じることができ、楽しみながら意欲的に取り組めた。
 - 例：生活単元学習でハロウィンをしたので、遊びの指導でお化けを取り入れたり、音楽で「ようかいしりとり」をしたりした。
 - 生活単元学習で朝顔を育てたので、図画工作で朝顔を制作した。

4年

- ・児童の学びに向かう姿勢作りを意識して「つなぐ」ようにした。
 - 話をしている人に注目したり、前を向いたりできるように、見るべき学習場面（スクリーン、タブレット等）を設定した。
 - どの授業でも、①本時の学習内容を視覚的に示す、②活動、③振り返りという学習の流れにした。
 - 児童に役割を担わせる。授業の準備、片付け、リーダーなどの役割を意識させる。
- ・生活単元学習と国語・算数のつながりを考えて指導計画、指導内容を考えた。
 - 生活単元学習で指導する内容が把握できていたため、国語・算数での指導内容を絞ることができ、学習が深まった。
- ・他教科でしている学習方法を取り入れ、児童が知っているやり方を使うことで、児童に分かりやすい活動の提示ができた。
 - 例：スタンプラリー形式でコースを回る学習を自立活動でしていたので、そのやり方を他の学習で活用した。
- ・家庭での困り感を学習課題に取り入れた。

5年

- ・学年の指導者間で、児童の様子や学級での取組などについて、情報交換したり情報共有したりした。学年会だけでなく、職員室での普段の何気ない会話のなかでも情報共有を行った。
 - 学級での生活単元学習の取組内容を発展させて、学年での生活単元学習や集団で行う国語・算数の実践を行った。
- ・児童に身に付けさせたい力は何かを明確にさせた。
 - 身に付けさせたい力をはっきりと示すことで、様々な教科や単元を通じて、その力を育成できるような学習活動を設定した。
 - 例：友達と協力する力を身に付けられるように、生活単元学習や図画工作、自立活動などで友達と協力する学習活動をたくさん設定した。
- ・児童の学びを何につなげたいのかを考えて実践をした。
 - 余暇的なことにつながる学習内容を意識して、音楽や生活単元学習の授業を行った。
- ・意識しなくても実践した結果として「学び」がつながっていたことに気付くことも多くあったが、指導者が「学び」をつなぐことを意識しながら授業を行った方がより効果的に「学び」をつなぐ実践ができた。
- ・「学び」をつなぐ授業づくりのアイデアを豊富にもっておき、そのアイデアを実践しようとするのが大切であった。

6年

- ・無意識に教科をつないだ実践をしていたが、意識した方が効果的だった。
- ・児童にとって興味関心が高い内容で学習をつなげた。
 - 例えば、修学旅行（生活単元学習）の学習を行っているときに、金銭（国語・算数）、持ち物点検や身だしなみ（日常生活の指導）、電話（自立活動）、水族館の制作（図画工作）の学習を行った。

2. 今後心掛けたいこと

1年

- ・児童の学習成果や課題などの情報交換を行う。
- ・行事に向けて、複数の教科、単元で学習を進めていけるよう計画を立てる。
- ・コロナ禍の状況では難しいかもしれないが、他学年とつながる活動ができれば良い。

2年

- ・本物の体験（今年度はコロナ禍で予定していた買い物学習ができなかった）ができるようにする。
- ・児童一人一人の学習の成果や課題を指導者間で情報共有する。
- ・評価の場面では、自分の姿を客観的にみることができるときの機会（動画を見る）を設定し、児童が達成感を味わえるようにする。

3年

- ・児童数も多いので、各児童のしていること、できそうなことなどの情報共有をする。
- ・教科をつなぐのであれば、授業をする前にもっと入念な準備が必要になる。
- ・研究授業や日々の授業に目標を各自落とし込む形ではなく、つなぐため（目標を達成する）にはどうすれば良いか指導者同士で入念に話す機会を設定する。

4年

- ・生活単元学習では、どの教科とどのようなつながりがあるかを明確にして指導案を作成するが、各教科においても、その学習のどのような要素が他教科にどのようにつながるのか、生活にどのようにつながるのかを検討していくことが必要である。
- ・児童の分かりやすさや自分でできるための視覚支援、支援ツールをどの授業でも活用する。

5年

- ・年度初めに各教科等の年間指導計画を作成するとき、学年の指導者間でよく話し合って単元や教科等をつなぐ年間指導計画を立てる。（現在は、各教科の担当者がそれぞれで年間指導計画を作成しており、学年で話し合っただけで年間指導計画を立てることがあまりできていないので。）
- ・各教科等で学んでできるようになったことを、丸養まつりなどの行事の場で発表できるようにする。

6年

- ・他の教科を常に意識することが大切であるが、常に意識することは難しいので、年間指導計画で盛り込んでおくことが大事である。さらに、指導者みんなが意識をもっておく必要がある。
- ・児童一人一人の様子や目標としていることなどを指導者間で共通理解する。
- ・休み時間の指導者の言葉掛けも、教科のつながりを意識するようにする。
- ・国語・算数で特に強化したい課題を、毎朝の日常生活の指導で取り組む。

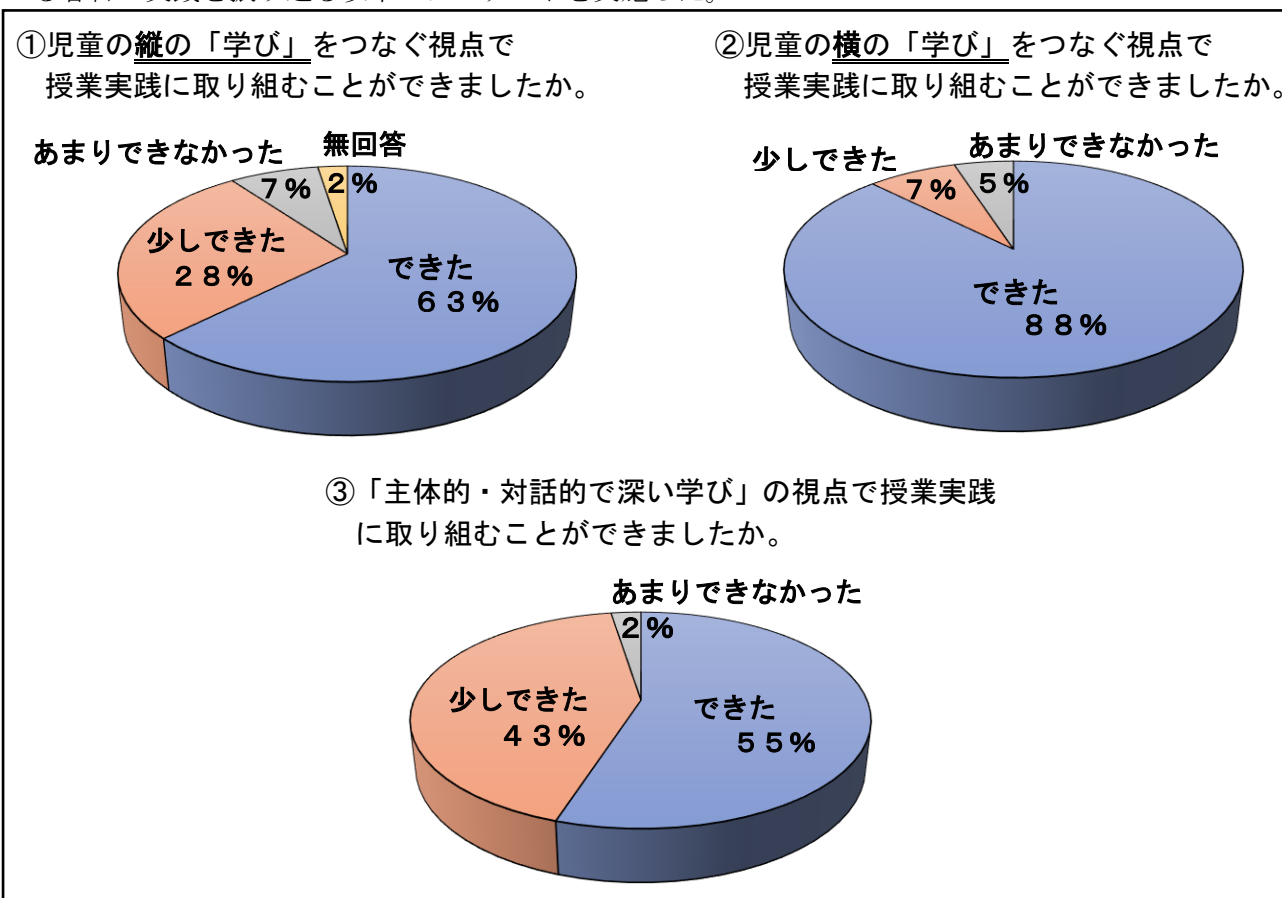
4 2年間の研究のまとめ

小学部では、全校の研究テーマ「児童生徒の「学び」をつなぐ授業づくり ～主体的・対話的で深い学びの視点に立って～」を受けて、1年次は縦の「学び」をつなぐことに、2年次は横の「学び」をつなぐことに重点を置いて研究を進めてきた。さらに、2年間を通して、主体的・対話的で深い学びの視点での授業研究にも取り組んできた。

2年間で縦と横の「学び」をつなぐ授業づくりに取り組んだことで、成果として見えてきたことがある。それは、縦や横に「学び」をつないでいくことで、小学部の目指す児童像である「なかよく 元気に がんばる子」を育てていくことができるということである。縦と横、どちらの「学び」をつなぐ授業研究においても、目指す児童像を具現化する実践を進めることができたと考える。

また、主体的・対話的で深い学びの視点での授業づくりでは、それらの学びが実現できている児童の様子やそのための手立てについて協議を行った。協議するなかで、主体的な学びができている児童は、生き生きとした様子で意欲的に学習活動に取り組み、対話的な学びができている児童は、友達と一緒に活動したり、やり取りしたりすることができていた。そして、深い学びができている児童は、学んだことを別の学習場面にも生かすことができていた。それぞれの姿は、「なかよく 元気に がんばる子」を具体化した姿であるということが考えられる。つまり、主体的・対話的で深い学びを実現する授業実践を通じて、「なかよく 元気に がんばる子」を育てているということが明らかとなった。次年度以降もタブレット端末を効果的に活用しながら、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組んでいきたいと考えている。

また、2年間の研究のまとめとして、小学部の指導者全員に、令和2年度と3年度の2年間における各自の実践を振り返る以下のアンケートを実施した。



(資料 18)

アンケートの結果は資料 18 の通りであった。①の無回答については、「令和 3 年度に転入してきたため」という記述が書かれていた。

アンケート結果より、横の「学び」をつなぐ視点での授業実践については、9 割近くの指導者が「できた」と回答していたことに対し、縦の「学び」をつなぐ視点での授業実践については、「できた」と回答した指導者は 6 割であった。これは、横の「学び」をつなぐ授業実践は、様々な学習場面のなかで取り組みやすかったことに対し、縦の「学び」をつなぐ授業実践は長期的な視点で取り組む必要があるため実践が難しかったことが要因として考えられる。

また、主体的・対話的で深い学びの視点での授業実践については、「できた」の回答は 5 割ほどであった。これは、授業実践に取り組むなかで、指導者から「主体的な学びや対話的な学びの視点については分かってきたが、深い学びの視点が難しい」というような内容の感想を聞くことが多く、深い学びの視点での授業実践がまだ不十分だと感じている指導者が多いからであると思われる。

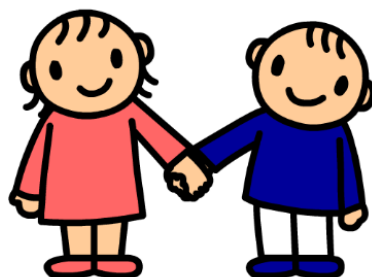
今後も、「学び」をつなぐ視点と主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業実践をさらに積み重ねていきたい。



<参考・引用文献>

- ・特別支援学校学習指導要領解説 総則編 文部科学省
- ・特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部） 文部科学省
- ・小学校学習指導要領解説 特別活動編 文部科学省
- ・特別活動指導資料 みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）
文部科学省／国立教育政策研究所 教育課程研究センター（著作権所有） 文溪堂
- ・小学校版 子どもの心を伸ばす特別活動のすべて 清水弘美 小学館
- ・生きる力を育む特別活動 一個が生きる集団活動を創造する―
新富康央・須田康之・高旗浩志（編著） ミネルヴァ書房
- ・特別支援学級・特別支援学校 新学習指導要領を踏まえた「学習評価」の工夫
育成を目指す資質・能力の3つの柱を3観点で見取るアイデア
武富博文・増田謙太郎（編著） ジアース教育新社
- ・知的障害教育ならではの主体的・対話的で深い学びができる本 神山努 学研教育みらい
- ・知的障害特別支援学校 子ども主体の授業づくりガイドブック 佐藤愼二 東洋館出版社
- ・知的障害特別支援学校における「深い学び」の実現 ～指導と評価の一体化 事例18～
横倉久（監修） 東洋館出版社
- ・特別支援教育ですぐに役立つ！ ICT活用法 ソフトバンクによるモバイル端末活用研究
「魔法のプロジェクト」の選りすぐり実践27 佐藤里美（監修） 学研教育みらい
- ・視覚シンボルで楽々コミュニケーション 障害者の暮らしに役立つシンボル1000
ドロップレット・プロジェクト編 エンパワメント研究所
- ・視覚シンボルで楽々コミュニケーションおかわり2 障害者の暮らしに役立つシンボルNew1000
ドロップレット・プロジェクト編 エンパワメント研究所





小学部 めざす児童像

なかよく 元気に がんばる子

研究推進者

部主事 川村 美佐子

久保 昌美
松永 美和
宮崎 歳子
小林 孝洋
尾崎 沙織
白井 亘
渡邊 真由
高畑 舞子

福本里佳子
平居 規子
中西 友美
樋川 妙子
田畑 早織
高尾 朋代
大西 柚菜
池上 博一

林 佳代子
藤田 陽子
高木麻千子
小島 慶子
逸見 晴香
吉田 歩
安藤 明美
松本 七海

吉本 誠一
宮本真理子
橘 紀子
村上奈緒子
多田羅南風
森下 祐子
成行 恭子
片井 愛実

日下 律子
平岡 千明
岡 孝弘
小林 ゆか
美馬 知幸
島 育慧
猿渡 光矢
大山 茜



中 学 部

- 1 中学部の研究について
- 2 研究授業の取組
- 3 現職教育の取組
- 4 まとめ

1 中学部の研究について

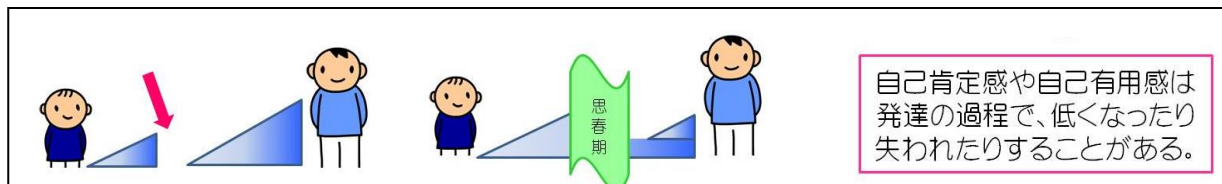
中学部のテーマ



みんなで考える 実態に応じた支援や指導を踏まえた授業づくり

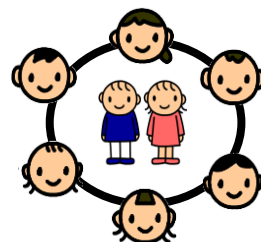
(1) 中学部のテーマ設定について

中学部は、集団への帰属意識が高まるとともに、人と比べたり自分自身に目を向けたりする時期であり、友達と自分を比べ、互いに認めたり自分を見つめ直したりすることは発達過程で大切なことである。しかし、一時的に自己肯定感や自己有用感が低くなることがあると言われる時期でもあり、適切な支援や指導が必要とされる。



これまでの研究成果から、中学部の時期は、同じ目標に向かって一緒に頑張る仲間作りや助け合える仲間作りを通して、生徒一人一人の内面（自己肯定感・自己有用感）を育てることが有効であることが確認できた。また、開かれた教育課程の実現が示されたことを受けて、本校の教育ビジョンに挙げられている、「つなぐ」をキーワードに、授業づくりや学習内容を整理する取組を行い、小学部や高等部との円滑な連携を目指した中学部の在り方について研究を進めてきた。

以上の取組に加え、近年、生徒数の増加や生徒を取り巻く環境の変化による実態の多様化の現状を受け、これまで以上に実態把握と根拠に基づいた正確な支援や指導が必要とされている。中学部では、学習活動が教科担任制で行われており、生徒は、多くの指導者から支援や指導を受けながら学習活動に取り組んでいる。したがって、指導者には生徒一人一人の実態を再度見直し、支援や指導を共有し、全員でブレの少ない働き掛けをしていくことが求められる。そこで、今年度の全体テーマに加え、中学部のテーマを「みんなで考える実態に応じた支援や指導を踏まえた授業づくり」と設定し、以下の3点を中心に据え、二年間継続して研究を進めることとした。



①学習指導要領の要点整理

- ・三つの柱で整理された各教科等の目標や学習内容の要点を整理する
- ・主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりのポイントを共有する



②「学び」をつなぐためにできる工夫

- ・「学びをつなぐ7つのミッション」に基づいた授業づくりの工夫を共有する
- ・令和元年度の現職教育で作成した学習内容表を活用して、国語科と数学科の段階的な学習指導計画を作成する

③障害特性と実態に応じた支援や指導の共有

- ・中学部の支援・指導や障害特性について確認する
- ・各学年で検討した「生徒の実態・支援シート」を活用し、9月と1月に部で共有する

(2) 授業づくりの取組

授業づくりにあたって、先に述べた3点を中心に進めることとした。また、二年次はグループワークを設定し、3～4人のグループで授業づくりを行うことにした。

①学習指導要領の要点整理

指導者に対して行った事前アンケートから、改訂された学習指導要領の要点が十分に把握できていないという課題があった。そこで、研究授業で実施する各教科等について事前の現職教育の時間に学習指導要領の改訂のポイントと各教科等の見方・考え方や三つの柱で整理された目標、学習内容について確認し、積極的な授業改善につなげることができるようにした。

また、授業改善を図るために、一年次の6月の現職教育の時間に「主体的・対話的で深い学びを実現するための授業づくりのポイント（資料1）」を共有し、授業展開の工夫や評価の手掛かりとした。

②「学び」をつなぐためにできる工夫

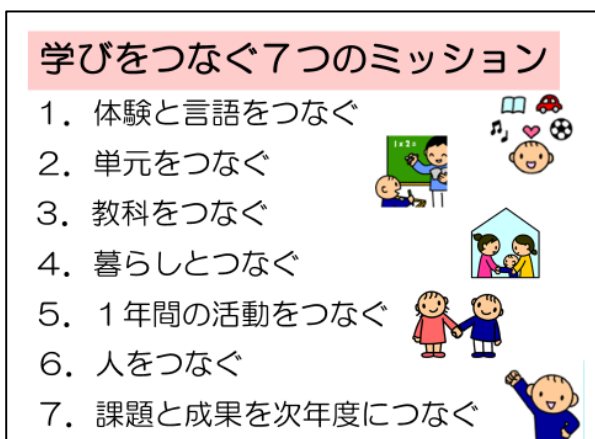
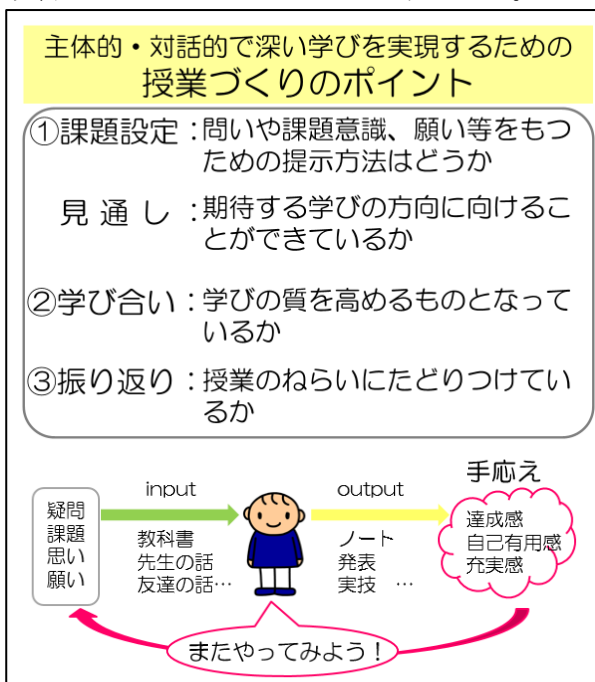
各教科等や単元間、一年間の活動、家庭や地域と学びをつないでいく授業づくりを展開していく必要がある。そこで、「学びをつなぐ7つのミッション（資料2）」を共有することで、学びの連続性や教科等の関連を意識して学習指導計画を設定し、学習活動の工夫につながるようにした。また、国語科と数学科については、令和元年に見直しを行った学習内容表を活用し、1年生から3年生までの学びの地図を可視化することで、単元設定の見直しを図った。

③障害特性と実態に応じた支援や指導の共有

授業づくりにあたって、障害の特性を知っておくことは、実態把握や適切な支援や指導の根拠となるうえで大切である。また、中学部には、学年ごとに習熟度に合わせて複数のグループで編成された教科や1年生から3年生までが一緒に学習する作業学習があり、生徒は様々な学習グループに参加している。そこで、年間を通して毎月20分程度の研修を設定し、生徒一人一人への適切な支援や指導を意識した授業づくりができるようにした。また、指導者全員が生徒一人一人の実態や適切な支援や指導を把握し、チームとなって支援や指導をしていくために、「生徒の実態・支援シート」を活用し、指導者全員で共有することにした。障害特性と実態に応じた支援や指導の取組については、現職教育の取組の頁で詳しく述べる。

次頁より、これらの取組を踏まえて実践した令和2年度と令和3年度の全校研究授業の様子について紹介する。

また、グループワークの取組については、現職教育の取組の頁で紹介する。



2 研究授業の取組

(1) 令和2年度 全校研究授業学習指導案（生徒の実態と個別目標は省略）

音楽科学習指導案

指導者	教諭 三好菜穂子 (T 1)	教諭 鈴木美恵 (T 2)
	教諭 藤川弥生 (T 3)	教諭 鍛谷佐知 (T 4)
	教諭 山下智美 (T 5)	教諭 柳生豪英 (T 6)
	教諭 岡本真紀 (T 7)	教諭 小野田沙織 (T 8)
	講師 稲葉絵梨香 (T 9)	

1 日 時 令和2年10月23日（金曜日）第3校時（10：30～11：15）

2 学 級 中学部 第2学年 30名（男子16名、女子14名）

3 場 所 音楽室、視聴覚室

4 単元名 丸養まつりに向けて器楽合奏をしよう

5 単元について

- (1) 本校では、毎年12月に丸養まつりが開催され、中学部の生徒は音楽でのステージ発表をしている。そこで、二学期は発表している姿を保護者に参観してもらうために、ステージ発表に向けた歌唱や器楽合奏の学習活動を設定している。

2020年はベートーベンの生誕250周年であり、日本では、年の瀬には多くの会場で「交響曲第9番ニ短調作品125 合唱付き」が歌われている。また、「交響曲第5番ハ短調作品67『運命』」や、ピアノ曲「エリーゼのために」は一般的に広く知られており、多くの生徒も冒頭の特徴的なフレーズを耳にしたことがあると思われる。そこで、ベートーベンの作曲した「エリーゼのために」と「交響曲第5番ハ短調作品67『運命』」のモチーフをマンボ風にアレンジした楽曲「アイライクエリーゼ」を合奏曲に設定した。繰り返されるメロディは覚えやすく、マンボ風の軽快なリズムとテンポによって、明るい曲調を楽しみながら演奏できる一曲である。また、様々な楽器を用いた合奏を通して、他のパートとともに作るハーモニーやリズムの面白さに気付き、友達と心を合わせてより良い演奏をしようという意欲を育てることができる。この楽曲の学習やステージ発表での演奏を通して得られる一体感や、心を込めた表現活動は、生涯にわたってベートーベンをはじめとするクラシック音楽への興味をもつきっかけになると考え、本単元を設定した。

- (2) 本学年の生徒は、男子16名、女子14名の計30名という中学部で最も多い人数で構成されている。全体的に音楽への興味関心が高く、日頃から様々なジャンルの曲を聴いており、歌唱を好む生徒、自宅でインターネットの動画に合わせて打楽器やボイスパーカッションに挑戦している生徒、音楽を身体全体で表現する生徒、ピアノを習っている生徒などがある。音楽鑑賞には積極的だが、器楽による表現となると不安な気持ちが強くなり消極的になってしまう生徒も多く、実態は様々である。一学期には新型コロナウイルス感染症の対策として、二部屋に分かれて分散授業を実施した。少人数になったことで、指導者の関わりも増え、以前より積極的に挙手したり、発言したりできるようになった生徒がいた。今学期の全体での指導では、指示が受け取りづらく、集中力が持続しにくいときもあるが、一学期に経験したことが自信につながり、友達の前に出て活動し称賛されることで、少しずつ積極性が増してきている。

- (3) 指導に当たっては、授業の初めにプレゼンテーションソフトを用いて本時の流れを提示し、合わせて本時の目標を伝える。毎回学習活動の大まかな流れを統一し、前半は学年全体でリズムの模倣や簡単なリズム創作、後半は少人数に分かれて各パートの練習に取り組むようにすることで、活動に見通しをもって取り組めるようにする。リズムの模倣では、どのようなリズムや表現でも大丈夫であると伝えてから取り組むことで、自分の考えたリズムを友達の前で発表する姿勢や、相手に伝えようとする姿勢が育つようにする。また、今回の発表曲である「アイライクエリーゼ」に使用されているリズムモチーフを取り入れることで、曲中での演奏がスムーズになるようにしたい。

各楽器の演奏では、色音符の楽譜や五線譜の楽譜、リズム譜など個々の実態にあった楽譜を用意する。鍵盤に色や音名を表示し、タブレット端末を用いた手本を手掛かりに、練習を重ねることで、自信をもって演奏できるようにしたい。また、「曲に合うオリジナルのリズムを考えよう」では、曲間で演奏するオリジナルのリズムの創作をする。指導者との対話や、ペア、小グループでの話し合いから徐々にリズムを創作する集団を大きくし、それらを合わせる活動を通して、進んで自分の思いや意図を表現する姿勢を育てたい。さらに、自分の演奏の様子を録画したタブレット端末で確認することで、客観的に振り返り、より良い演奏をしようとする意識が高まるようにする。

このような学習活動を通して、合奏のなかの自分の役割が分かたり、全体で音を合わせる一体感や充実感を味わったりすることで、音や音楽への関心を高め、リズムを聴いたり合わせたりする力を養っていききたい。

6 目 標

- (1) 「アイライクエリーゼ」の曲調の変化や特徴的なリズムの反復、速さが分かり、演奏したり独自のリズムを創作したりする。【知識及び技能】【思考力、判断力、表現力等】
- (2) 他のパートの音をよく聴き、音を合わせる楽しさや、一体感を感じながら演奏する。
【学びに向かう力、人間性等】

7 指導計画（全 22 時間） 本時 13／22

学習活動 \ 時数	1～4	5	6～9	10～12	13	14～16	17～20	21	22
リズムをよく聴いて模倣しよう	○	○	○	○	○				
オリジナルのリズムを発表しよう			○	○	○				
作曲者と曲名、曲の特徴を知ろう	○	○	○	○	○				
パート練習をしよう			○	○	○	○	○		
曲に合うオリジナルのリズムを考えよう						○			
合奏しよう				○	○	○	○		
リハーサルをしよう							○		
発表しよう								○	
振り返ろう									○

8 生徒の実態・個別目標（省略）

9 本時の学習

(1) 目 標

- ・リズムのリーダーに注目し、リズムを聴いて模倣する。
- ・自分で考えたリズムを、前に出て発表する。(て、へ、ほ)
- ・自分の担当するパートのリズムやメロディが分かり、楽譜の「あ」の部分の正しく演奏する。
- ・曲の冒頭や特徴的な部分のリズムをよく聴いて演奏し、音を合わせる楽しさを味わう。
- ・自分の担当するパートが分かり、友達の音を聴きながら曲の雰囲気を感じて自発的に音を出したり、身体を動かしたりする。(し、は)

(2) 準備物

ホワイトボード、リズム譜カード、テレビ、パソコン、ビデオカメラ、延長コード、タブレット端末5、デジタルパーカッション、スピーカー2、楽譜

[音楽室] グランドピアノ、ピアノ椅子2、電子ピアノ、キーボード大2、ボンゴ、コンガ、アゴゴベル、グロッケン、鉄琴、木琴、箱木琴大、ハモンドオルガン、譜面台4、長机1、キーボード台2、角椅子2、椅子3

[視聴覚室] ウッドブロック、フロアタム、タンバリン、マラカス2、クラベス2、箱木琴2、箱鉄琴、音積み木、鍵盤ハーモニカ3、キーボード小3、譜面台、長机3、生徒机3、椅子6、CDデッキ、CD

(3) 学習指導過程

学習活動	活動への支援と手立て
1 始まりの挨拶をする。	・各学級の日直から号令をする者を指名する。友達の様子を見ながら号令を掛けるよう促す。
2 今日の学習内容を確認する。	・本時の活動に見通しがもてるように、プレゼンテーションソフトで活動内容を一つずつ提示しながら確認する。生徒の前面の壁面にも本時の流れを表示しておく。
3 リズムアンサンブルをする。	
(1) リズム模倣をする。	・全員で「いち、に、さん、し、よく見て聴いて。」の掛け声を掛けながら、前方の指導者に視線を向けて、集中して音を聴くように促す。前方に注目できていない場合は「よく見て、よく見て。」と繰り返し伝える。数パターンのリズムを打ち、徐々に内容を変えることで飽きることなく取り組めるようにする。
・T1のリズム	
・友達のリズム	
(2) リズムのリーダーに挑戦する。	
(3) 「手拍子の花束」を演奏する。	・自分で考えたリズムでリーダーをするために、前に出る生徒を3名指名する。人数はあらかじめ伝えておく。自信をもって発表できるように、リードした生徒のリズムの良かった点を具体的に称賛する。友達のリズムを聴くときも指導者のリードのときと同じように集中して聴くように促す。
(4) リズム譜を見てリズムを打つ。	・T3、T7は隣のパートにつられそうな生徒の傍で手本を見せたり、言葉を掛けたりしながら、落ち着いて取り組めるようにする。
・「アイライクエリーゼ」の特徴的な部分のリズム譜を見ながら打つ。	

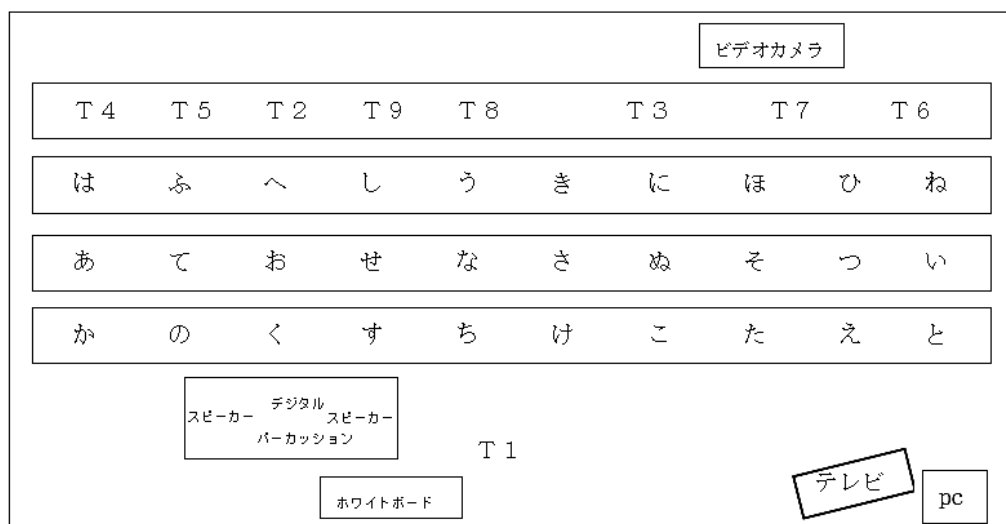
	・「手拍子の花束」や、「アイライクエリーゼ」の「ウンタンウタタタンウンウンウン」のリズムを全員で打つことによって、合奏になったときにしっかりと拍を合わせなければならない意識をもつことができるようにする。はっきりリズムを言いながら打つことで、休符の部分を意識できるようにする。
4 本時の合奏の全体目標を確認する。	・パート練習後に全体で楽譜の「あ」の部分を合奏することを伝える。 ・合奏で音を合わせるという目標を達成するためには、一人一人が自分のパートをしっかり練習しなければならないことを伝え、パート練習にすすんで取り組めるように促す。
5 音楽室と視聴覚室に分かれてパートごとに練習する。	・T 2、T 3、T 4、T 5、T 6、T 7、T 8、T 9は各担当パートの生徒の練習の過程で良い点を称賛したり、改善が必要な点についてアドバイスしたりする。 ・CDをかけたり、タブレット端末を用いて範奏を見たりしてリズムや運指を確認しながらすすめる。 ・T 1は各パートの様子を巡視して演奏の様子を確認し、必要に応じてアドバイスをする。
6 全員でタイミングを合わせて部分的に数回合奏する。	・T 1は音楽室の楽器の音が視聴覚室に聴こえるかを確認する。曲の冒頭をよく聴くように言葉を掛け、全体で一定の速さで「あ」の部分を演奏できるようにする。
7 合奏した感想を各部屋で発表する。	・意見を出しやすいように、必要に応じて選択肢を伝え、選択肢のなかから選べるようにする。
8 次時の学習について確認する。	・次回から、いくつかのグループで16拍分のリズム創作をすることを伝え、取り入れてみたいリズムがあるか聞く。ある場合は披露してもらい、見通しをもつことができるようにする。
9 部屋ごとに終わりの挨拶をする。	・T 1、T 2は日直に、友達の様子を見ながら号令を掛けるように促す。

(4) 評価

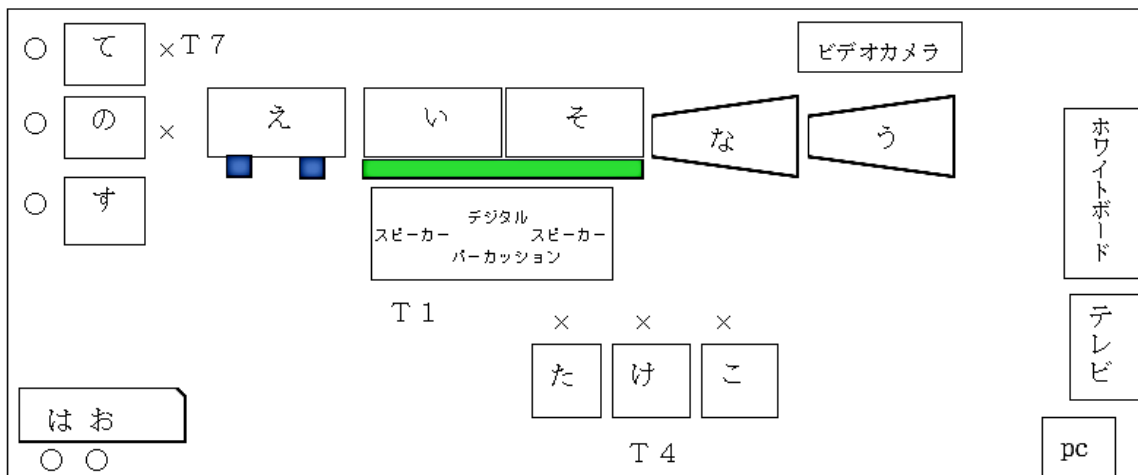
- ・リーダーの合図に合わせて、自発的にリズムを模倣できたか。
- ・積極的にリーダーになり、自分の考えたリズムや身体表現ができたか。(て、へ、ほ)
- ・自分の担当するパートのリズムやメロディを、一定の速さで演奏できたか。
(い、え、お、こ、す、そ、た、つ、と、に、の)
- ・曲の冒頭や特徴的なリズムを演奏できたか。(あ、う、き、く、け、さ、ち)
- ・指導者の合図に合わせて演奏できたか。(か、し、せ、な、ぬ、ね、ひ、ふ、へ、ほ)
- ・他のパートの音を聴きながら、意欲的に音を合わせることができたか。(い、え、お、こ、た)
- ・同じパートの友達と、意欲的に音を合わせることができたか。
(あ、う、き、く、け、す、せ、そ、ち、つ、と、に、の)
- ・曲の冒頭や特徴的なリズムを合わせることができたか。
(か、さ、て、な、ぬ、ね、ひ、ふ、へ、ほ)
- ・自分の担当する楽器の場所へ行き、友達の音を聴きながら、意欲的に音を出したり身体を動かしたりすることができたか。(し、は)

10 配置図

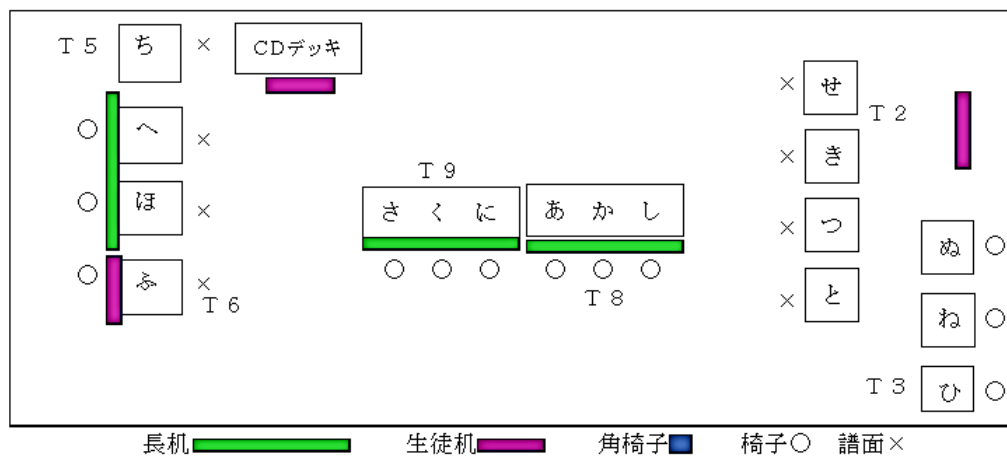
学習活動1 音楽室



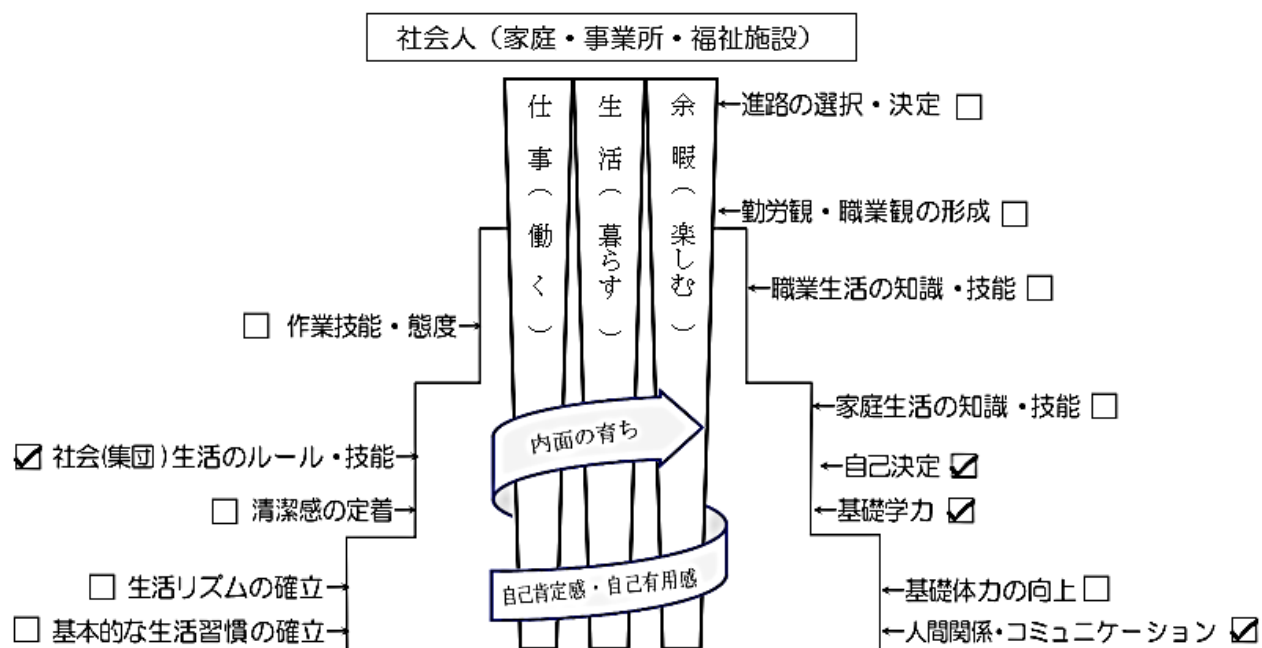
学習活動2 音楽室



学習活動2 視聴覚室



11 進路に関する学習指導内容の構造化のチェック



(2) 研究討議の記録

①研究テーマに沿った授業づくりで工夫したこと

「学び」をつなぐ視点

- ・体験的に理解した速さや強弱などの言葉の意味を各教科等の学習活動へとつなぐ。
- ・表現したり一体感を味わったりした経験を、暮らしのなかで余暇へと生かし、人とのつながりや豊かな生活へとつなぐ。
- ・一年間を通して互いに表現の良さを伝えたり認め合ったりする経験を積み重ね、中学部の目指す生徒像へとつなぐ。
- ・できるようになったことや難しかったことを振り返る場面を設定し、自分で気付いた課題を次の学習や次年度の取組へとつなぐ。



(リズムの創作活動)

主体的・対話的で深い学びの視点

【課題設定】

- ・一年次から「いち、に、さん、し、よく見て聴いて」のリズムの創作学習に継続して取り組んだ。リズム感を育むとともに、前向きな姿勢を育てることができるようにした。
- ・生徒一人一人が力を十分に発揮できるように、生徒の得意なことや好きなこと、頻繁に見られる動作などを参考に担当する楽器を選んだ。
- ・生徒の実態に応じて、音符に色を付けたり鍵盤にキャラクターの写真を付けたり、鍵盤の数を調整したりして、少し努力すれば達成できそうな課題を設定した。



(色や写真付きの鍵盤と楽譜)



(鍵盤の数の調整)

【見通し】

- ・発表会までの予定や本時の予定を確認し、大まかな活動の流れを同じにすることで、見通しをもって取り組むことができるようにした。

【学び合い】

- ・タブレット端末の動画の手本を見ながら練習することからはじめ、「同じパートの友達とペアで」「違うパートの友達と4人で」「三つのパートの友達と6人で」のように、段階的に取り組んだ。生徒同士でアドバイスをし合いながら、生徒がイメージするよい演奏に向けて意欲的に取り組むことができるようにした。



(動画を見て練習)



(同じパートの友達と練習)



(違うパートの友達と練習)

【振り返り】

- ・T1を中心に、指導者全員で本時の成果や次時の課題をこまめに共有し、評価シートや練習の様子動画を手掛かりに、生徒の目標と指導者のねらいが同じ方向に向かうような振り返りの時間を設定した。

②生徒の様子と変容

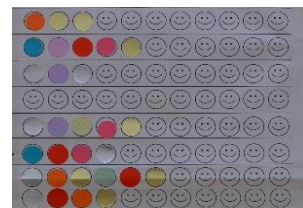
入学当初は、人の前で何かをすることへの不安や失敗をしたくないという気持ちが強く、できる内容でも取り組もうとしない生徒が多かった。しかし、30人という大きな集団のなかで、自分の行動が受け入れられる経験を重ねたことが少しずつ自信につながり、前向きに挑戦しようとする姿が見られるようになった。また、上手に演奏できたことを実感したり、少し努力すればできそうな課題を自覚したりすることができる支援や指導をすることで、自主練習を始めるようになり、意欲的に合奏に参加するようになった。このような取組を継続的に行うことで、生徒の自己肯定感が少しずつ高まるとともに、音楽をノンバーバルなコミュニケーションとして用いることによって、お互いを理解し、認め合う人間関係づくりができたのではないかと考える。



(動画を見て自主練習)

おとバト！ 乙武君の音の才能アリバトル！				
月日				今日の目標
9/4	ひとり演奏	岡本先生の手の拍子にあわせ	市岡君と達さ	大平君と達さ
			をあわせ	をあわせ
10/13	ひとり演奏	岡本先生の手の拍子にあわせ	市岡君と達さ	大平君と達さ
			をあわせ	をあわせ

(自己評価シート)



(意欲を高めるポイント表)

③授業評価アンケートより

『学び』をつなぐ工夫に対するコメント」

- ・自己反省を促すことで、課題に気付き、主体的な学習やより深い学習につながると思う。
- ・音楽を楽しんでいたのも、音楽が好きになって、きっと余暇につながると思う。
- ・人をつなぐ視点が大切だと感じる。何かができるようになり、それを表現することで自己肯定感が高まるし、表現し合って合奏をすることで、互いの良さを認め合う関係や集団への所属意識につながる。

「主体的・対話的で深い学びが実現できていた生徒の様子とそのための手立て」

視点	生徒の様子	手立て
主	C Dや友達の出す音を意識しながら、楽譜を見て、自主的に楽器を演奏できていた。	楽譜の音符が色分けされていて、鍵盤の色と合っていた。長さや数字が書かれていた。
主・対	どの生徒も、「よく見よう」「よく聞こう」という気持ちで、リズムを感じ、模倣することができていた。	「いち、に、さん、し、よく見て聴いて。」のリズムを取りやすい掛け声で、注目を集め、注意を向けられるようにしていた。
深	パート練習の際、一人一人が自分のパートの大切さを理解し、それを感じ取って練習に取り組んでいた。	各パート担当が適材適所に決められており、それぞれの生徒が達成できる目標設定がされている。適度な緊張感をもって、集中力を高める環境設定ができていた。

「チームへ一言」

- ・人と合わせるということを意識しやすい教科。集団でしっかりと取り組むことで、他の教科や学校生活に活かしていける。
- ・達成感や楽しさに加えて「人と一緒に」「相手への意識」など、対人的な学習にもつながっているように感じた。
- ・生徒たちが苦手意識をもたず、生き生きとした表情で参加していて、合奏で味わう一体感を通して、音楽の楽しさは人生を豊かにすると実感した。



(3) 令和3年度 全校研究授業学習指導案（生徒の実態と個別目標は省略）

生活単元学習指導案

指導者 教諭 柳生 豪英（T1）
教諭 藤川 弥生（T2）
講師 藤原 健誌（T3）

- 1 日 時 令和3年6月16日（水曜日）第5校時（13：10～13：55）
- 2 学 級 中学部 第3学年4組5組 「ちーむ やぎゅう」4名（男子3名、女子1名）
- 3 場 所 中学部3年5組教室（214教室）
- 4 単 元 名 お茶会をしよう「みんなでチャ・ちゃ・茶」～すべてはみんなのうまいのために～
- 5 単元について

- (1) 本単元は、4、5組の生徒9名が実態に合わせて「ちーむ やぎゅう」「いけした HD」の2グループに分かれて取り組んでいる。本グループは、男子3名女子1名の計4名で構成されている。主なコミュニケーション手段としては、音声言語による生徒もいれば、音声言語によるコミュニケーションが十分ではない生徒もいる。しかし、実物や写真による視覚支援が有効であり、挨拶の言葉や、日常よく耳にする短い単語であれば理解して、行動に結び付けることができる。

お茶会については、一昨年からの生活単元学習で、各家庭と支援方法を共有し、連携を大切にしながら取り組んでいる。昨年度の生活単元学習では抹茶茶わんを製作し、手作りの茶わんで茶を入れる経験をした生徒もおり、お茶会への親近感が高い。お茶会のテーマ「みんなでチャ・ちゃ・茶」を口ずさむ生徒や、「今年もやりたいな。」という生徒もおり、生徒にとってお茶会は大変楽しい時間になっている。また、これまで段階的かつ継続して取り組んできたお茶会の経験をもとに、ある程度、活動のイメージをもつことができ、その流れも少しの促しで取り組んだことができつつある。抹茶茶わんや食べたい茶菓子を選択し、それぞれの手段で伝えることができしており、選択したものと実物とはほぼ一致している。そこで、今回もお茶会を題材に学習に取り組み、茶道のもっている文化的側面である行儀、作法、振る舞いなどを少しでも身に付けさせたい。

- (2) 毎日の生活のなかで幾度となく口にする茶は、かつて薬として飲まれていたが、いつしか嗜好飲料として日常で飲まれるようになっていった。特に昨今では、抗酸化作用、リラックス効果、ダイエット効果などと謳われることも多くなっている。とりわけ茶道は、抹茶をたててすすめる作法である。作法といってもけっして堅苦しいものではなく、人と人との楽しい時間を共有し、互いを思いやり交わるときの言葉を必要としないコミュニケーションの手段の一つとして捉えることができる。最近では、地域や障害者施設の行事でも、茶会を行うところもあり、今後の余暇活動のより豊かなQOL（生活の質）の向上に直接的につながっていく可能性がある。

本単元では、「学び」をつなぐ授業づくりを念頭に、略式ではあるが茶道を一年間実施し、生徒の変容を促していくことにした。茶菓子や抹茶茶わんを選択、決定し、振り返ることを繰り返すことは、自己決定や自分の意思を生活に反映する機会になると捉えている。また、正座やお辞儀といった作法は、場や状況に応じた振る舞いを身に付け、相手をもてなすという気配りや思いやりにもつながることができる。さらに、生徒の役割を固定し繰り返し行うことで、見通しをもって役割に取り組むことができる。そして、それを認められ賞賛されるという体験が、生活のなかや家庭での取組に般化し、また発展できると考え、本単元を設定した。

- (3) 指導にあたっては、一単位時間の学習過程を、常に同じ流れで行うことで、見通しをもって取り組むことができるようにする。必要な生徒には、割り稽古という形で個々のスキルアップをねらっていきたい。また、生徒が個々の役割を理解し、主体的に役割を果たす経験を重ね、自己肯定感や責任感を育てるために、一人一つの役割を任せることにする。必要に応じて指導者が、生徒が行動できるように手助けをして支援にあたる。

選択する活動場面を設定し、写真と文字による選択カードより茶菓子の選択を行う。選択の幅を広げるために新しく登場した茶菓子は事前に試食を行う。また、振り返りの場面では、選択や正座、お辞儀の様子など、めあてに関連する活動の様子を動画や静止画で提示することで、本時のそれぞれの活動を振り返る場とする。学習活動全体をとおして、道具の準備から活動、そして片付けまでを主体的に行うことができるよう、視覚的に分かるような環境設定を行いたい。

家庭との連携として、今回のお茶会では、保護者からの情報提供を受けて実態把握に努めた。「保育所のときにクラスみんなでお茶会ごっこをした程度です。」「お茶会に興味はあるが、やったことはない。」「正座の姿勢をしたことがないのでお茶会の経験はありがたい。」など家庭でのお茶会の実態や保護者の願いなどの情報を得た。また、活動の評価と写真をファイリングしたものを家庭に持ち帰りコメントを記入してもらい欄を設けている。このように学校と家庭とが常に情報交換することで、それぞれの場所での生徒の様子を知るとともに、両者が常に目標を意識しながら本人と関わることで、目標達成に向けた支援やトークンエコノミーシステム（決められた目標を達成するとポイントがもらえ、ポイントが貯まると欲しいものがもらえる制度）の確立を目指している。そして、そこには最大の支援者である保護者自らに支援者であるという意識をもってもらおうというねらいも含まれている。

茶を入れて友達をもてなす取組は、現在は、感染症予防のために難しいが、家庭で余暇として取り入れられるように、学習ファイルを通して連携して取り組んでいきたい。また、指導者だけでなく友達が茶を入れる様子を見る時間を設定することで、注視し、茶を入れる手順を大まかに覚え、自分もやってみたいという気持ちの芽生えを促したり、待つことで集団に参加する力も育んだりしていきたい。

6 目 標

- (1) 正座やお辞儀など、基本的な振る舞いを身に付ける。【知識及び技能】
- (2) 抹茶茶わんや茶菓子の選択を行い、指導者に伝える。【思考力、判断力、表現力等】
- (3) 自分の役割を意識し、主体的に役割を果たし、見通しをもって楽しく学習に参加する。

【学びに向かう力、人間性等】

7 指導計画

お茶会をしよう「みんなでチャ・ちゃ・茶」・・・23時間（本時 8/23）

通年流れは同じであるが、日頃関わっている指導者や保護者、他の学級の友達を招いて実施していく予定である。

<国語科> ・【知・技】 3ア (イ) 2ア (ウ) 2イ (イ) 3ウ (イ) ・【思・判・表】 A 2イ 2 Aイ 2 Aエ 3 Bウ ・【思・判・表】 C 2エ	<自立活動> 1 (4) 障害の特性の理解 2 (1) 情緒の安定 3 (1) 他者とのかかわりの基礎 3 (4) 集団への参加 6 (1) コミュニケーションの基礎的能力 6 (2) 言語の受容と表出 6 (3) 言語の形成と活用 6 (4) コミュニケーション手段の選択と活用 6 (5) 状況に応じたコミュニケーション
<数学科> 【知・技】 1 A(ア)㊦ 1 Aイ(ア)㊦ 【思・判・表】 1 A(イ)㊦ 1 Aア(イ)㊦ イ(イ)㊦	
<生活科> ・オ 2 (イ) ・カ 2 (ア) ・キ 2 (ア) ・ケ 2 (ア)	<職家> 【知・技】 A 1イ (ア) ㊥、1 Cア 1 Aイ(ア) 【思・判・表】 ア(イ)
<道徳> (A) 主として自分自身に関すること (B) 主として人との関わりに関すること (C) 主として集団や社会との関わりに関する こと	<保健> H 1 ア

8 生徒の実態・個別目標（省略）

9 本時の学習

（1）目 標

- ・正座やお辞儀といった場や状況に応じた振る舞いを身に付ける。【知識及び技能】
- ・茶菓子の選択を適切に表明し指導者に伝える。【思考力、判断力、表現力等】
- ・役割を知り、すすんで準備や仕事を果たそうとする。【学びに向かう力、人間性等】

（2）準備物

役割分担表、司会用原稿、めあて用原稿、じゅうたん、固定用テープ、座布団 2、ポット、茶器、抹茶茶わん、食器ケース、茶杓、茶筌、茶菓子 2 種、BGMセット、カメラ、ファイル用籠、ファイル、評価用シール、話型、チェインジングボード、コンテナ 2、可動式の台車、めあてカード、タイトルカードセット、お運び用支援マット、足型シート、椅子 7、机 2、台拭き 4、生徒顔写真、手指消毒液 2、ウェットティッシュ

（3）学習指導過程

学 習 活 動	活動への支援と手だて
1 はじめの会 ・あいさつ ・司会 ・めあて ・タイトルコール	・司会係(F)、あいさつ係(H)、めあて係(I)、タイトルコール(E)係を決め、毎時一定にしておくことで、見通しをもち生徒が主体的に役割を果たせるようにする。 ・司会をする際、進行表を自分で確認しやすいように、原稿配置を工夫する。
教室移動 池下HD(EFGHI)は別教室で活動	

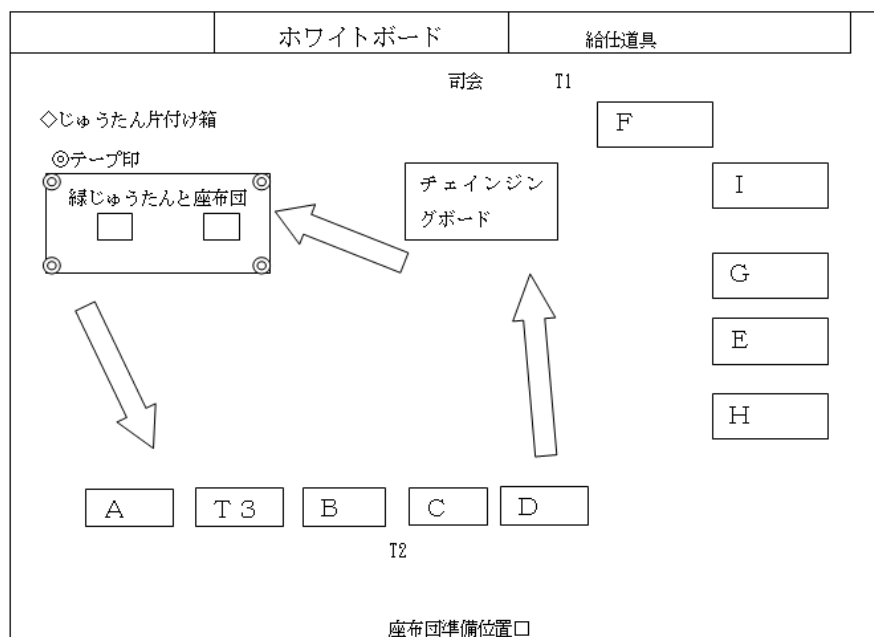


2 お茶会の準備する。	・じゅうたん係(C)、座布団係(D)、固定テーブル係(B)、カード掲示(C)係を決め、毎時一定にしておくことで、見通しをもち生徒が主体的に役割を果たせるようにする。 ・タイトルやめあてのシート、座布団を置く場所などが分かるように視覚的な支援を用意する。 ・感染症予防のために上靴を脱ぎ手指消毒やマスクの確認を行う。
3 グループ別お茶会 (1) 茶わんとお菓子を選択する (2) 席に着き正座をする (3) お辞儀をする (4) お茶を飲む (5) 合図まで待つ	・学習のめあてを常時意識付けるために、文字とイラスト入りのめあてカードをよく見える位置に提示する。 ・友達の活動が見やすいように、椅子を横並びに配置する。 ・座る位置が分かるように座布団を敷いておく。 ・T2、T3は、選択、正座やお辞儀ができるように、必要に応じて生徒が自発的に行動できるように支援する。 ・役割の意識が持続するように、必要に応じて即時評価を行う。 ・食いたい茶菓子を適切な言葉で伝えることができるように、話型をチェインジングボードに用意する。 ・顔写真を用意することで、前の人の方の活動の終わりと、次に活動する人が分かるように促す。 ・茶わんや茶菓子を選択する場所が分かるように足型シートを用意する。 ・T2は、選択したカードを指導者に出せるように、必要に応じてT1を指さしたり、行動を促したりする。
4 友達を呼びに行く。(A) 池下HDグループの茶入れの様子を見る。	・呼びに行く友達が分かるように顔写真を提示する。 ・盆や茶を正しい位置に置くことができるように、支援マットを用意しておく。
5 振り返り	・Bがファイルを配ることができるように、ファイルに生徒の顔写真を貼っておくことで、主体的に役割を果たすことができるようにする。 ・今日の活動の内容を振り返り、自分が選んだ茶菓みにシールをワークシートに貼ることができるように、活動の様子を写真で一人一人確認する。 ・順番を意識して待つことができるように、足型シートを用意しておく。 ・ファイルを置く場所が分かるように、籠の中にファイルの写真を貼っておく。
6 片付け	・係を決め、毎時一定にしておくことで、見通しをもち生徒が主体的に役割を果たせるようにする。
7 挨拶	・司会をする際、進行表を自分で確認しやすいように、原稿の配置を工夫する。

(4) 評価

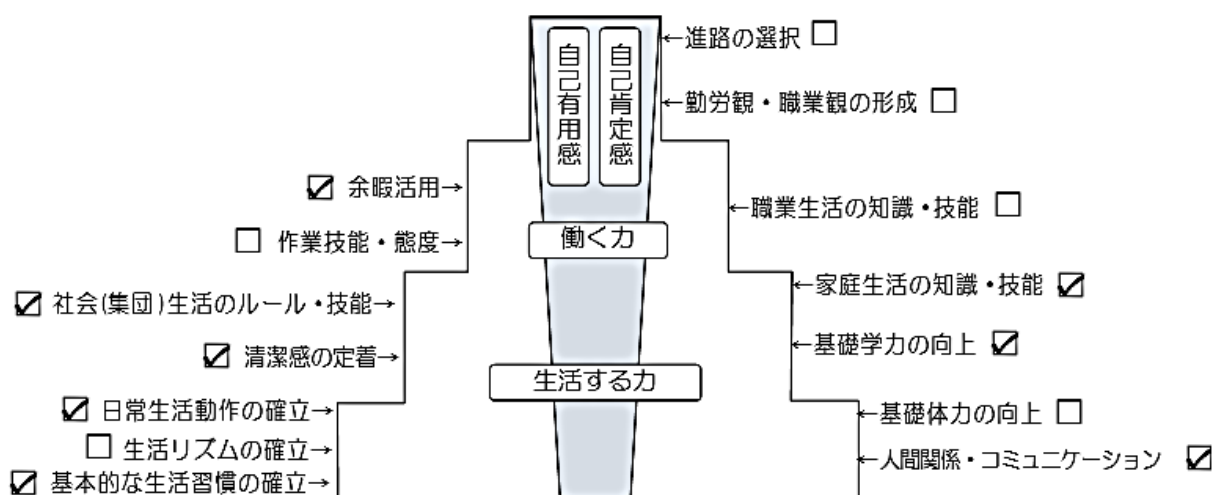
- ・めあてのカードや指導者の促しによって、正座やお辞儀といった場や状況に応じた振る舞い
ができたか。(A C D)
- ・相手の動きに合わせてお辞儀ができたか。(B)
- ・写真と文字による選択カードや話型を使って、茶菓子の選択を適切に表明し指導者に伝える
ことができたか。
- ・支援ツールや指導者の促しを手掛かりに自分の役割を意識し、すすんで取り組もうとするこ
とができたか。

10 配置図(主に5組でのはじめの会 以下省略)



E F G H I は別教室で活動

11 自立と社会参加に向けた学習内容のピラミッドのチェック



(4) 研究討議の記録

①研究テーマに沿った授業づくりで工夫したこと

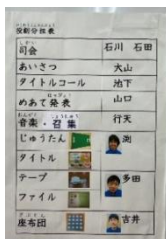
「学び」をつなぐ視点

- ・「お茶をいただく」と「おはこび」の両方の活動を通して、相手との関わり方や振る舞い、「どうぞ。」や「ありがとう。」といった言葉の理解につなぐ。
- ・振り返りのファイルや連絡帳を通して、取組と成果を家庭と共有することで、家族の一支援者としての意識を高め、卒業後の暮らしにつなぐ。
- ・休み時間や授業を通して、教室を行き来しやすい雰囲気を日常的に作ることで生徒同士をつなぐ。
- ・できるようになったことを振り返る場面を設定し、自発的に動くことを増やし、次の学習や次年度の取組へとつなぐ。

主体的・対話的で深い学びの視点

【課題設定】

- ・保護者から家庭でのお茶会の経験や保護者の願いなどの情報を聞き取り、実態把握と目標設定や活動への支援と手立てを考えた。
- ・「茶菓子や抹茶茶わんを選択→決定→振り返り」を繰り返すことで、自己決定を促し、自分の意思を反映できるようにした。
- ・道具の準備や片付けにおいて一人一つの役割を任せ、自己肯定感を高めたり、責任感を育てたりすることができるようにした。
- ・学習活動全体を通して視覚的な支援を増やし、必要最低限の言葉掛けで準備や片付けができるようにした。



(役割分担表)



(座布団を運ぶ係)



(ファイルを配る係)



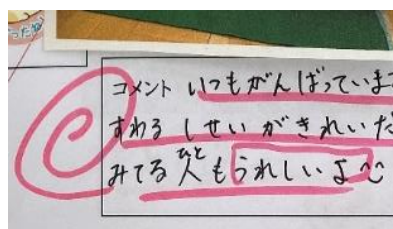
(じゃうたんを敷く係)

【見通し】【学び合い】

- ・一単位時間の学習過程を常に同じ流れにすることで、見通しをもって取り組むことができるようにした。
- ・友達の様子がよく見える座席配置にしたり、手本となる生徒が茶を入れる様子を見る時間を設定したりすることで、茶を入れる流れを友達から学んだり、集団の中に参加しようとする意識を高めたりするようにした。

【振り返り】

- ・活動の評価と写真をファイリングしたものを家庭に持ち帰り、コメント欄に記入してもらうことで、生徒自身が評価される機会を増やすとともに、指導者の授業改善につなげた。



(振り返りシート)

②生徒の様子と変容

毎時間、同じ流れで授業を行うことで、視覚的支援を手掛かりに生徒達で準備や片付けをすることができるようになった。また、自分で選んだり相手に合わせて行動を考えたりと、自発的な行動がたくさん見られた。本単元以外の活動場面でも落ち着いて活動ができることが増えてきた。

言葉掛けを減らし、自分で動くことができるように朝や下校前、休み時間のルーティーンワークはできるだけ「表現」ととらえて尊重することで、安定した気持ちで行動できる場面が増えた。自己表現が豊かになり、多くの言葉を発している。

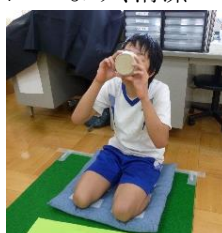
今後の課題としては、引き続きコミュニケーション能力を伸ばし、器の中で回転させる動きを身に付けてコップ洗いや簡単な調理の手伝いにつなげ、清潔への意識を高めていきたい。



(写真を見て選ぶ)



(相手に合わせてお辞儀)



(両手で飲む)



(友達のおはこびを見る)

③授業評価アンケートより

『学び』をつなぐ工夫に対するコメント

- ・学校と家庭が情報共有しているので、校外で茶を飲む経験があれば、家庭でも社会資源を利用する機会が増えるかもしれない。
- ・一年次からの継続と友達の様子を見ての確認が見通しをもち、落ち着いて取り組めるようになることにつながった。
- ・指導者だけでなく、友達、家庭といろいろな人とのつながりがある。

「主体的・対話的で深い学びが実現できていた生徒の様子とそのための手立て」

視点	生徒の様子	手立て
主	どの生徒も自分の役割や順番、何をすることが分かり、流れを理解して準備や片付けまですることができた。	基本的には生徒の動きを待つ姿勢で、きっかけを待っていたり、戸惑っていたりする場面では写真や指差し、短い言葉掛けをしていた。
主・対	自分で茶わんやお菓子を選んで伝えることができ、自分の欲しいものが食べられて幸せそうだった。	選んで伝えられるように、視覚的に分かりやすいように茶わんのみを提示した。写真カード2枚から選択するという場面を設定した。
深	実際のお茶席のような雰囲気を作り出すことで、緊張感をもって取り組んでいた。	座布団や音楽などを準備してお茶席と似た雰囲気づくりを行ったことがお茶会の緊張感を作っていた。

「チームへ一言」

- ・「いつでも どこでも だれとでも」ができる題材。特別ではない感じが良い。
- ・家庭と連携して取り組んでいるところが良い。そこをベースにまた新しいことにチャレンジできそうな感じがする。
- ・待つ姿勢が大事。生徒が最初は意図通りの行動をとらなくても「お茶会」の雰囲気を保ちながら待つことで、最後には主体的に目標となる行動がとることができていた。



3 現職教育の取組

(1) 障害特性と実態に応じた支援や指導の取組

生徒の実態の多様化に応じた指導者の適切な実態把握と支援や指導、指導者間の指導方針の共有を目的に、20分程度の研修を実施した。ADHDや自閉スペクトラム症、ダウン症などの障害の特性に加えて、近年増加傾向にある心の問題や生活リズムに触れるテーマも設定した。

令和二年度の研修	
4月	中学部の支援・指導について
6月	中学部の生徒の障害の概要について
7月	ADHDについて
8月	自閉スペクトラム症について
9月	ダウン症などの染色体異常について 「生徒の実態支援シート」の共有①
11月	愛着障害、愛着の問題について
1月	「生徒の実態支援シート」の共有②

令和三年度の研修	
4月	中学部の支援・指導について①
5月	中学部の支援・指導について②
6月	場面緘黙(選択性緘黙)について
9月	「生徒の実態支援シート」の共有①
10月	生活リズム・生体リズムの問題について
1月	「生徒の実態支援シート」の共有②

また、これらの研修を踏まえて、学級のなかで特に配慮が必要であると考えた生徒について、生徒の実態・支援シートを作成し、指導者全員で共有した。生徒の実態・支援シートは、「実態について」「支援や指導、対応の方針」の二つの項目について記入できるようにしている。

「実態について」では、生徒の行動や学習、生活、感覚運動や体力などについて、課題だけではなく長所も書くことに留意した。

「支援や指導、対応の方針」では、中学部の目指す生徒像「仲良く 友達と協力し 行動する生徒」につなぐ視点から、自己肯定感や自己有用感を育てるための手立てについても記入するようにした。

令和元年度 生徒の実態及び支援シート

生徒の実態について

支援・指導・対応の方針

〈実態について〉

- ・生徒の行動、学習、生活
- ・体（感覚運動機能や体力）
- ・家庭状況等

※長所もしっかり書く
行動の原因も分かるようなら書く

〈支援や指導、対応の方針〉

- ・指導・支援内容について
- ・自己肯定感や自己有用感を育てるための手立て

※学級外の教員にも知っておいてもらいたいことは、特にしっかりと書く

(2) グループワークの取組（二年度）

一年次の研究を通して、「主体的・対話的で深い学びのイメージはできたが実践につながない」「目標と評価の書き方に不安がある」などの意見があり、様々な視点が授業づくりのなかでどのように位置づけられているのかが整理できていないと感じている指導者が多かった。また、指導者が集まって話し合う時間の設定が難しいことから、令和三年度（二年度）は研究授業の取組に加えて、グループワークの時間を設定し、3～4人の小グループで授業づくりを行った。

担当する各教科等を参考にグループごとに一つの単位について、1年間を通して取り組んだ。一年次の研究授業の取組や「学びをつなぐ7つのミッション」、「主体的・対話的で深い学びを実現するための授業づくりのポイント」を参考に作成されたワークシートに書き込みながら、年間学習指導計画や学習指導計画の工夫、目標と評価の見直し、学習活動の改善について話し合う場面を設定した。また、年間を通して変容した生徒の様子や指導者の変容、今後の課題についても話し合い、まとめたものを1月の現職教育で共有した。

共有したワークシートの一部を抜粋し、次頁に掲載する（資料3—1、2、3）。



グループワーク 授業づくりワークシート

作成グループ名(エンジェルス)

教科等	生活単元学習	学習グループ	
単元名	ひまわり文庫との交流をしよう 【6月】ひまわり新聞をつくろう 【10月】ひまわり文庫と交流をしよう		
学習グループの様子			

①学習指導計画

内容	具体的な学習活動	時数
【6月】 ひまわり文庫の教材を紹介しよう	【6月】 ・学級ごとに一つの教材を使って、その面白さを友達に紹介する。 ・映像を映したり、写真や紹介文をまとめて「ひまわり新聞」を作り、互いに発表し合ったりする。	12
【10月】 ひまわり文庫の活動を知ろう	【10月】 ・ひまわり文庫の活動の様子を DVD で見たり、メッセージを聞いたりして、どのような活動をしているかを知る。 ・敬う心を育て、相手を意識して手紙を書く。 ・言葉遣いや態度に気を付けて、相手とのやりとりを経験する。	14

②学びをつなぐ工夫

「つなぐ」ミッション		取組
体験と言語をつなぐ		・感じたことを新聞の記事にしたり、言葉で発表したりする。 ・相手を意識して手紙を書く。 ・丁寧な言葉遣いをする。
1年間の活動をつなぐ	単元同士をつなぐ	「ひまわり文庫の教材で遊ぼう」 ⇒「ひまわり新聞を作って友達に紹介しよう」⇒「ひまわり文庫の活動をもっと知ろう」⇒「感謝の気持ちを手紙で伝えよう」⇒「交流をしよう」⇒「年賀状を書こう」
	教科同士をつなぐ	・国語「作文」「手紙の書き方」 ・美術「表現」「鑑賞」 ・自立活動「人間関係の形成」「コミュニケーション」
暮らしとつなぐ		・年長者を敬う心を育て、社会の中での他者との関りにつなげる。
人をつなぐ		・いくつかの教材を使って遊び、ひまわり新聞を作ることで、他者の好きなものを知り、理解する気持ちや態度を育てる。 ・交流学習の相手を意識して、年賀状を出す。
課題と成果を来年度につなぐ		・ひまわり文庫への理解を深め、手紙を書いたり、初めて会う相手と対話をしたりする経験をし、コミュニケーションの力を育てる。

③単元の目標

目標(これまで立ててきた書き方の目標)

【6月】・ひまわり文庫の手芸作品について、実際に体験した感想を文章で表す。

・友達と協力して新聞を完成させる。

【10月】

・映像や写真を見て、ひまわり文庫の活動について知る。

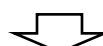
・プレゼントのお礼や、作品を使った感想を手紙に書く。



	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
育成を目指す資質・能力の三つの柱の観点で	【6月】 ・手芸作品を鑑賞したり、実際に触れたりしながら、ひまわり文庫について知る。	【6月】 ・よりよい記事つくりのために友達と協力して工夫点を考える。	【6月】 ・ひまわり文庫の手芸作品に興味をもち、主体的に活動に取り組もうとする。
	【10月】 ・ひまわり文庫の活動の様子を詳しく知る。 ・丁寧な言葉遣いをする。	【10月】 ・感謝の気持ちを言葉に表したり、それを手紙に書いたりする。	【10月】 ・作品が出来上がるまでの過程を知ること、その思いに共感したり相手を敬ったりする。

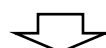
★関連する教科等(各教科等を合わせた指導の場合記入)

各教科等	関連する内容
国語	【知・技】Iア(ア) 【思・判・表】AIア、BIア
美術	・AIア(ア) ・BIア(ア)
自立活動	3(1)(2)(4) 6(1)～(5)



④本時(【6月】7/12時間)の目標

育成を目指す資質・能力の三つの柱の観点で	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
	・前時の学習を振り返り自分の考えをまとめる。	・ワークシートを基に友達の前で発表する。	・友達の発表に共感したり自分の意見を発表したりする。



⑤本時の評価(どこまで達成してほしいか)

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
観点別	・動画や写真を見て、ワークシートを作ることができたか。	・テレビに映ったワークシートを使って、友達の前で発表することができたか。	・友達の発表に注目したり、拍手をしたりして共感することができたか。

⑥本時の学習活動(省略)

⑦授業を終えて

【学習グループ・生徒の様子】

- ・「教材を使って遊んでみる」という取り組みやすい活動から入り、興味関心の高いタブレット端末を利用して動画や写真を撮ることで、意欲的に学習に取り組むことができた。
- ・各学級の発表では、それぞれの教材の面白さを、学級ごとの方法で工夫して伝えることができた。大勢の前に立ち自分の意見を述べることは入学以降初めてのことであったので、不安を感じたり、落ち着かなかったりする生徒もいたが、それぞれの力を出し合い、協力して発表をすることができた。

【よかったなと思った学習活動や指導・支援の工夫】

【6月】

- ・自分の考えを友達に伝えたり、友達の意見に共感したりする経験を重ねることができた。

【10月】

- ・DVD やビデオメッセージを見ることで、ひまわり文庫のことをよく知り、いただいた教材に対する感謝の気持ちをもつことができた。
- ・6月の交流が無かったために相手を意識することが難しかったが、6月、10月を一年間のなかでの一つの流れととらえて、10月に対面の交流を行うことができた。
- ・自分たちが作った「ひまわり新聞」を披露し、見てもらうことができた。
- ・交流学习の相手として意識し、ひまわり文庫へ年賀状を出した。

【改善点と改善するためのアイデア】

- ・今後の交流学习の在り方そのものについて、変更や改善が必要となっている。今回の取組は、ひまわり文庫との交流の在り方を考えるよい機会となった気がする。
- ・今後は今までとは異なり、コミュニケーションの取り方にも制限や変化が出てくるものと思われる。例年通りの内容で交流を終わらせるのではなく、その機会を十分に生かせるよう、臨機応変に交流の内容や方法を考えていく必要があることを感じた。

⑧単元を通しての学習グループ・生徒の変容と今後の課題

- ・自分の意見をまとめてひまわり新聞を作り、発表した経験が、7月、10月の総合学習の発表にも生かされており、経験の積み重ねによる成長を感じることができた。

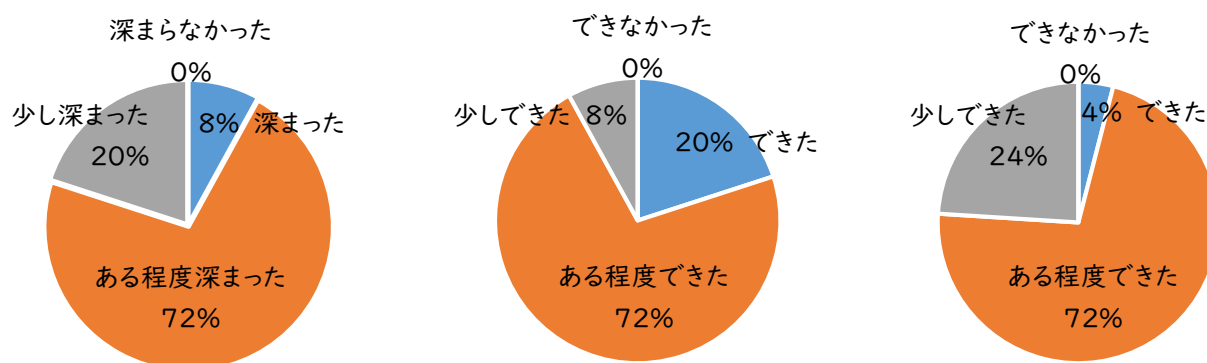
⑨年間を通しての生徒の変容と今後の課題

- ・6月「ひまわり新聞」⇒7月プレゼントをいただく⇒10月ひまわりセンターでの交流と、例年通りの交流が難しい時期であったが、できる範囲内で十分な交流ができた。
- ・二学期には、DVD やビデオメッセージを事前学習に取り入れることで、一学期の学習を生かしながらひまわり文庫のことを十分に知ることができた。実際の交流の場面では、生徒からひまわり文庫に質問をしたり、お礼の言葉を伝えたりする様子が見られた。
- ・ひまわり文庫と一緒に作品を使って遊んだり、実際の制作の場を見たりする機会をもてたことは、生徒にとって相手を理解する貴重な経験となった。

4 まとめ

二年間の研究を通して、主体的・対話的で深い学びの視点や「学び」をつなぐ工夫、生徒の実態に応じた支援や指導を大切にしたい授業づくりを探ってきた。研究を進めるにあたって、二年間中心に据えてきた以下の3点について事後アンケートをとった。

- ①学習指導要領の要点への理解を深めることができたか。 ②障害特性や生徒の実態に応じた支援や指導を実践できたか。 ③「学び」をつなぐ授業づくりの工夫ができたか。



アンケート結果からは、いずれの取組もある程度実践できたことが分かった。また、「学習指導要領を読み合わせる時間があつたことで理解が深まった」「『生徒の実態・支援シート』の取組は、支援や指導の方法が深まり、生徒の成長につながってよかった」など、幾つかの取組が有効であることが確認できた。一方で、主体的・対話的で深い学びや三つの柱などの学習指導要領が示す内容を授業づくりのなかで整理していく過程に難しさを感じている意見があつたが、今後の課題を意識した前向きなものであつた。

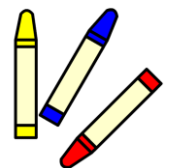
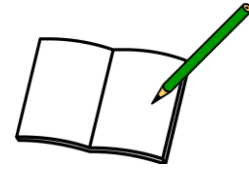
「学び」をつなぐ授業づくりの実践では、やや消極的な結果となつたが、学習内容表を活用することで、次に設定すべき学習目標や内容を考える目安となつたという意見が多く、学習内容表の活用は「学び」をつなぐうえで効果的であることが分かった。一年間の取組や各教科間をつなぐための工夫、単元間をつなぐための工夫など、長期的な課題として改善していく内容であるため、今後も継続して取り組んでいく必要がある。

以上の結果から、来年度は、今年度有効であつた取組を継続するとともに、「学び」をつなぐ工夫や主体的・対話的で深い学びを実現するための授業の改善を長期的な視点で行っていくことが求められている。また、授業づくりをしていくうえでICT機器の活用や進路を見据えた支援や指導、コミュニケーションを大切にしたい支援や指導などについても関心が高まっている。

これらの視点も取り入れながら、中学部の目指す生徒像「仲良く 友達と協力し 行動する生徒」を目指し、生徒一人一人が夢中になれる授業研究を進めていきたい。

<参考・引用文献>

- ・特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・中学部・中学部） 文部科学省
- ・特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 各教科等編（幼稚部・中学部・中学部） 文部科学省
- ・カリキュラム・マネジメント入門 田村学 東洋館出版社
- ・知的障害教育におけるカリキュラム・マネジメント
丹野哲也・武富博文 東洋館出版社
- ・知的障害教育ならではの主体的・対話的で深い学びができる本 神山努 Gakken
- ・深い学びへのアプローチ「主体的・対話的で深い学び」からの授業実践
全国特別支援学校知的障害教育校長会 東洋館出版社
- ・特別支援教育における3観点の「学習評価」 通知表の文例集と記入例
宮崎英憲 監修 明治図書
- ・特別支援教育研究 No. 728. 2-5
知的障害教育における改訂のポイントと円滑な実施にむけて 武富博文 東洋館出版社
- ・特別支援教育研究 No. 728. 12-14
対話的で深い学びの視点を踏まえた授業改善 涌井恵 東洋館出版社
- ・育てたい資質・能力×各段階の術語タキソミー（試案）
高知大学教育学部附属特別支援学校第25回教育研究（2019）
- ・特別支援教育をキャリア発達の観点で捉えなおす
実践キャリア教育の教科書 菊池一文 Gakken
- ・視覚シンボルで楽々コミュニケーション 障害者の暮らしに役立つシンボル1000
ドロップレット・プロジェクト編 エンパワメント研究所
- ・視覚シンボルで楽々コミュニケーションおかわり2 障害者の暮らしに役立つシンボルNew1000
ドロップレット・プロジェクト編 エンパワメント研究所





中学部 めざす生徒像

仲良く 友達と協力し 行動する生徒

研究推進者

部主事 北村和史

馬場久美子
三好菜穂子
富士川夕華
瀬部 樹亜
永井 智恵
堀 泉穂
石原 沙織

西山 利夫
真鍋ゆかり
亀井佐智子
柳生 豪英
稲葉絵梨香
小野田彩織
草野沙也加

矢野 修二
福島 正博
山下 智美
宮崎 良枝
田中 伸弥
大川 拓馬

豊田 一郎
藤川 弥生
齋藤 広
木下 賢二
岡本 真紀
須東 昌美

鈴木 美恵
鍛谷 佐知
大恵 信昭
亀山 友紀
三村 捺美
藤原 健誌



高 等 部

I 高等部の研究について

II 四つの取組

- 1 研究授業を通して
- 2 学習内容の構造化をどう指導に生かすか
- 3 手伝い・余暇等の時間調査
- 4 現場実習の評価表の改訂と考察

III 2年間の研究の成果と課題

I 高等部の研究について

高等部のテーマ

生きる力を育む授業づくり ～仕事・生活・余暇の視点から～

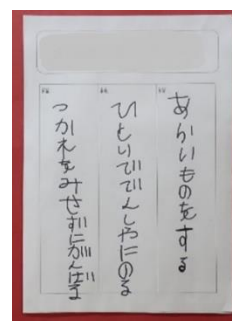
1 高等部のテーマ設定について

高等部の生徒のなかには対人関係の構築や感情のコントロールの難しい生徒や人間関係の問題を抱える生徒がいる。成功体験が積み重ねられておらず少しの失敗や注意にも気持ちが折れてしまう生徒も多い。努力して企業に就職しても卒業後数年で離職するケースもあり、高等部ならではの様々な問題が起こっている。そのような生徒の様子を見るにつけ、レジリエンス（何があってもしなやかに立ち直る力）を育てる必要性を感じている。

そこで、高等部で話し合った学習内容の構造化をどう指導に生かすかを考察するとともに、「仕事（働く）」「生活（暮らす）」「余暇（楽しむ）」の3本柱を大切に、生きる力をもった生徒の育成をめざして研究を進めることとした。

2 研究の進め方

「研究授業」、「学習内容と仕事・生活・余暇との関連」、「手伝い・余暇等の時間調査」、「現場実習の評価表の改訂と考察」の四つの取組を通して研究を進めることにした。



ある学級の三学期の目標掲示（仕事・生活・余暇それぞれの目標を立てている。）

II 四つの取組

1 研究授業を通して

(1) 令和2年度 全校研究授業学習指導案（生徒の実態と個別目標は省略）

作業学習学習指導案

指導者	教諭	小林敬芳（T1）	教諭	川崎重敏（T2）
	講師	石原健悟（T3）	講師	島田実季（T4）
	教諭	樋口敏郎（T5）	実習教諭	塩田多恵子（T6）

- 1 日 時 令和2年9月11日（金曜日）9：40～12：00
- 2 学 級 高等部 軽作業班 12名 1年4名（男子3名、女子1名）
2年5名（男子4名、女子1名）
3年3名（女子3名）
- 3 場 所 軽作業室
- 4 単 元 名 受注作業（うちわののし袋づくり）をしよう
- 5 単元について

- (1) 軽作業班は、有限会社丸協印刷から受注した「うちわののし袋づくり」に取り組んでいる。
うちわののし袋は、お中元やお歳暮の時期にうちわにかぶせて、贈る相手にお祝いやお礼の気持ちを添える飾り袋で、丸亀市ならではの贈答品として親しまれている。会社から注文を受けた製品は、実際に社会に流通し、直接消費者の手にわたるため、規格通りに仕上げるのが最も重要である。そのため、地域の産業とのつながりを意識しながら、意欲と責任感の向上が期待できる単元であると考え。
うちわののし袋は、印字の入った1枚の薄い紙を折ったりのり付けしたりすることで作られており、生徒たちにとって身近で扱いやすい素材である。比較的単純な作業で出来上がり、重ねたり運んだりすることが容易であるため、視覚的に出来高も分かりやすく、達成感を得やすい。しかし、ずれや汚れ、しわなどに気を付けなければならず、規格に沿った製品でなければ廃棄になることもある。正確な製品作りを心掛けることが、作業遂行力を高めることにつながると考える。また、生徒の特性や能力に応じて作業を分担し、友達と協力して一つの製品を作ることは、自分の担当する工程に責任をもって取り組む姿勢が期待できる。そして、受注から納品までの過程を通して会社の方とのつながりを感じながら、同じ作業を繰り返すことで、生徒の主体性を生み、将来の仕事へもつながってくると考える。また、キャリア教育の観点からも自己理解・自己管理能力と課題対応能力の力を付けることが有効であると考え、本単元を設定した。
- (2) 本グループの生徒は、1年生4名、2年生5名、3年生3名の計12名で構成されている。受注作業は一学期から続けてきており、作業の流れや気を付ける点を覚えてきつつある。どの生徒も任された仕事に意欲的に取り組み、製品であることを意識してミスを減らそうと努力したり、出来高を増やそうと試みたりする姿勢が見られるようになってきた。しかし、作業時間が長くなってくると集中力が維持できず、作業効率が悪くなったり、自分の持ち場を離れたりする様子も見られている。また、質問や報告の声が小さかったり、指示を待っていたりするなど、主体的な行動が少なく、作業態度面で課題のある生徒も多い。しかしながら、繰り返し同じ活動をすることで、自分の課題が理解できつつある生徒も見られるようになってきた。

- (3) 指導にあたっては、受注作業を意識できるようにするために、会社の方から気を付けてほしい点や評価をまとめたビデオメッセージを見る活動を取り入れ、作業に意欲や責任感をもって取り組めるようにする。朝礼では、軽作業班の目標を唱和することで、目標の意識付けを図りつつ、元気よく作業に取り掛かれるようにする。返事や報告については、確実に行うよう促し、目線や声の大きさについても意識できるように喚起したい。

作業では、一人一人の作業能力に応じた補助具を工夫したり、工程を細分化したりすることで、なるべく指導者の援助がなくてもできるよう設定し、責任をもって取り組めるようにしたい。作業量が分かりやすいように、出来高ボードを用意し、1枚できるごとに磁石を数字の上にのせていく。10枚できるごとに指導者に報告するようにし、その都度点検する。規格通りできている場合は、引き続きミスなく取り組むことができるよう言葉掛けをし、できていない箇所があればその都度確認し、同じミスを繰り返さないようにするための確認や言葉掛けを行い、正確な作業を意識付けたい。集中力を持続することが課題の生徒には、あらかじめタイムタイマーを設定しておき、作業が終わるまでの時間が視覚的に分かるよう提示し、集中して取り組める時間が増えるように支援していきたい。

評価の際には、目標に沿った場面を指導者がタブレット端末で撮影したり、出来高やミスの数を棒グラフで表したりすることで、より正確に振り返りができるようにする。できた場合には称賛しながら次の目標を提案したり、できなかった場合には、原因を一緒に考えたりして、対話しながら深い学びへと導き、次の活動の意欲へとつなげていきたい。また、作業だけでなく、準備や片付けについても責任をもって活動できるように、資材や補助具の置き場所の環境を整え、繰り返し活動することで主体的に取り組める場面を増やしていきたい。

6 目標

- (1) 任された作業を正確に行い、一つ一つの製品を丁寧に仕上げる。
- (2) 決められた時間内、集中して作業し、作業量を増やす。
- (3) 見通しをもって、自主的に作業や準備、片付けに取り組む。
- (4) 挨拶、返事、報告など、働く人として適切な態度を身に付ける。
- (5) 目標をたてて達成できるように取り組む。(A、B、D、E、F、G、I、J、K)
- (6) 自分の行う作業が分かって取り組む。(C、H、L)
- (7) 自分の課題を見付け、作業への意欲を高める。

7 指導計画

月 内容	6月	7月	9月	1月	2月	3月
のし袋の作業工程を知ろう(3時間)	→					
いろいろな工程の作業をやってみよう (9時間)		→				
任された作業に取り組もう (30時間)						→
納品をして、会社の方のコメントを聞こう			↔		↔	
一年間のまとめをしよう						→

(本時 43～45/90)

<他の教科等との関連>

<国語科> ・言葉の特徴や使い方に関する事項 ・聞くこと、話すこと ・書くこと ・読むこと	<自立活動> ・状況の理解と変化への対応 ・他者とのかかわりの基礎 ・自己の理解と行動の調整 ・集団への参加 ・コミュニケーションの基礎的能力 ・言語の受容と表出 ・言語の形成と活用 ・コミュニケーション手段の選択と活用 ・状況に応じたコミュニケーション
<数学科> ・数と計算 ・変化と関係 ・データの活用	
<職業> ・職業生活 ・情報機器の活用 ・産業現場等における実習	

8 生徒の実態・個別目標（省略）

9 本時の学習

（1）目 標

- ・任された作業を正確に行う。（A、B、D、E、F、G、I、J、K）
- ・自分の担当する工程を理解し、正確に作業する。（C、H、L）
- ・時間いっぱい集中して作業に取り組む。
- ・適切な声の大きさに返事をしたり、指導者に報告したりする。
（A、B、D、E、F、G、I、J、K、L）
- ・適切なタイミングで指導者に報告をする。（C、H）
- ・目標をたてて、達成できるように作業に取り組む。（A、B、D、E、I、J）
- ・指導者と一緒に目標をたてて、達成できるように作業に取り組む。（C、F、G、H、K、L）
- ・行った作業の達成度を確認し、反省点を考える。（A、B、D、E、F、G、I、J、K）
- ・指導者と一緒に作業内容を振り返る。（C、H、L）
- ・作業の見通しをもち、準備や片付けを自主的に行う。

（2）準備物

原材料（うちわののし袋、水のりなど）、原材料用コンテナ、ヘアキャップ、筆、スタンプ、筆置き、準備表、準備手順表、補助具類、磁石、磁石ボード10、角のり用シート、計数用ボード、数字カード、出来高表、出来高グラフ、タブレット端末（ビデオアプリ、タイムタイマー用アプリケーション）、テレビ、DVDデッキ、花シール

(3) 学習指導過程

学 習 活 動	活動への支援と手だて
1 準備をする。 ・ヘアキャップを着用したり手を洗ったりして、身だしなみを整える。 ・日誌に「今日の仕事内容と目標」を記入し、担当の指導者と確認する。 ・資材や使用する補助具を準備する。	・自主的に準備に取り組めるように、手順表を掲示しておき、することが分からない生徒には、見るよう促す。 ・髪の毛がはみ出していないかを確認できるように鏡を用意しておき、自分で確認するよう促す。 ・製品を汚さないための手洗いであることを確認し、しっかりと手を洗うよう助言する。できていない生徒に対しては、言葉掛けをしたり、指導者が手を添えて一緒に洗ったりする。 ・必要な資材や補助具の準備が不十分な場合は、準備表を見るよう促し、足りない物を取ってくるよう促す。 ・自主的に準備ができるよう、使用する道具類のセットを一つの籠に入れておく。(C、K、L) ・会社の方からのビデオメッセージや掲示を見て、気を付けるポイントを確認したり、前回の活動を一緒に振り返ったりすることで、目標が具体的にたてられるよう助言する。 ・担当する工程が分かる写真シールを日誌に貼って確認する。 (C、H、L)
2 朝礼をする。 ・ペアの友達と身だしなみの確認をする。 ・軽作業班の目標を班長の合図で唱和する。	・生徒主体で朝礼が進行できるように、班長用の原稿を用意しておき、定時がきたら始められるように促す。(A) ・T1、T4、T6は、身だしなみのポイントが分かりやすいように服やヘアキャップを指さして、一緒にできているかを確認する。 (C、H、L) ・T1は、元気よく作業に取り掛かれるように、姿勢や声の大きさに気を付けて目標を言うよう促す。
3 担当の作業をする。 紙折り (D、I) ・折り目の基準となる「を」に合わせて紙を折る。紙の上下を目視して、ずれがないように折る。	・出来高が自分で確認でき、適切なタイミングで報告することができるようにするために、磁石ボード10に磁石を置いて、10枚できるとに指導者に報告するよう促す。 ・出来高が視覚的に分かりやすいように、指導者が点検したあと実態に応じて出来高表に正の字で書いたり、シールで貼ったりする。ミスがあった場合には、ミスの欄に記入する。 ・規格通りできている場合は、引き続きミスがないよう取り組むよう言葉掛けをし、ミスが生じた場合は、その都度気を付けるポイントを伝えることで、正確な作業を意識付ける。 ・効果的な振り返りができるように、それぞれの生徒の目標に沿った場面をタブレット端末の動画で撮影しておく。 ・自分で規格に合っているかを確認できるように、確認ボードを用意しておき、10枚ずつできるとに確認ボードに重ねて確認する。できていない場合は折り直しをせず、T2に報告する。 ・T2は、正確に折ることができているかを確認し、ずれている場合には、ミスを繰り返さないよう助言する。

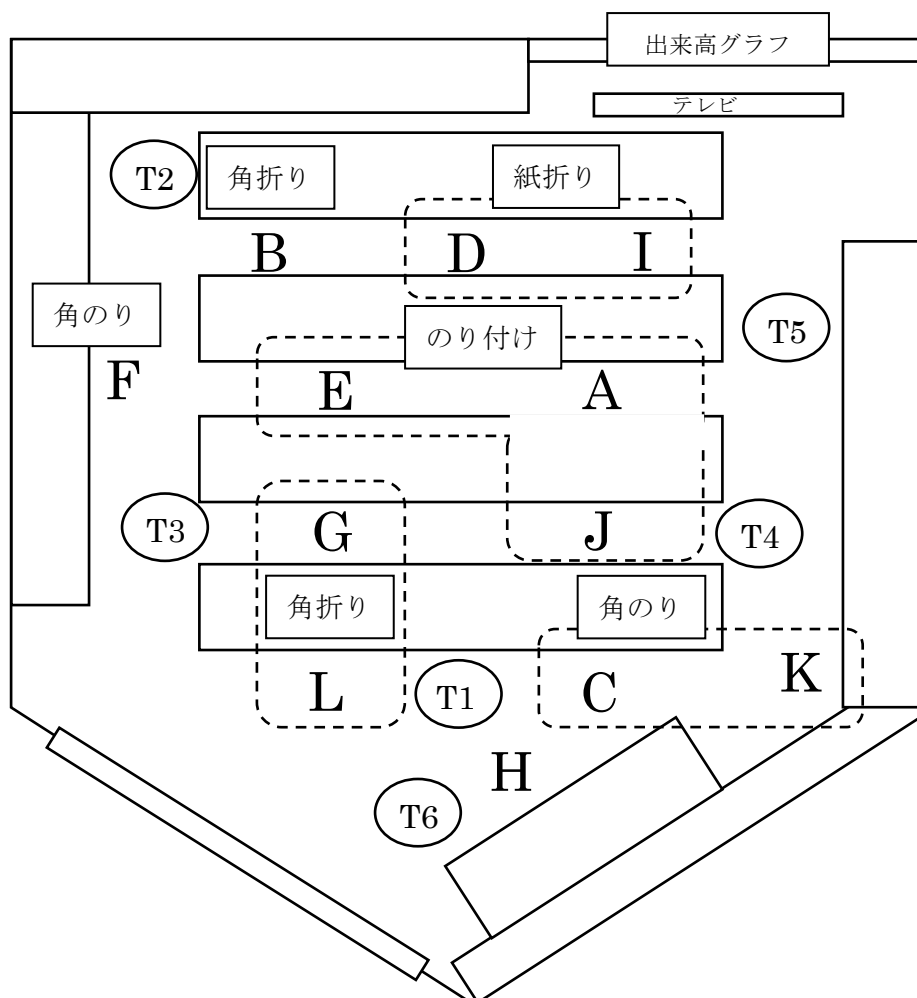
のり付け (A、E、J) ・筆でのりを適量取り、紙を折り返して貼り合わせる。	・のりを付ける位置が分かりやすいように補助具を使用して作業する。 ・筆にのりを付けて、均等な厚さでのり付けができるようにする。 ・のりの量を確認し、T 4、T 5 はのりがはみ出たり、紙がはがれたりする場合には、繰り返さないように助言する。 ・自分で規格に合っているかを確認できるように、確認ボードを用意しておき、10 枚ずつできるごとに確認ボードに重ねて確認する。できていない場合は、T 4 と T 5 に報告する。 ・時間いっぱい作業に取り組めるように、タイムタイマーを用意しておき、休み時間や終わりの時刻がくるまで手を止めずに作業できるように T 4 が言葉掛けをする。(J)
角折り (B、G、L) ・規格と同じ位置に折り目を付ける。	・正しい位置で折れるように、型に合わせて紙に折り目を付ける。(B、G) ・紙に折り目を付けるまでの一連の作業を自分で取り組めるように、角折り用の補助具を用いて取り組む。(L) ・自分で規格に合っているかを確認できるように、確認ボードを用意しておき、10 枚ずつできるごとに確認ボードに重ねて確認する。できていない場合は、T 2 と T 3 に報告する。(B、G) ・自主的に報告ができるように、作業する材料を 10 枚置いておき、なくなったときに T 1 に報告するよう促す。(C)
角のり (C、F、K)	・正しい位置にのりが付くよう補助具を用いて取り組む。(C) ・自主的に報告ができるように、作業する材料を 10 枚置いておき、なくなったときに T 4 の肩をたたいて報告するよう促す。(C) ・正しい位置にのりが付くよう角のり用シートを用いて取り組む。(K) ・時間いっぱい作業に取り組めるように、タイムタイマーを用意しておき、休み時間や終わりの時刻がくるまで、手を止めずに作業できるように T 3 が言葉掛けをする。(F)
計数 (H) ・できたのし袋を正確に数える。10 枚の束が 10 セットできたら T 2 に報告する。 4 後片付けをする。	・正確に計数ができるように計数ボードにのし袋を置いていき、10 枚数えることができたなら数字カードを 10 の束の上に置いていく。 ・10 枚の束が 10 セットできたら、T 2 に報告するよう促す。 ・T 6 は、正確に計数ができたときは称賛し、次の作業への意欲を高め、すぐに取り掛かるよう促す。 ・磁石の移動を忘れている場合は、言葉掛けをし、移動するよう促す。 ・資材や使用した道具の片付けができるよう、場所をあらかじめ決めておく。自主的に片付けができるようになるべく見守るようにし、忘れていたり十分でなかったりしたときには、できていないことを説明し、やり直しを促す。(A、B、D、E、F、G、I、J)

	・班長が全体に終了の合図を告げたら、資材や使用した道具の片付けを始められるように助言や促しをする。使用した道具については、自主的に片付けができるように、決められた場所を設定しておく。(C、H、K、L)
5 振り返りをする。 ・行った作業の結果や反省点を実習日誌に記入する。 ・指導者から評価を聞く。 ・出来高グラフを記入する。	・目標が達成できたかを確認しやすいように、タブレット端末の映像を見ながらポイントを画面で確認するよう促す。 ・具体的に反省できるようにするために、指導者と一緒に作業を振り返り、結果や反省点を一緒に考えてアドバイスをする。 ・T1、T4、T6は、作業を振り返ることができるように、日誌の項目を読み上げたり、文字や印を書く援助をしたりする。(C、H、L) ・次時への意欲付けを図るため、指導者の評価を成果と課題のポイントが分かりやすいように伝える。 ・作業量やミスの変化が分かりやすいように出来高グラフへの記入を促し、前回の作業と比較できるように助言する。 ・T1、T4、T6は、出来高グラフを記入し、前回の作業と比較した結果を伝え、次時への意欲付けを図る。(C、H、L)
6 終礼をする。 ・希望者は反省を発表する。	・T1は、作業全体の評価をし、目標が達成できた生徒には、花シールを貼って称賛し、反省点を挙げて次時への意欲を高めるような言葉掛けをする。
7 終わりの挨拶をする。	・班長の号令により元気よく挨拶ができるよう言葉掛けをする。

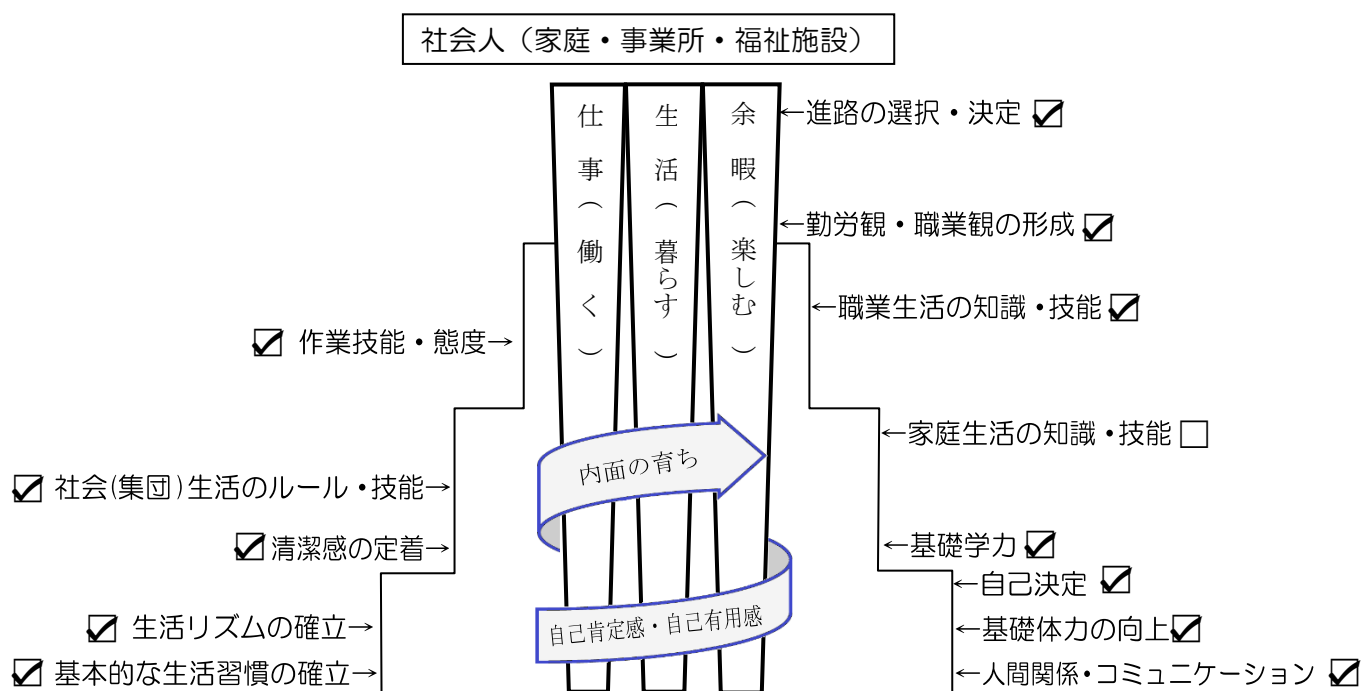
(4) 評 価

- ・製品を一枚一枚丁寧に仕上げることができたか。
- ・時間いっぱい手を止めずに作業に取り組むことができたか。
- ・適切な声の大きさに返事をしたり、10枚できるごとに担当の指導者に報告したりすることができたか。(A、B、D、E、F、G、I、J、K、L)
- ・作業ができたことを、それぞれの伝え方で担当の指導者に報告することができたか。(C、H)
- ・目標を考えて、実習日誌に記入することができたか。
(A、B、D、E、F、G、I、J、K)
- ・担当工程の写真シールを実習日誌に貼って、自分が行う作業が分かって取り組むことができたか。(C、H、L)
- ・行った作業の結果や課題を考えて、実習日誌に記入することができたか。
(A、B、D、E、I、J)
- ・指導者と一緒に出来高を書いたり、ミスの数を数えたりして作業を振り返り、実習日誌に記入することができたか。(C、F、G、H、K、L)
- ・自主的に必要な道具の準備をしたり、元の場所に片付けたりすることができたか。
(A、B、D、E、F、G、I、J、K)
- ・指導者と一緒に準備や片付けを行うことができたか。(C、H、L)

10 配置図



11 進路に関する学習指導内容の構造化のチェック



(2) 研究討議の記録

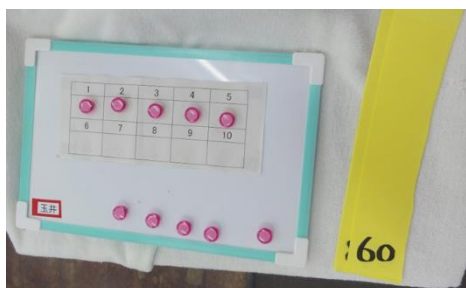
①研究テーマに沿った授業づくりで工夫したこと

「学び」をつなぐ授業

- ・国語の教科との連携としては、目標や課題について、指導者と話し合いながら決めることで、自分の課題を深める場面を設けた。



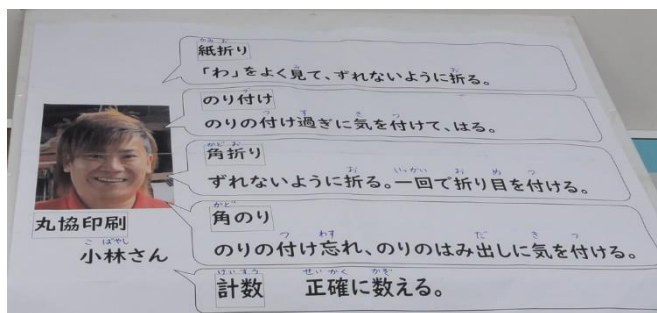
- ・数学の教科との連携としては、計数ボード 10 や棒グラフを通じて、自分の作業量を数理的に捉え、変化を考察する場面を設けた。



- ・指導者が学級担任から報告の仕方をアドバイスしてもらうことで、支援方法を統一した。



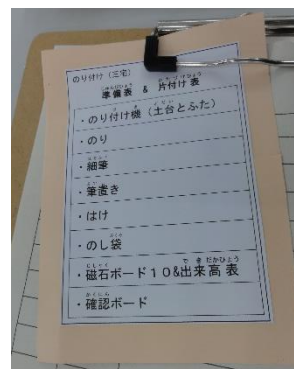
- ・地域の産業との連携としては、受注作業を行い、会社の方の評価を映像で見ることで、責任をもった作業の意識付けを行った。



主体的・対話的で深い学びの視点

【主体的な学びの視点】

- 一人一人の作業能力に応じた補助具を工夫したり、工程を細分化したりすることで、なるべく指導者の援助がなくてもできるよう設定し、責任をもって取り組めるようにした。



- 準備や片付けについても責任をもって活動できるように、資材や補助具の置き場所の環境を整え、繰り返し活動することで主体的に取り組めるようにした。



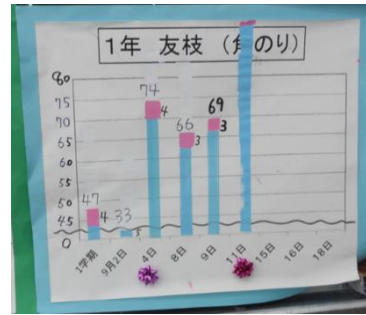
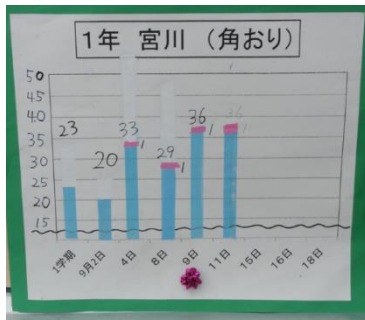
【対話的な学びの視点】

- 評価の際には、目標に沿った場面を指導者がタブレット端末で撮影した画像を見ながらより正確に振り返ることができるようにした。



【深い学びの視点】

- 評価の際には、目標に沿った場面を指導者がタブレット端末で撮影したり、出来高やミス数を棒グラフで表したりすることで、より正確に振り返ることができるようにし、できた場合には称賛しながら次の目標を提案したり、できなかった場合には、原因を一緒に考えたりして、対話しながら深い学びへと導き、次回の活動の意欲へとつなげるようにした。



②生徒の様子や変容

一学期は同じ作業の繰り返しのため、途中で集中力を切らせてしまう生徒もいた。そこで二学期からは「目標をたてる」→「作業をする」→「結果を見て理解する」→「次の課題を見つける」といったサイクルで取り組むことを意識し、作業を固定して取り組んだ。また、一学期は、正確性を上げることを意識するために、パーセンテージ (%) のグラフを使って評価を行っていたが、作業量やミス の数が分かりにくいということが分かり、二学期からは、棒グラフを取り入れた。すると、集中が続かなかった生徒も、徐々にグラフの意味を理解し、次の課題を見つけることができ、たくさん作業をしようという意識が芽生えてくるようになった。また、作業の様子をタブレットで撮影し、評価のときに自分の様子をタブレットで見て、指導者と対話しながらさらに考えを深めていくことでタブレットの利用も効果があったように思う。

また、今回の授業のポイントとしては、一学期に取り組んだ製品を納品したときに、会社の方の評価を動画で撮影し、会社の方、ひいては社会とのつながりが意識できるようにすることと、評価の場面で出来高を生徒にいかに関わりやすく伝えるかということだった。会社の人の言葉を視聴するのは3回目で、目標をたてる際の材料として、生徒たちも集中して見る様子が見られ、指導者が言うよりも効果があったように思う。

授業評価アンケートより

●「学び」をつなぐ工夫に対するコメント

- ・受注を受けている会社からのビデオメッセージを見ることで生徒たちは、会社での仕事の一部分を担うことや、責任をもつことなどをより意識付けできていた。そのため実際の職場とのつながりを感じることができていると思われる。
- ・作業学習においては、なかなか数学的、国語的観点を重視した授業展開ができにくくなりがちだが、意識して、場面を設けていたこと自体が良かった。
- ・難しい支援方法の統一がうまくいっているのはすばらしいことだと思う。



●主体的・対話的で深い学びが実現できていた生徒の様子とそのための手立て

視点	生徒の様子	手立て
主	自分の役割に自信と責任をもって時間内いっぱい取り組んでいた。	補助具や工程の細分化が適切で、個に合わせながら、全体での製品作りが意識できている作業内容だった。
対	Sは「今日はあれ（グラフを指さして）より上に行く。」と言ってさらに記録を伸ばすことを目指していた。	振り返りを視覚化すること、グラフで自分の今までと比べられることで、自分自身との対話による目標設定ができていた。相対的評価を利用することがSには大切である。
対	評価のとき、自分の活動している動画を嬉しそうに見ていた。振り返りがしやすく、とてもよかった。	言葉で伝えるだけでは難しい生徒も、目で見て振り返ることができ、指導者からの一方的な評価になっていないことがよかった。
対・深	棒グラフで今日の頑張りを視覚化することで、Nは出来高グラフの枠を超えていた。笑顔が出たとき、「+20以上のがんばり」の具体化がNの中で生じたのではないだろうか。	出来高棒グラフで数字の概念が具体化していた。

●次につながるアドバイス（討議会での指導内容も含む）

- ・生徒に作業の仕入れから納品まで関わらせてみてはどうか。
- ・作業が、最終的には社会につながっていくことが目に見える授業でよかった。
- ・アドバイスとしては、工程の流れにそってまるく作業場を設定してもよかった。
- ・職業で学んだことを、作業に活かす、これからも続けていってほしい授業である。
- ・会社の方からの直接の注意事項を聞けるのは大切なことで、プロからの言葉は重い。外に行くことがらっと変わる生徒も多いため、学校外の人との関わりは生徒にも良い機会であった。
- ・タブレット端末で動画を撮影することで、自分の様子を振り返る機会となり、モチベーションにつながっていた。自分の姿を直接目にするのは刺激になる。
- ・学習評価の方向性として「学習改善」と言葉が変わっている。学習改善とは、子どもが主体になって、子どもが評価する方法。生徒が主体となって取り組むことで、学びと評価の好循環ができる。
- ・数の伸びは今の目標。最終的には自分の進路につながる力をつけてほしい。
- ・自分のことを自分で評価できる機会は貴重でありよかった。

●チームへ一言

- ・小学部や中学部からいた子どもたちがあんなに落ち着いて作業している姿に感動した。卒業した後の進路について生徒たちも意識できており、中学部の作業にも取り入れていこうと思った。
- ・指導者のチームワークがよく、それぞれの分担がはっきりしており、スムーズに作業が進んでいた。要所要所での言葉掛けや助言が的確だった。

(3) 令和3年度 全校研究授業学習指導案（生徒の実態と個別目標は省略）

職業科学習指導案

指導者	教諭	大山	史靖	(T1)
	教諭	草薙	真木子	(T2)
	教諭	箱崎	白日	(T3)
	講師	石原	健悟	(T4)

- 1 日 時 令和3年10月4日（月曜日）第3、4校時
- 2 学 級 高等部 第3学年 Bグループ 12名（男子8名、女子4名）
- 3 場 所 高等部3年3、4組教室（219、220教室）
- 4 単 元 名 働く力や態度を身に付けよう
- 5 単元について

- (1) 特別支援学校高等部卒業生の進路は、大きく一般就労、福祉就労、進学、在宅の四つに分けられ、本校高等部卒業生の大多数は、一般企業や福祉サービス事業所で働く生活を送っている。

高等部では、1年時に校内実習、2、3年時に現場実習を行っている。1年時は「力を付ける実習」、2年時は「力を試す実習」、3年時は「就職試験」という目標を掲げ、進路選択・進路決定をしていく。高等部3年は、これまでの現場実習の経験を踏まえ、就職試験である現場実習に挑戦し、最終的な進路を決定していく時期である。

今年度、生徒たちは6月に第Ⅱ期現場実習を経験し、そこで明らかになった自分の長所を伸ばしつつ、11月の第Ⅲ期現場実習に向けて課題を克服していけるよう、日々学習に取り組んでいる。学習や様々な基礎作業の経験を通して自分の得意なことや苦手なことを理解しておくことは、卒業後の進路先で自分の能力や適性を発揮するために必要なことである。

また、本校では、「仕事（働く）」「生活（暮らす）」「余暇（楽しむ）」を「生きる力」ととらえ、その三本の柱が充実することで卒業後、安定した豊かな生活を送ることができると考えており、本単元では、「仕事（働く）」ことを重点に置いて「ポチ袋づくり」に取り組むことにした。作業工程には、「型どり」「切る」「折る」「貼る」「エンボス加工」があり、軽作業で求められる基本的な作業内容を学習することができる。そして、次の段階の作業として、商品化するための袋詰めやシール貼りなど、販売活動にも発展させることができる。就職試験である最後の現場実習を直前に控え、働くことの目的や喜び、賃金や工賃が発生する仕事への責任感を養うことができると考え、本単元を設定した。

- (2) 本グループの生徒は3年生12名（男子8名、女子4名）で構成されており、全員が就労継続支援A型またはB型の福祉就労を希望している。これまで校内実習を3回、現場実習を2回経験しており、その都度明らかになった課題を克服できるよう、他の教科と関係性をもちながら学習に取り組んでいる。生徒の実態も様々であり、口頭での全体指示を聞いてある程度行動できる生徒もいれば、注意力が散漫であったり、言葉での理解が難しかったりする生徒も在籍している。しかし、全体への指示での行動が難しくても、必要に応じて個別に手本を見せながら丁寧に説明すると、素直に聞き入れ、行動することができる。

作業能力については個人差があり、比較的作業が速く正確性も高い生徒、作業はゆっくりだがある程度正確に作業できる生徒、作業はゆっくりで正確性にも課題があり個別の指導が必要な生徒がいる。毎時の作業において、作業スピードより正確性が大切であることを意識しながら取り組んでいる。

- (3) 指導にあたっては、一つの工程をピックアップして一斉に行う、手指の巧緻性向上やスキルアップを目的とした時間と、卒業後の就労を意識した製品作りを目的とした時間の二つを設けることで、目的を明確にして学習に取り組めるようにする。一つの工程を全員で作業する際、タブレット端末で成功例と失敗例をテレビに映し出し、気を付ける点を意識して作業に取り組めるようにする。グループに分かれて分業する際には、各グループの作業スピードが同じになるよう生徒の作業能力に応じて4グループに分け、それぞれ「型どり」「切る」「折る」「貼る」作業を分担し、全員で製品完成までの流れを確認することで、自分の役割を明確にして活動できるようにする。また、必要に応じて、生徒が興味をもっている「エンボス加工」の作業を取り入れ、意欲的に取り組めるようにする。グループでの分業でも、タブレット端末で生徒の様子を撮影し、作業の様子や数などの評価を行い、称賛したり次回への改善点を明確にしたりして継続的な学習を積み重ねられるようにする。そして、次の段階の活動として、完成した製品の袋詰めやシール貼りの作業にもつなげ、最終的には販売活動を行い、自分たちの作った製品が購入される喜びや達成感を味わえるよう指導していきたい。

6 目 標

- (1) 挨拶、返事、報告など、働く人として適切な態度を身に付ける。【知識及び技能】
- (2) 手順や道具の使い方を理解し、安全に作業する。【知識及び技能】
- (3) 自分で課題に気づき、解決策を考え、自己評価する。【思考力、判断力、表現力】
- (4) 働くことの喜びを感じ、任された仕事に責任をもって取り組もうとする。【学びに向かう力、人間性】

7 指導計画 (全36時間)

- (1) 第Ⅱ期現場実習に向けて・・・6時間
- (2) 基礎作業Ⅰ（シール貼り）・・・4時間
- (3) 基礎作業Ⅱ（ポチ袋づくり）・・・20時間（本時9、10／20）
- (4) 第Ⅲ期現場実習に向けて・・・6時間

8 生徒の実態・個別目標（省略）

9 本時の学習

- (1) 目 標
 - ・自分から報告、質問をする。【知識及び技能】
 - ・道具を適切、安全に使って作業する。【知識及び技能】
 - ・手順や道具の使い方を自分で考えて作業する。【思考力、判断力、表現力】
 - ・自分の作業に責任をもち、丁寧に取り組む。【学びに向かう力、人間性】

(2) 準備物

タブレット端末（4台）、テレビ（2台）、分配器、チェックシート、はさみ、折り紙、型どりシート、接着剤、スティックのり、のり付け補助具、エンボスヒーター、エンボスパウダー、エンボスインク、まるちゃんすはんこ、名札、グループ分け表、手順表、チェック用籠、○×カード

(3) 学習指導過程

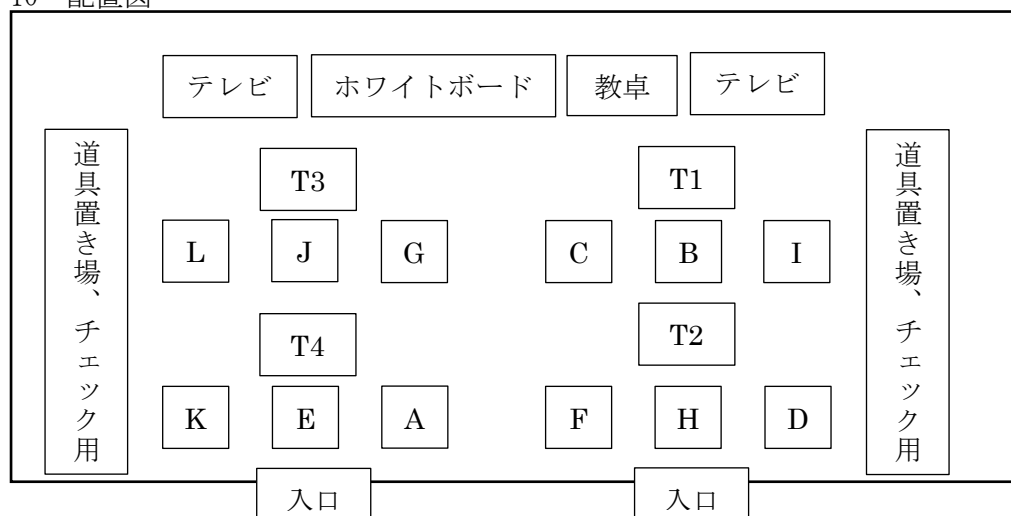
学 習 活 動	活動への支援と手だて
1 始まりの挨拶をする。	・全員の机の上に物が何もなく、作業ができる準備ができているか確認する。 ・作業に始まりを意識し、作業への意欲を高めるため、Kに挨拶をするよう促す。 ・正しい姿勢や態度を意識して挨拶ができるように生徒一人一人の様子を確認し、必要に応じて言葉掛けをする。
2 本時の作業内容を確認する。	・本時の全員作業は「貼る」作業に取り組むことを伝える。 ・タブレット端末を使って、よくある失敗例を見せながら、気を付ける点を確認する。 ・チェックシートを見ながら、できた数より○の数が増えるよう、スピードより正確性を意識して取り組むよう伝える。
3 全員で貼る作業をする。 担当 T1 (B、C、I) T2 (D、F、H) T3 (G、J、L) T4 (A、E、K)	・見通しをもって取り組めるように、毎回、作業時間を10分間設定しておく。 ・補助具の使い方や注意事項を伝える。 ・困っている生徒やうまく貼れていない生徒がいたら、適宜言葉を掛けて改善できるようアドバイスをする。
4 チェックシートに記入する。	・各担当の指導者ができた数、○の数、×の数を評価する。 ・毎時、チェックシートに記入することで、作業の振り返りができるようにする。
5 グループ作業の準備をする。	・ホワイトボードに作業の分担表を示し、確認するとともに、それぞれが取り組む作業が製品作りにおいてどのように役に立っているかを説明する。 ・各グループの道具置き場を指示し、全員で協力して準備するよう促す。 ・何をしたらよいか分からず動いていない生徒には、各担当指導者が具体的な指示を出し、活動に参加できるよう促す。
6 グループに分かれて作業する。 「型どり」B、C、I (T1) 「切る」D、F、H (T2)	・分からないときには、各担当指導者に自分から質問をするよう伝えておく。 ・各担当指導者は、後で振り返りができるようタブレット端末で作業の様子を撮影する。 ・型どり作業では、型どりシートの裏に薄い滑り止めシートを貼り、折り紙が滑らないようにする。 ・Iは型どりだけでなく、適宜他の工程も任せることで、集中力を切らさず意欲的に作業できるようにする。 ・はさみの使い方や注意事項を確認する。

「貼る」G、J、L（T3） 「エンボス加工」 A、E、K（T4）	- 貼る作業では、生徒が自分で道具を選択して使えるように、接着剤とスティックのりを用意する。 - 接着剤を使用する際は、小型のへらを使うことで接着剤を薄く均等に伸ばせるようにする。 - スティックのりを使用する際は、クリアファイルで作った補助具を使うことで塗りやすくする。 - エンボスヒーターは安全に作業するため、必ず使用前に注意事項を確認する。
7 チェックシートに記入する。	- 本時の課題点をチェックシートに記入するよう促し、今後の作業に生かせるようにする。 - 各担当の指導者ができた数、○の数、×の数を評価する。
8 反省、評価をする。	- タブレット端末で撮影した各グループの様子をテレビで見ながら、上手にできていた生徒を称賛する。 - 生徒に挙手を求め、全員の前で反省を発表する機会を設ける。 - 生徒の発表に対して、良かったところを称賛する。
9 本時のまとめをして、終わりの挨拶をする。	- 第Ⅲ期現場実習やその先の進路に向けての重要事項を確認し、次回の授業への意欲を高める。 - T1に注目できているか確認し、Iに元気よく挨拶するよう促す。

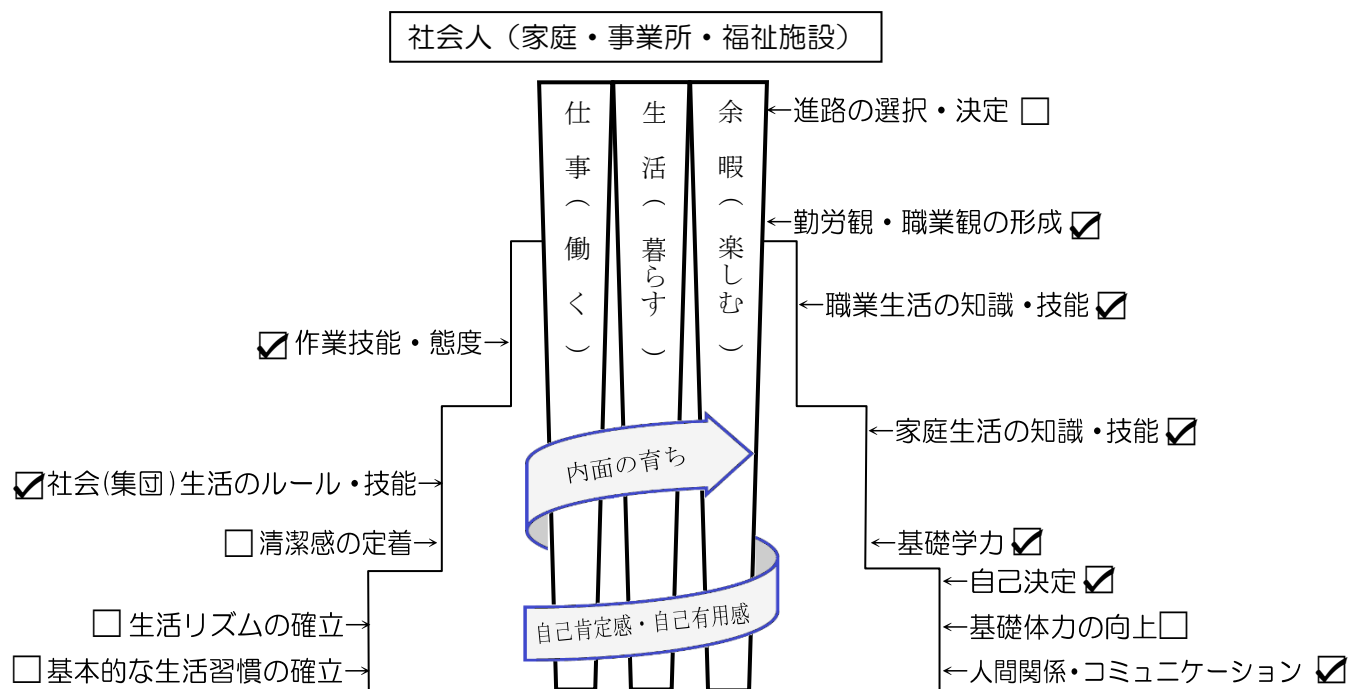
（４）評 価

- ・分からないときに、自分から質問することができたか。
- ・道具を丁寧に使い、安全に作業することができたか。
- ・自分で工夫して作業することができたか。
- ・ミスをできるだけ少なくすることができたか。

10 配置図



11 進路に関する学習指導内容の構造化のチェック

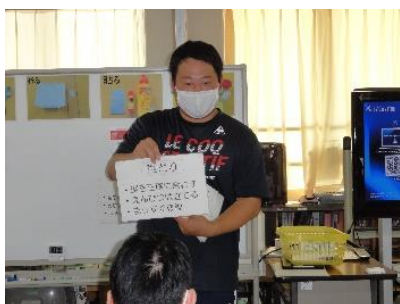
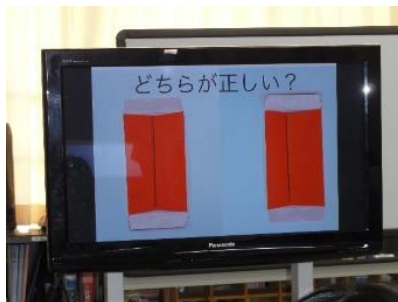


(4) 研究討議の記録

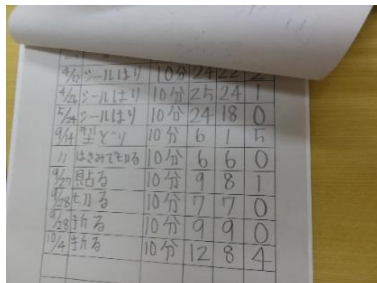
①研究テーマに沿った授業づくりで工夫したこと

「学び」をつなぐ授業

- ・国語の教科との連携としては、反省を発表したり、他人の発表を聞いたり、掲示物から注意事項を読み取る機会を設定した。



- ・数学の教科との連携としては、チェック表から丸、ばつ（まちが）の数を数え、自分の作業量を数理的に捉えるようにした。



- ・研究授業後の販売活動を通して、学校内での人とのつながり、ひいては卒業後の社会での人とのつながりを意識できるようにした。



主体的・対話的で深い学びの視点

【主体的な学びの視点】

- ・必要な生徒には補助具を用意し、自分の力でよりミスを少なく作業できるようにした。
- ・生徒が興味をもっている「エンボス加工」の作業を取り入れ、意欲的に取り組めるようにした。



【対話的な学びの視点】

- ・作業中、タブレット端末で生徒の様子を撮影し、作業の様子や数などの評価を行い、称賛したり次回への改善点を明確にしたりして継続的な学習を積み重ねられるようにした。



【深い学びの視点】

- ・「型どり」「切る」「折る」「貼る」作業を分担し、全員で製品完成までの流れを確認することで、自分の役割を明確にして活動できるようにした。また、各工程をローテーションすることで「分業」を意識して、責任をもって作業できるようにした。
- ・グループでの分業でもタブレット端末で生徒の様子を撮影し、作業の様子を他グループと共有できるようにして、友達同士のつながりを意識できるようにした。



②生徒の様子や変容

細かな作業が苦手な教室を出てしまうことがあった生徒が、興味をもったエンボス加工や授業始めの号令係を担当することで、毎時間すべての作業に意欲的に取り組めるようになった。自己中心だった生徒は、自分の要求通りにならなくても折り合いをつけて、集中して作業できるようになってきた。また、自分のやり方へのこだわりが強く、指導者の指示を素直に受け入れられないことがあった生徒は、毎時間取り組んでいくなかで、タブレット端末で撮影した上手な友達の映像を見たり、指導者の指示を受け入れたりして改善しようとする姿勢が見られ始めた。エンボス加工に取り組んだことで、振り返りの際「協力」できたことを感想発表できた生徒もいた。



授業評価アンケートより

●「学び」をつなぐ工夫に対するコメント

- ・知識や技術だけでなく、国語の見方、考え方である対象と言葉の関係（意味、働き、問い直し等）に着目したり、数学の物事の特徴や本質を捉える視点という見方に沿ったつなぎ方を考えたりしていることがすばらしいと思った。
- ・実際に販売活動をすることで、卒業後の仕事を意識したり、就労するために必要な人とやりとりするスキルを身に付けたりすることができると思う。

●主体的・対話的で深い学びが実現できていた生徒の様子とそのための手立て

視点	生徒の様子	手立て
主	みんな積極的に見通しをもって取り組んでいた。	補助具がよく工夫されていて取り組みやすくなっている。他の生徒の動画も作業の手順やポイントの確認になっている。継続して取り組むことで、指導者が教えるだけでなく、友達の作業を見て学ぶことで学習が深まっていこうに思う。
対	チェックシートで自分の成果が確認でき、自ら考えて反省、成果を記入して、発表につなげられていた。	生徒に合った補助具が使われていて、指導者が適切な言葉掛けをすることで正確な作業ができていた。
深	自分でタブレット端末の動画を何度も確認しながら一人で作業を進めていた。動画をみることで、正しいのりの付け方がわかって注意すべきことに気付किながら作業ができていた。	正しいのりの付け方を撮影したタブレット端末を用意し、作業中自分で自由に見ることができるようになっていた。
対・深	タブレット端末の映像を確認することで、自分の振り返り、自分との対話、より良い作業へ深めるための問い直しができていた。	自分ではモニタリングできにくい作業について振り返りの場面が設定されていた。

●次につながるアドバイス（討議会での指導内容も含む）

- ・タブレット端末で褒めるとき、マーカー機能を使って補助線を加えるとより状況が伝わりやすくなるように思う。
- ・本時の評価が目標に対して1つずつになっているが、12名全員同じぐらいの実態（能力）なのか。実態差があるのであれば、もう少し本時の評価を細かく設定しても良いと思った。
- ・補助具が生徒の技術に応じて、全員が同じでないのがよかった。少しずつ個々の生徒が使いやすいように改良していけるとなおい。
- ・自己評価をもっと見直すべきではないか。他人から見て行う直接評価と、自分が自分を評価する間接評価があるが、教育現場では、指導者と生徒の二者が食い違うことが多々ある。指導者の評価と生徒自身の自己評価がかみ合うことで指導効果が上がるならば、学びに向かう意欲を高められるのではないか。
- ・小学部・中学部ではタブレットの映像を振り返りに活用しており、視覚優位の子どもたちにとって映像活用は非常に有効であることを感じる。今後その生徒たちが高等部に上がることで、高等部においてもその活用は不可欠になってくるだろう。
- ・高等部三年の職業科としては、報告に来るようにするなど実践的で、支援を減らしていくべき時期ではないか。自己評価と言いながら、その前に教師が製品をすでに振り分けている。「報告、連絡、相談」の中でミスの報告をする場合、どこがミスかを自分自身で明確に理解できることが大事である。「報告、連絡、相談」の具体性を突き詰め、身につけることが高等部3年の今の時期に適した内容と言えるのではないか。

●チームへ一言

- ・作業始めの挨拶、返事、作業中の静けさ、授業終わりの礼が大きな声で揃っていて、さすが高等部、態度がみんないいと感心した。小学部でも見習っていこうと思った。
- ・とにかく授業がすっきりとしていた。T1を中心にして、T2、T3、T4のさりげない言葉掛け、落ち着いて取り組んでいる生徒たちの姿、やっぱり高3ですね。

(5) 授業研究の考察

二年間、「主体的・対話的・深い学びの視点」を意識しながら授業に取り組んだり、研究授業を参観したりすることで研究をしてきた。

以下は、今年度末に高等部職員にアンケートをとった結果である。

成果

- ・主体的に関しては、学ぶということは生徒の自発性が大切で、そのためには活動に対して自己評価し、自分でどこがどうだったということを、具体的に振り返れる工夫が大切であること、それができなければ、主体的学びが生まれにくいことがよく分かった。
- ・対話的に関しては、「報告、連絡、相談」が対話的学びにあたると思うが、自己評価ができている主体的学びによってこそ、対話的な学び（筋の通った報告や連絡）につながっていくということを感じた。
- ・指導の観点と評価を一体化することを念頭に（なるべくシンプルにおさえたいことを精選して）授業するようになった。
- ・自分で気付いて取組に生かす、汎用できるということに関しては、かなりやりこんでいかないと難しいこと、適切なアプローチが求められることを再認識した。
- ・自分の発言、発問、課題提示、環境整備が「主体的・対話的・深い学び」のどこにつながるのか常に考えながら、学習指導に取り組んだ。その結果、生徒の理解力、作業の一連の流れを理解するまでのスピードの向上、生徒の日々の安定といった変化が生まれた。
- ・普段からしている授業の活動を「主体的・対話的・深い学び」の視点のどれにあてはまるかを逆に考えると、どれかに当てはまると言われ、振り返るようになった。何気なくしている活動も三つの目標に当てはまることがあったので、そこからもう少し深めようとか、足りない部分を増やしてみようと思うようになった。
- ・自分で考える機会を増やすことができればと思い、少し意識した。もともと考えることが苦手な生徒には、考えるきっかけになるヒントを与えつつ、自分で積極的、主体的に考えることを経験させられたと思う。

課題

- ・アンケート記入時、分類に悩んだ。
- ・重度の生徒にとっての「主体的・対話的・深い学び」とはなんだろうと考えてしまった。難しいと感じる。
- ・「主体的、対話的」は視点としてはわかりやすいし、常に心掛けていると思われるが、「深い学び」をどう評価するのか難しいと感じた。
- ・自分自身の考えや判断が正常な方向に向かっていくためには、指導者や保護者としてしっかり対話を深め、相互理解が必要。知的障害の理解の部分で、「何が自分にとって良いか。そのためにどんな行動をとらなければならないか。」を自分で判断するのは非常に難しい。逆に、自分の負の感情や欲求を主体的に行動に起こす生徒が多く、これはどんなに対話を積み重ねても、裏切られることがほとんどで、深い学びに残念ながらつながらない。

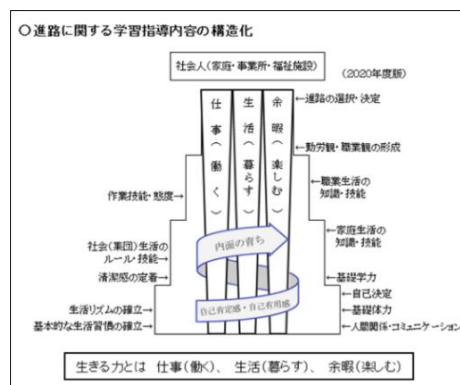
「主体的・対話的・深い学びの視点」についての研究を始めてまだ二年でまだ模索中であるが、少しずつ指導者の中に浸透してきていると思う。今後も高等部全体で研さんを積んでいきたい。

2 学習内容の構造化をどう指導に生かすか。

<資料1>

「学習内容の構造化をどう指導に生かすかを考察するとともに項目についてさらに検討」することが課題であった（資料1）。

そこで、「学んだことを仕事・生活・余暇につなげる学習内容を考えて日々の授業をすること」を実践した。それをまとめたものが下図である（資料2）。



<学習内容と「仕事・生活・余暇」との関連>

<資料2>

教科	学習内容	3本柱	構造化の項目
国語	実習先に年賀状	仕事	基礎学力、人間関係・コミュニケーション、社会生活のルール・技能
	友達、親戚に年賀状	余暇	基礎学力、人間関係・コミュニケーション
	野菜や果物の名前	生活	基礎学力
数学	バスの時刻表	仕事・生活・余暇	基礎学力、生活リズムの確立
	野菜や果物の数	生活	基礎学力
生単	簡単な指示を聞く	生活・余暇	基礎学力、自己決定
	買い物	生活・余暇	基礎学力、社会生活のルール・技能、家庭生活の知識・技能、人間関係・コミュニケーション
音楽	歌唱(カラオケ)	生活・余暇	自己決定、人間関係・コミュニケーション
家庭科	調理	生活・余暇	家庭生活の知識・技能、清潔感の定着、
美術	なりきり名画	生活・余暇	作業技能・態度、自己決定、人間関係・コミュニケーション
体育	ボッチャ	余暇	社会生活のルール・技能、人間関係・コミュニケーション
情報	修学旅行調べ学習	生活・余暇	社会生活のルール・技能、人間関係・コミュニケーション
職業	校内実習 基礎作業、集中作業 職場見学	仕事 (生活・余暇)	勤労観・職業観の形成、職業生活の知識・技能、進路の選択・決定、基礎学力、社会生活のルール・技能
総合的な探求の時間	私服通学	生活	清潔感の定着
	職場見学	仕事	進路の選択・決定、職業生活の知識・技能、社会生活のルール・技能
	ボウリング	余暇	社会生活のルール・技能、人間関係・コミュニケーション

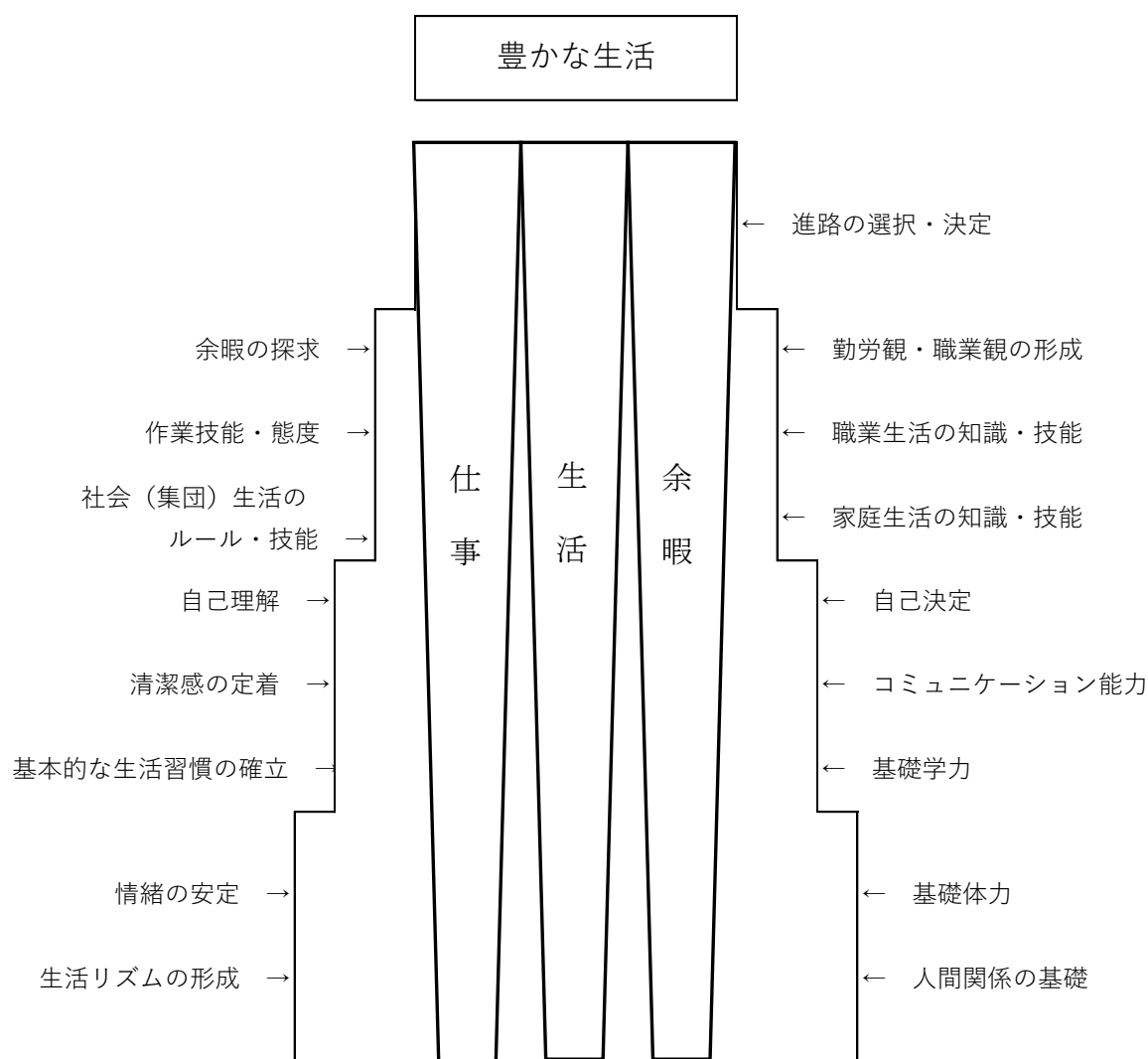
実践して、校内実習や総合の授業では、作業や職場見学など、仕事に関する内容だけでなく、実習中の家庭での過ごし方や私服の選び方などの生活面、また、ボウリングや、娯楽のテレビやタブレット端末の時間の使い方など家庭での余暇の過ごし方を幅広く学習し、構造化の項目也多岐にわたっているのがわかった。課題としては、障害が重い生徒の場合、構造化の図の最も下の部分を繰り返し取り組むばかりになり、なかなか他の教科と関連付けたり、発展させたりするのは難しいという意見があった。

また項目についてアンケートをとると以下のような意見が出た。

- ・「情緒の安定」が改めて大切だと思った。
- ・余暇につながる授業を実践した指導者から「余暇」についての項目がなかった。
- ・「自己理解」があればよかったという意見があった。
- ・「内面の育ち、自己肯定感・自己有用感」は、人間形成の中で育まれ、集団参加の中で伸びていくと思うので必要ないのでは。
- ・下段は年齢が低い段階から取り組める基礎的な項目で、自立活動の6項目を入れるようにし、上段にいくにつれて、発達段階により発展的な項目が足されていくような配列にしたい。

そこで改訂したのが下図である（資料3）。卒業後、豊かな生活を送るために「仕事、生活、余暇」を意識しながら様々な項目を意識して日々の指導に生かしていきたい。

<資料3>



3 手伝い・余暇等の時間調査

<資料4>

「それは私の仕事（IMJ）」調べを行い、その評価方法として「お手伝い・テレビ・ゲーム・携帯の記録表」を作成した（資料4）。

高等部の重点目標が「日々の指導を仕事・生活・余暇の視点で再構築し、卒業後の生活につなげられるものにする」ことから、生活の基盤は家庭なので保護者への意識付けにもなると思い実践した。

お手伝い・テレビ・ゲーム・携帯（ライン、ユーチューブなど）記録表（6月分）

名前（ なまえ ）		
	お手伝い おてつだい	テレビ・ゲーム・携帯の時間 テレビ ゲーム 携帯の時間
	例：食器ならべ 洗濯物たたみ	例：テレビ 1時間 ユーチューブ 1時間半
6/6（土）		
6/7（日）		
6/13（土）		
6/14（日）		
6/20（土）		
6/21（日）		
6/27（土）		
6/28（日）		

	○△×	反省 はんげん （できたこと、できなかったこと、感想など）
自分 自分		
家庭 かてい		
学校 がっこう		

昨年度終わってアンケートをとると、

- ・手伝いをしてもらえるお金を貯金して好きな物を買うのを楽しみにしている生徒がいた。
- ・休日の過ごし方や手伝いについて指導しやすくなった。本人の自覚や家庭の協力が不十分な生徒が多いので継続的に取り組めてよかった。
- ・生徒の自己管理能力や卒業後に想定されるつまずきが分かった。継続してほしい。
- ・家庭訪問でどの家庭も「お手伝いをよくしてくれる。」と言ってくれたことから、手伝いが定着してきていることを感じた。

その反面、出てきた課題として

- ・「家族でボウリング」、「家で腹筋」等書いていた生徒もいた。
- 指導者からのコメントでも「運動もしましょう。」というのもあった。→余暇として書いたらどうか。
- ・同じ手伝いばかり書いてくる生徒や保護者がいる。→手伝いの項目を「衣・食・住」に分けたらどうか。

という意見があった。

そこで改訂したものが次頁の表である（資料5）。

衣 食 住

お手伝い等 記録表 (6月分)

名前 ()

	お手伝い			余暇	
	衣	食	住	何を	何時間
	例：洗濯物たたみ アイロン掛け	例：お箸ならべ 料理 (みそ汁)	例：掃除機かけ ゴミ捨て	例：テレビ スマートフォン ランニング ボウリング	50分 1時間 30分 2時間
5 (土)					
6 (日)					
12 (土)					
13 (日)					
19 (土)					
20 (日)					
26 (土)					
27 (日)					

余暇の欄にテレビ、携帯
以外も書くようにした

	○ △ ×	反省 (できたこと、できなかったこと、感想など)
自分		
家庭		
学校		

次に実践例を2例挙げる (資料6、7)。

お手伝い等 記録表 (6月分)

名前 ()

	お手伝い			余暇	
	衣	食	住	何を	何時間
	例：洗濯物たたみ アイロン掛け	例：お箸ならべ 料理 (みそ汁)	例：掃除機かけ ゴミ捨て	例：テレビ スマートフォン ランニング ボウリング	50分 1時間 30分 2時間
5 (土)	洗濯物たたみ	食器片付け	トイレ掃除	テレビ	50分
6 (日)	洗濯物たたみ	食器運び	風呂掃除	ケータイ	30分
12 (土)	洗濯物たたみ	食器片付け	流し掃除	ゲーム	50分
13 (日)	洗濯物たたみ	お箸並べ	床の掃除	テレビ	1時間
19 (土)	洗濯物たたみ	食器運び	風呂掃除	ケータイ	30分
20 (日)	洗濯物たたみ	食器片付け	トイレ掃除	ゲーム	50分
26 (土)	洗濯物たたみ	お箸並べ	流し掃除	テレビ	1時間
27 (日)	洗濯物たたみ	食器洗い	床の掃除	ケータイ	50分

○ △ × 反省 (できたこと、できなかったこと、感想など)

自分	○	自分から掃除の場所を整理しました。
家庭	○	自分の進んでお手伝いをする機会、この機会に
学校	○	毎日お手伝い、できれば毎日、自分でできることを増やしていきたい。

お手伝い等 記録表 (6月分)

名前 ()

	お手伝い			余暇	
	衣	食	住	何を	何時間
	例：洗濯物たたみ アイロン掛け	例：お箸ならべ 料理 (みそ汁)	例：掃除機かけ ゴミ捨て	例：テレビ スマートフォン ランニング ボウリング	50分 1時間 30分 2時間
5 (土)	洗濯物たたみ	お箸ならべ	草むき	テレビ	50分
6 (日)	洗濯物たたみ	お箸ならべ	草むき	スマートフォン	30分
12 (土)	洗濯物たたみ	お箸ならべ	草むき	ランニング	30分
13 (日)	洗濯物たたみ	食器運び	草むき	ボウリング	2時間
19 (土)	洗濯物たたみ	お箸ならべ	草むき	テレビ	50分
20 (日)	洗濯物たたみ	食器運び	草むき	スマートフォン	30分
26 (土)	洗濯物たたみ	お箸ならべ	草むき	ランニング	30分
27 (日)	洗濯物たたみ	お箸ならべ	草むき	ボウリング	2時間

○ △ × 反省 (できたこと、できなかったこと、感想など)

自分	○	草むきがずいぶん進んだ。これからが本番。
家庭	○	今までのようなお手伝いをしていて助かりました。これから新しいお手伝いにもチャレンジしてみたいです。
学校	○	手伝いを通して、自分の仕事にきちんと取り組むことができた。また、お母さんは、助けてくれる。ありがとう。学校でも、お母さんに感謝を伝えていきたい。

二年目の今年度、終わってアンケートをとると、

- ・今回の方がバランスが目に見えてわかるので大変良いと思う。(分かる人は偏りがないようにトライしてくれている)
- ・衣食住に分けているのは、生徒の職業教育の一環としても良いと思う。
- ・自分が休日に行った手伝いが、衣食住のどれに当てはまるかを考えて記入している様子がある。書く項目を間違えているときもあるが、自分の生活が衣食住で成り立っていることを知る良い勉強になるし、間違っていると指導もできるし良いと思う。
- ・項目を分けたのは良かった。毎週したことを書いてきているが、毎週決まってしていることと、今週はこれを頑張ったんだなということがよく分かる。
- ・スマホを使った時間やテレビの時間も把握できて良い。
- ・分けたことによって複数の項目を書ってくれたので、いろんなことをしてくれるきっかけになると思った。
- ・普段からしている得意なジャンルと、していない苦手なジャンルがあることに気付くことができた。
- ・障害の重い生徒はどうしてもできることに限りがあるため、多岐に渡った手伝いは難しいところがあるが、保護者にとっては意識付けになったのではないかと感じる。意識の広がりや自分達の生活を見直すきっかけになったのでは。

という意見があった。

月末に書く反省で、「自分」、「家庭」、「学校」の連携が取れたことも大きな成果である。何例か紹介する。

- ・家庭より「初めて掃除機かけを自ら進んでしてくれました。」
学校より「少し新しいことにチャレンジしていますね。実習中、経験したことも生かして下さい。」

- ・実習中の土日の余暇に「お昼寝」と書いている生徒。
家庭より「実習で疲れているのに頑張っていた。」
学校より「実習期間中で疲れをとるために余暇を利用していいですね。」

- ・実習中、自分「いつもどおりすることができた。」
家庭より「実習をしながらよくできました。」
学校から「実習中でしたが、リズムを崩さずできていていいですね。」

また、本人の意識も変わってきた例もある。

- ・自分「実習の間は、あまりスマートフォンを使わないように頑張りたいです。」

「生徒一人一人記入の仕方も様々で、生徒の家庭での様子、保護者の関わりが少し見えてくる感じがした。記録するということで、生徒の振り返りもできるのでよい取組だと思う。」という意見からも伺えるように年々保護者にも浸透していつている。今後も手伝い等の調べは継続していきたい。

4 現場実習の評価表の改訂と考察

進路指導部と連携して現場実習の評価表を改定した。企業用評価表（左）は、評価表の項目を「仕事・生活・余暇」に分けたり、項目をまとめたりして見やすくした。福祉施設用評価表（右）は今までなかったの項目を検討して新しく作成した。評価は複数の指導者で話し合いしながら五段階で行うこととした（資料8、9、10）。

企業用

<資料8>

福祉施設用

<資料9>

現場実習評価

	校内Ⅰ	校内Ⅱ	校内Ⅲ	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
仕事に対する意欲						
むらなく真面目に協力する						
素直に指示や注意に従う						
準備・片付け・掃除						
手順がわかり見通しがもてる						
安全にできる						
正確にできる						
道具や機械を正しく使える						
時間ができる						
必要な事を自分から言う						
正しい言葉づかいや態度						
連絡・報告ができる						
生活 明るく元気に過ごす						
あいさつ・返事						
手早く着替える						
身だしなみ						
余暇 職場の人と仲良くできる						
合計						

現場実習評価

	校内Ⅰ	校内Ⅱ	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期
仕事 正しくできた						
集中して仕事できた						
あいさつ、返事、報告ができた						
職場の人の指示を聞いて行動で						
準備、片づけ、そうじができた						
生活 時間を守ることができた						
身だしなみを整えて仕事できた						
余暇 職場の人となかよくできた						
合計						

<資料10>

5社会人としてふつう
4実習生としてよくできる
3実習生としてできる
2実習生としてもう少し
1できない

次に3例紹介する（資料11、12、13）。

<資料11>

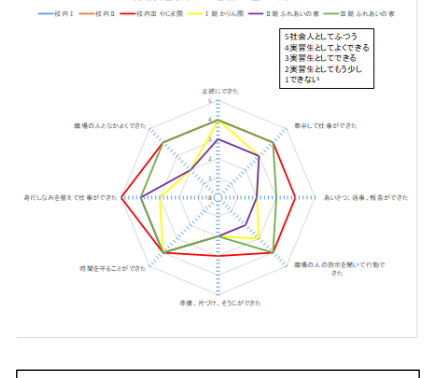
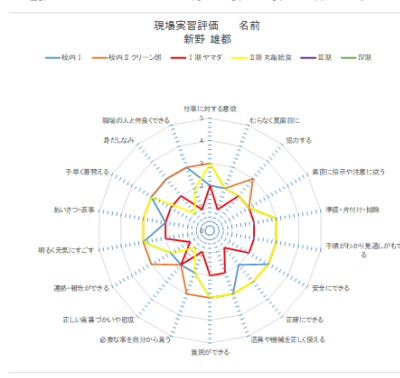
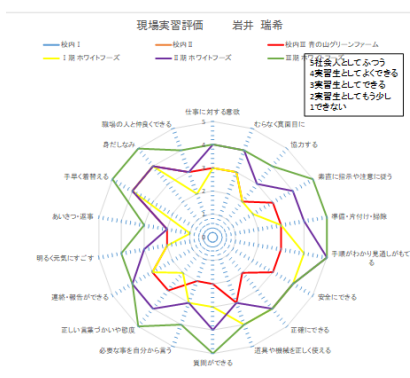
名前	校内Ⅰ	校内Ⅱ	校内Ⅲ	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
現場実習評価						
仕事に対する意欲	3	3	4	4	4	4
むらなく真面目に協力する	3	3	4	4	4	4
素直に指示や注意に従う	3	3	4	4	4	4
準備・片付け・掃除	3	3	4	4	4	4
手順がわかり見通しがもてる	3	3	4	4	4	4
安全にできる	3	3	4	4	4	4
正確にできる	3	3	4	4	4	4
道具や機械を正しく使える	3	3	4	4	4	4
時間ができる	3	3	4	4	4	4
必要な事を自分から言う	3	3	4	4	4	4
正しい言葉づかいや態度	3	3	4	4	4	4
連絡・報告ができる	3	3	4	4	4	4
生活 明るく元気に過ごす	3	3	4	4	4	4
あいさつ・返事	3	3	4	4	4	4
手早く着替える	3	3	4	4	4	4
身だしなみ	3	3	4	4	4	4
余暇 職場の人と仲良くできる	3	3	4	4	4	4
合計	0	0	50	53	66	78

<資料12>

名前	校内Ⅰ	校内Ⅱ	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期
現場実習評価						
仕事に対する意欲	3	3	4	4	4	4
むらなく真面目に協力する	3	3	4	4	4	4
素直に指示や注意に従う	3	3	4	4	4	4
準備・片付け・掃除	3	3	4	4	4	4
手順がわかり見通しがもてる	3	3	4	4	4	4
安全にできる	3	3	4	4	4	4
正確にできる	3	3	4	4	4	4
道具や機械を正しく使える	3	3	4	4	4	4
時間ができる	3	3	4	4	4	4
必要な事を自分から言う	3	3	4	4	4	4
正しい言葉づかいや態度	3	3	4	4	4	4
連絡・報告ができる	3	3	4	4	4	4
生活 明るく元気に過ごす	3	3	4	4	4	4
あいさつ・返事	3	3	4	4	4	4
手早く着替える	3	3	4	4	4	4
身だしなみ	3	3	4	4	4	4
余暇 職場の人と仲良くできる	3	3	4	4	4	4
合計	45	51	31	44	0	0

<資料13>

名前	校内Ⅰ	校内Ⅱ	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
現場実習評価					
仕事に対する意欲	4	4	3	4	4
集中して仕事できた	4	3	3	4	4
あいさつ、返事、報告ができた	4	2	2	3	4
職場の人の指示を聞いて行動できた	4	3	2	4	4
準備、片づけ、そうじができた	3	2	2	2	2
生活 時間を守ることができた	4	4	4	4	4
身だしなみを整えて仕事できた	5	3	4	4	4
余暇 職場の人となかよくできた	4	2	2	4	4
合計	0	0	32	23	29



高3 教育課程A B

校内実習、現場実習を重ねる度に評価が上がった事例

高2 教育課程A B

校内実習では前期より後期の評価が上がったが、現場実習Ⅰで評価が下がり、現場実習Ⅱで評価が上がった事例

高3 教育課程C

指導者と一緒の現場実習では評価が良く、一人での現場実習で評価が下がったが、二回目の一人実習では評価が上がった事例

成果としてはまず、今まで実施している学年としていない学年があったので、高等部として統一できた。また、複数の指導者で話し合いながら評価することで、担任だけでなく実習を担当した指導者の意見も聞くことができ、指導者同士で弱点、強みなど共通理解が図れ、今後の指導に役にたった。学期末懇談では保護者に評価表を見せながら説明することで共通理解がしやすく、家庭との連携をもつこともできた。

課題は、一年次の担任と二年次の担任では五段階の同じ評価基準でも、評価のポイントが違う。また、一年次は校内実習、二年次は校外での実習かつ指導者が付き添いで指導する、三年次は校外での実習で指導者が巡回しながらの実習となる。校内と校外、指導者がいるかないかでも評価のポイントが変わってくる。評価の観点を具体的に示す指標があれば、評価のずれが少なくなるのではないかと考えられる。

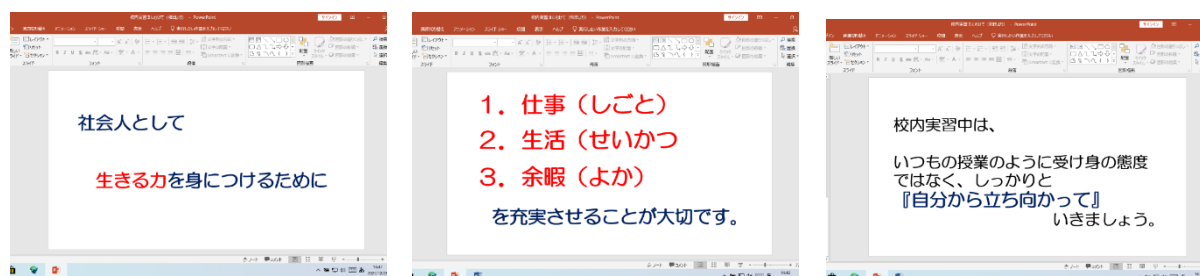
また、今回の項目には、「根気強く」、「休まない」、「気持ちのコントロール」、「集中する」といった項目がなく、真面目にこつこつ取り組む生徒が高い点数が出ないという意見もあったので、これも今後の課題にすると良いだろう。

そしてこの現場実習評価表を元に各学年、工夫をして職業や生単の授業で振り返りに使い、授業にも生かせるようにした。

一年生

校内実習Ⅱの前に学年全員で「校内実習Ⅱにむけて ～こんなところに気をつけてがんばってほしい～」についての事前学習を行った。校内実習Ⅰからさらに10のことに気を付けて取り組んでほしいという内容の後、「社会人として生きる力を身に付けるために、仕事、生活、余暇を充実させることが大切。」という説明をした。一年生なのでなかなか「仕事、生活、余暇」の意見は出なかったが、何回か学習しているので理解している生徒もいた。まだまだ浸透はしていないが、一年生の時期から少しずつ「仕事、生活、余暇」を意識して学校生活を送ってってもらいたいという思いから取り組んでいる（資料14）。

<資料 14>



二年生

現場実習の指導者用の記録から生徒の課題を抜き出し、レーダーの項目に沿って整理して作成したものである（資料15）。生徒が自己評価したところ、客観的に自分を受け止めることができておらず、できていない項目に丸印を入れていない生徒が多数いた。自己評価した後、指導者がチェックすることで、生徒も客観的に見ることができていないことが理解でき、納得して自分の課題を認識することができた。

授業を行った指導者からは「指導者と生徒の評価を比較することは、実習で他人から評価されることが本当の力になっているかどうかの指導につながると思う。自己評価だけでは現実難しいので、評価が段階の差が大きく開いているところが本当の課題と生徒に伝えている。」という意見があった。

仕事に対する意欲	
	日誌が書けていない。()
	2週間目になっても、日誌の記入を忘れてしまう。
	日誌の文字が雑だった。読めなかった。
	日記を少ししか書いていない
	日誌にはさんであった学校からのプリントを保護者に渡せなかった。次の日もファイルに残ったまま。
	朝、出勤して集合場所(駐輪場など)で、日誌を書いていた。()
協力する	
	自分ばかり質問しに行き、「友達は何もしない!」と、文句を言う。
	休み時間が終わり、「次は誰がどの作業を担当するか?」の相談もせずに、自分勝手に作業を始める。
	友達への言葉かけや指示が多い。きつく言う。
	友達がまだ片付けをしているのに、他の友達を並べて終わりのあいさつをしようとしていた。
	友達をしきろうとする。
素直に指示や注意に従う	
	指導者の助言に対し、受け答えが悪い。
	下を向いて返事をしてしまう。
	指示されたことを忘れてしまう。
	指示されたことを忘れてしまい、自分から聞きに行くことができなかった。
	注意されても、言い訳をする。ごまかす。

三年生

一年生の校内実習から同じ「自己評価表」を使用し、継続して指導している。項目はレーダーの項目をわかりやすく表記した。下図は生徒Aの一年生の時からの記録である(資料16)。この生徒は高等部から入学してきた生徒で、情緒不安定でちょっとしたことで落ち込み、集団に入れず、作業中も時々泣いて作業が手につかない生徒だった。一年次は、自分に自信がなく、自己評価でばつが多かったが、校内実習、現場実習、部活などで成功経験を重ねる度に自信をつけ、自己評価が上がってきた。一年次からAに関わってきた指導者は、「いろいろな人と関わり、精神面も強くなった結果。」と成長を喜んでいた。

<資料 16>



Ⅲ 2年間の研究の成果と課題

「生きる力を育む授業づくり ～仕事・生活・余暇の視点から～」をテーマとして、昨年度から研究を進めてきた。

それまでの3年間は作業学習の研究で、「仕事（働く）」「生活（暮らす）」に重点を置いて研究してきた。そのため「余暇（楽しむ）」に関しては、あまりクローズアップしていなかったが、二年間かけて、「進路に関する指導内容の構造化」を検討しながら、「生きる力を育む授業づくり ～仕事・生活・余暇の視点から～」をテーマとして、「余暇（楽しむ）」ことも意識しながら研究を進めてきた。特定非営利活動法人「インクルード」のホームページにも「障害の有無にかかわらず、働くことから解放されるアフターファイブ、ウィークエンドに自分らしい過ごし方をみつけることは、豊かな人生を送るための大事な条件の一つになるのです。」とあるように、豊かな生活を送るためには、「仕事（働く）」「生活（暮らす）」「余暇（楽しむ）」の3項目いずれもが生きる力として欠かせないものであるということを改めて認識した。そしてこの生きる力としての3本柱を意識しながらの授業や、学校生活全体の中で、生徒も指導者も変化がでてきた。しかし、研究授業の討議を深めるなかで、自己評価の点で課題が出てきた。そこで来年度は、今年度研究してきた「生きる力を育む授業づくり ～仕事・生活・余暇の視点から～」を基に、「自己評価の在り方」を意識した授業実践に取り組んでいきたいと考えている。

参考文献

- ・「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善【理論編】
平成30年3月栃木県総合教育センター
- ・新学習指導要領を踏まえた「学習評価」の工夫
武富博文・増田謙太郎編著 ジアース教育新社
- ・特定非営利活動法人「インクルード」のホームページ



高等部 めざす生徒像

自立・社会参加をめざし 努力する生徒

研究推進者

				部主事	濱田 千賀				
山本	美和	草薙真木子	久保	義史	島岡 稔彦	川崎	重敏	西森	恵子
山下	悦子	多木 千里	谷田	圭司	岩手 直美	山下	博幹	和田	浩子
坂本	衣美	塩田 容子	高橋	聡子	松川 俊博	廣瀬	旭	松浦由加理	
谷本	尚隆	中野 美佳	矢島	宏子	川戸日登美	山田	敦司	丹下	英之
箱崎	白日	大坪 和博	宮崎	貞治	石原 健悟	大藪	誠士	田中	星悟
山本	祥子	大山 史靖	今井英梨奈		樋口 敏郎	大森	友樹	佐藤明香里	
島田	実季	綾 広記	竹内	廣信	森 裕輔	塩田多恵子		田中	始
武田奈緒美		鍛治 秀行							

Ⅲ 2年間の研究を終えて

Ⅲ 2年間の研究を終えて

この2年間は「児童生徒の『学び』をつなぐ授業づくり ～主体的・対話的で深い学びの視点に立って～」を研究テーマとして、各部で授業研究や様々な取組を行ってきた。「学びをつなぐ」ことをキーワードに、それぞれのライフステージにふさわしい研究を進めることができたと思う。

「学び」をつなぐ視点での授業づくりについては、研究当初と現在を比べると、児童生徒の既習の学習内容を指導者間で確認し合ったり、学んだことを次の学習にどのように生かしていくかを検討したりする場面が以前よりも多く見られるようになった。これらは、学校全体として指導者の意識の変化がみられ、児童生徒の「学び」を縦や横方向につなごうとする意識が高まっていることの表れである。今後も、児童生徒の自立や社会参加に向けて「学び」をつなぐ授業の実現を目指し、引き続き実践を深めていきたいと考える。

また、主体的・対話的で深い学びの視点での授業づくりについては、研究当初は多くの指導者が戸惑いを感じていた。しかし、研究授業の実施や参観、現職教育での取組を通して考える機会が増えたことで、指導者自身が少しずつ整理できるようになり、意識して授業づくりや児童生徒を観察することができるようになったと実感している。これは2年間の研究で取り組んできた成果であると思う。一方で、各部のアンケート結果より、児童生徒の主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりについては課題を感じている指導者もまだまだ多いので、今後も長期的な視点で授業改善に取り組んでいく必要があると考えている。

本校の研究の柱となっている授業研究について、この2年間は新型コロナウイルス感染防止のため、研究授業の直接参観を中止し、ビデオ視聴での参観に変更した。それにより、直接授業を参観できなかったのは残念であった、指導者の細かな支援や手立て、児童生徒の発言等がビデオ視聴では分かりにくかったなどの感想があった。また研究授業の討議会においても、密にならないように広い部屋を使用して実施したため、多くの指導者と気軽に意見交換することが難しかったという感想も聞かれた。来年度も引き続き新型コロナウイルス感染防止のため、状況を考慮しつつ、効果的な実施方法を検討しながら研究を進めていく必要がある。





日本教育公務員弘済会香川支部
令和3年度研究論文

児童生徒の「学び」をつなぐ授業づくり

～各部や各教科の「学び」の連続性を意識して～

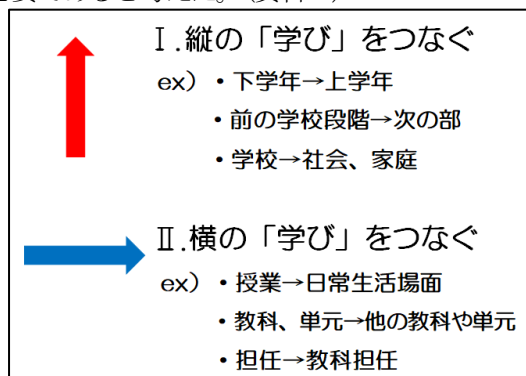
香川県立香川丸亀養護学校

1 主題設定の背景

本校は、知的障害教育を行う特別支援学校であり、全校児童生徒数は249名(小学部85名、中学部76名、高等部88名)である。「あかるく なかよく たくましく」の校訓のもと、一人一人に応じた学習環境で、日々の「わかった」「できた」を大切に授業を行い、将来の自立と社会参加の基盤となる生きる力を培うとともに、心豊かでたくましい人間に成長することを願い、様々な教育活動を行っている。

本校では、「つながれた手と手で育てる丸養」を教育ビジョンとして、「三つの部をつなぐ」「保護者をつなぐ」「地域をつなぐ」を共有し実行している。自己肯定感や自己有用感を育みながら生活する力と働く力を培い、キャリア教育の視点を意識した指導や支援を、小学部から中学部、そして高等部、卒業後へとつないでいくことを目指している。令和2年度から、全校の研究のメインテーマを「児童生徒の「学び」をつなぐ授業づくり」とし、児童生徒の「学び」に焦点を当て、「学び」をつなぐ授業の実現を目指し、研究に取り組むことにした。

授業を通して児童生徒が学んだことは、単にその授業やその時期での学びとして独立したものではなく、各授業間や学期間、学年間、部間、あるいは家庭生活へとつなげていくことが、自立や社会参加する力を育むうえで大切である。児童生徒の「学び」が生活する力や働く力などにつながっていくようにするためには、「学び」を縦や横方向の観点で分析することが必要であると考えた。(資料1)



資料1 「学び」をつなぐ方向

そこで、児童生徒の「学び」をつなぐ授業を実践し、教員同士で協議することで、学びの連続性を確保していきたいと考え、本研究を行うこととした。

本稿では、主として令和2年度に行った研究の取組について述べる。

2 研究の目的

各部や各教科等の連続性を意識しながら指導や支援をつなぐことで、児童生徒の「学び」をつなぐ授業づくりを目指す。

3 研究の進め方

(1) 各部のテーマ

各部の目標や目指す児童生徒像を基に、「学び」をつなぐ授業づくりに取り組むため、部ごとに下記のテーマを設定し、研究を進めた。

<小学部>

「なかよく げんきに がんばる 特別活動」

→ 資料1のI 【縦】の学びをつなぐ取組

<中学部>

「みんなで考える 実態に応じた指導や支援を踏まえた授業づくり」

→ 資料1のII 【横】の学びをつなぐ取組

<高等部>

「生きる力を育む授業づくり ～仕事・生活・余暇の視点から～」

→ 資料1のI 【縦】の学びをつなぐ取組

4 研究の実際

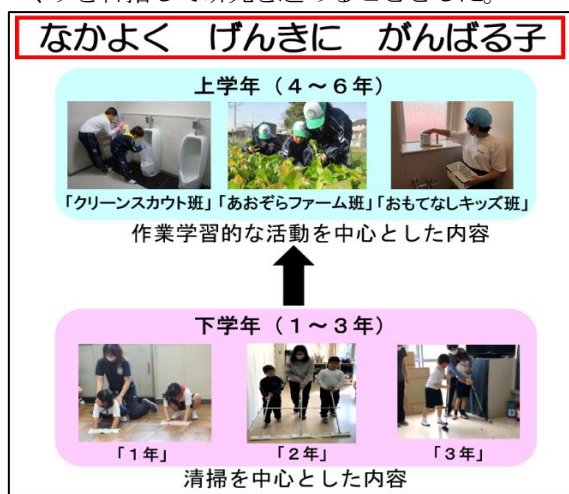
(1) 小学部の研究

①研究内容について

本校小学部の特別活動(資料2)は、週1単位時間「みんなのじかん」という名称で、学級活動の時間を設けている。1、2、3年の下学年は、発達段階を考

慮し、学年別に実施している。日常生活の指導で行う掃除とのつながりを意識し、清掃を中心とした内容で活動を行っている。また、4、5、6年の上学年は、縦割りの3班で実施をしている。中学部や高等部の作業学習とのつながりを意識し、作業学習的な活動を中心とした清掃（クリーンスカウト班）、園芸（あおぞらファーム班）、校内環境整備（おもてなしキッズ班）の三つに分かれて活動を行っている。

キャリア教育の要となる特別活動を取り上げ、小学部の目指す児童像「なかよく げんきに がんばる子」に当てはめ、「なかよく げんきに がんばる 特別活動」とし、下学年と上学年の児童の学びをつなぐ授業づくりを目指して研究を進めることとした。



資料2 小学部の特別活動

②研究の成果と課題

下学年と上学年の「学び」をつないでいくためには、互いの実践を知ることが大切であると考え、活動を伝え合いながら情報共有する機会を設定し、さらにはそれぞれの授業において、「学習内容や学習活動の設定」、「支援や手立て」で大切にしていることを表にまとめて整理した。（資料3、4）

その結果、下学年では、同学年の指導者や友達と一緒に、係活動や教室の清掃など自分の身の回りのことをすることで、自分の役割を理解させることを大切にしていることが分かった。また、役割を遂行させるため、児童に分かりやすい活動内容を設定したり、児童が達成感を味わえるように賞賛する言葉掛けをしたりするなど、工夫点も明らかとなった。

上学年では、他学年の縦割りで活動する機会を設定し、友達と協力して活動することで、学校みんなのためにという意識を理解させることを大切にしていた。また、班長等グループ内での役割意識や児童が主体的

に動けるような言葉掛けなどの支援や手立てをしていることが明確になった。

学習内容と学習活動の設定	支援や手立て
・学級や学年に所属していることを意識できるような活動を設定する。 ・身近な友達や指導者と一緒に活動したり、協力したりする場面を設定する。 ・友達と一緒に活動する楽しさを体験できるような活動を設定する。 ・達成感を味わえる活動を設定する。 ・自分の役割が分かるように、係の仕事や手伝いなど、友達や学年など身近な人たちのために役に立つ活動を設定する。 ・自信や見通しをもって取り組んだり、新しいことにもチャレンジしたりできるように、「できた」「わかった」の経験を積み重ねることができるよう学習活動を設定する。 ・感謝されたいという気持ちになる経験を重ねられるようにする。 ・できたことがすぐに分かるように、分かりやすい活動を設定する。 ・「自分ができる」という自信がもてたり、「できた」という達成感を味わったりすることができるように、必ず最後は「できた」で終わる活動内容にする。	・子どもたちが、自分は大事にされているということを実感できるような関わりをする。 ・自分から友達や指導者とやりとりできるように、児童が安心できるように人間関係づくりを行う。 ・係活動ができたとき、指導者は「ありがとう。」の言葉をたくさん伝えることで、達成感を味わえるようにする。 ・指導者が児童に「ありがとう。」を伝えることで、児童も友達に対して「ありがとう。」が伝えられるようにする。 ・なぜ掃除をしているのか、活動の意味を伝えることで、自分からやると思えるようにする。 ・「～さんがきれいしてくれたからみんなが勉強できるね。」「助かったよ。」「みんなのためにありがとう。」などの言葉掛けをすることで、身近な人のために役に立つという思いを育てる。 ・毎時間活動の最後には、お掃除名人を選ぶことで、「～さんすごいな。」「自分もお掃除名人に選ばれよう頑張ろう。」と、友達の頑張りを認めたり、友達の姿に憧れる気持ちをもたせることができるようにする。

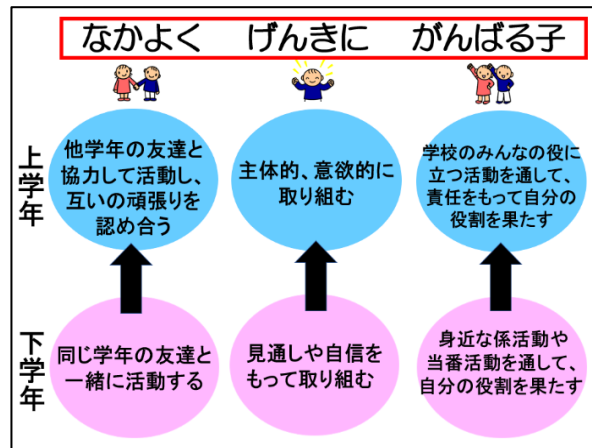
資料3 下学年の「特別活動」で大切にしている学習内容や学習活動の設定、支援や手立て

学習内容と学習活動の設定			
学習内容	クリーンスカウト班	あおぞらファーム班	おもてなしキッズ班
①集団活動	縦割りで活動することで、他学年の友達と協力して活動する機会を設定する。 ・少人数で活動することで、全ての児童に活動の機会を設定し、友達と協力したり、友達の活動に注目したりできるようにする。		
②話し合い	・児童同士で話し合い、役割分担をする。		
③自己選択、自己決定	・やる気を向上させて頑張る気持ちをもてるように、やりたい役割を自分で選ぶ。 ・授業の始めに自分で目標を決めることで、意欲的に取り組むことができるようにする。 ・班長や副班長の役割を設定する。	・小グループのなかで、今日自分がやる活動を選択する。 ・掃除後、頑張った活動をみんなの前で選択することで、互いの頑張りを認める。	
④役割	・掃除場所を分担することで、責任をもつて、意欲的に活動に取り組めるようにする。	・グループリーダーの役割を設定する。 ・水やり当番を設定することで、役割を果たしたり、役に立っていることを実感したりできるようにする。	・作業に必要な用具を分担して持っていくことで、自分の役割を果たすようにする。 ・水やりをする時に補充をするトイレの場所を分担することで、責任をもって役割を果たせるようにする。
⑤生活に結び付ける	・学校のみんなの役に立つ活動を設定する。 ・誰のために、何のために、その活動をしているのかを伝えたり考えたりする。 ・普段、自分たちがよく使う場所を清掃する。	・育てたものを小学部の友達にプレゼントする機会を設定する。	・普段、自分たちがよく使うトイレ・ホールや石けんを補充したり、よく目にする場所に植物を飾って世話をする。
⑥自主性	・班の目標をみんなで言うことで、活動の目的を意欲するようになる。 ・「前日」「あおぞらファーム」に集合場所や活動内容を記入することで、見通しをもって自分で行動できるようにする。	・水やりを当番制にすることで、自主的に活動できるようにする。 ・「前日」「あおぞらファーム」に集合場所や活動内容を記入することで、見通しをもって自分で行動できるようにする。	・必要な個数や量のトイレペーパーや石けんを補充するなど、ちょっと難しい課題を設定することで、意欲的に取り組む、達成感を味わえるようにする。
⑦般化	・生活に即した内容で分かりやすい活動を設定し、繰り返し行う。		
⑧振り返り	・毎時間、個別（個人やグループごと）に振り返りし、全体でも振り返りをする。 ・「そうじしましたカード」で、自分たちの頑張りを確認できるようにする。 ・活動の最後に、友達の前で発表をする。 ・動画を撮って評価することで、自分や友達の頑張りを振り返ることができるようにする。	・グループごとに、3つの約束を守ることができたかどうか振り返りをする。 ・「あおぞらファーム」の集約に、グループの指導者が賞賛のコメントを書き、修了式で渡す。	・作業した後に、班ごとに「おもてなしチェック表」にシールを貼ることで、達成感や達成感を味わえるようにする。 ・全体の場で、自分が頑張った活動を選択し発表したりすることで、互いの頑張りを認め合えるようにする。
⑨その他	・中学部や高等部の作業学習につながる活動で授業を組み立てている。		

支援や手立て			
観点	クリーンスカウト班	あおぞらファーム班	おもてなしキッズ班
①教材教具	・所定意図を高められるように、そらいろのユニフォーム（帽子、バンダナ）を用意する。 ・自分で分けて動ける教材教具を準備する。		
②学習活動	・学校のみんなの役に立つ活動を増やす。 ・少人数で個別に活動することで、意欲的な活動を増やす。 ・指導者を深め、活動に意欲をもつ。 ・活動の目的や活動内容を分かりやすく表現した合言葉やゲームをつくる。	・活動内容を分かりやすく表現した合言葉やゲームをつくる。	・活動の目的や活動内容を分かりやすく表現した合言葉やゲームをつくる。
③言葉掛け	・何のためにしているのか活動の意味を伝える。 ・他者を意識し、自分たちの活動は誰かの役に立っているということを実感できるように、「みんなが喜んでくれるよ。」「ありがとう。」などの言葉掛けをする。 ・できたことだけでなく、頑張ったり活動の過程を褒める。 ・子どもたちが自分で考えて行動できるように、児童の気持ちに寄り添った言葉掛けをする。		
④指導者の関わり方	・児童の気付きや児童同士の協力を促すために、基本的に見守る関わりをする。		
⑤評価の方法	・活動中のエピソードを指導者が全体に伝える。 ・評価カードで振り返ることで、担当の指導者に褒められたり、シールが貼られることで達成感を味わったりすることができるようにする。 ・縦割りを推進し、「縦割りマスタ」のバッジを渡す。 ・「そうじしましたカード」を貼ることで、清掃した教室の友達からお礼を伝えられるようにする。 ・達成感を味わえるように、活動の終わりに認定証（終了証）を渡す。	・毎時間授業の最後に、3つの約束について素晴らしい人の子をテレビに映し出して紹介する。 ・「あおぞらファーム」の集約に、グループの指導者が賞賛のコメントを書き、修了式で渡す。	・全体の振り返りの場面で、指導者が活動中のエピソード（児童が頑張ったことや、活動中校内の先生たちからありがとうと言われたことなど）を伝える。 ・おもてなしの気持ちを、「おもてなしチェック表」や「おもてなしバブルシール」で可視化する。 ・達成感を味わえるように、「おもてなし認定証」を渡す。
⑥その他	・中学部や高等部の作業学習や指導者の就労につながるように、教材教具や学習活動、賞賛の方法を工夫し、誰かのために働く喜びを実感できるようにする。		

資料4 上学年の「特別活動」で大切にしている学習内容や学習活動の設定、支援や手立て

互いの実践を共有し、大切にしていることを共通理解することは、「学び」をつなぐという視点で再度授業づくりを進めていくことにつながっている。また、資料3、資料4を作成したことにより、特別活動を通して期待する児童の姿（資料5）について、下学年と上学年の目標とする姿も教員間で共通理解できた。今後も、下学年と上学年が大切にしたい学習内容や学習活動、支援や手立てを部全体で共有することが大切であると考えている。



資料5 特別活動を通して期待する児童の姿

（2）中学部の研究

①研究内容について

中学部では、生徒数の増加と実態の多様化に伴い、これまで以上に生徒一人一人の実態把握と根拠に基づいた適切な指導や支援が必要とされている。また、中学部は、学年ごとに習熟度に合わせて複数のグループで編成された教科や、1年生から3年生までが縦割りで学習する作業学習があり、部の指導者全員が生徒一人一人の実態や適切な指導、支援を把握しておく必要が高い。そこで、各担任が「生徒の実態・支援シート」（資料6、7）を作成し、部の指導者全員で共有することで、生徒の「学び」や適切な指導、支援をつなぐことを目指し、研究を進めることとした。

〈生徒の実態について〉	〈支援・指導・対応の方針〉
・生徒の行動、学習、生活 ・体（感覚運動機能や体力） ・家庭状況等 ※長所もしっかり書く 行動の原因も分かるようなら書く	・指導、支援内容について ・自己肯定感や自己有用感を育てるための手立て ※学級外の教員にも知っておいてもらいたいことは、特にしっかりと書く

資料6 「生徒の実態・支援シート」に記入する具体的な内容

令和2年度 生徒の実態及び支援シート	
1年 4組 氏名 G・Fさん	
生徒の実態について 得意なこと・好きなこと 過去のエピソードやアニメ、ラーメンの話、興味のある話題について話をするのが好き 本を読むこと（図鑑、トラベルブック、ドラえもん、エヴァンゲリオン、ドラゴンボール等々） 友達と関わること 苦手なこと 自分の思考を思ったように言葉で表現すること、書くこと（能力はある） 失敗への不安から図工や音楽、体育への苦手意識、体を動かすこと、力を抜くこと 気になる言動 不随意運動：手をばたつかせる、鉛筆を自分の目に向けて、とびはねる、口を大きく開ける くせ：はなほじり、鼻水を舌でめとる、たんを手でこする、性器を触った手を人に匂わせる 自傷行為：水筒や筆箱で頭をたたく、片足でもう一方を踏みつける、髪をめく、髪を切る その他：女の人を触る、ものを隠す、汚言	
支援・指導・対応の方針 今後の方針 ①落ち着いていられる時間を確保し、伸ばしていく。 ②できることを増やす。 ③具体的な取組 ①安心して居場所を作る。 ②学習内容を具体的に提示する。 ③「できた・できなかった」ではなく、「取り組めた」ということを評価する段階から始める。 ※「取り組めた＋休憩」を1セットとし、繰り返すことで、成功体験を繰り返す。 ④やること前提の選択肢を提示する。 ※どちらを選んでも成功するような選択肢にする。「どこで・だれとやる」＋「今はやらなくてもいいよ」 ⑤目標は「みんなと取り組む」ではなく活動内容にする（「一人で～する」も、ハードルが高い）。 ⑥活動への手立てとして、早めの手を打つこと。 ※もしトラブルを起こしてしまったら…相手がどんな気持ちなのかを伝えるまでにする。	

資料7 「生徒の実態・支援シート」

②研究の成果と課題

「生徒の実態・支援シート」を作成するにあたり、中学部の指導や支援、障害特性を知っておくことは、実態把握や適切な支援、指導の根拠となるうえで大切であると考え、年間を通して毎月20分程度の研修（資料8）を設定した。その結果、どの指導者も障害特性を考慮しながら、生徒の実態や指導、支援方法をシートに記入することができた。

「生徒の実態・支援シート」を部の指導者全員で共有したことで、生徒の授業中等の様子を職員室などでよく話すようになったり、教員間で授業の振り返りが短時間でできるようになったりした。今後も、生徒一人一人の情報交換を密に行うことで、適切な指導や支援をつないでいく必要があると考えている。

4月	中学部の指導、支援について
6月	中学部の生徒の障害の概要について
7月	ADHDについて
8月	自閉症スペクトラム症について
9月	ダウン症などの染色体異常について 「生徒の実態支援シート」の共有①
11月	愛着障害、愛着の問題について
1月	「生徒の実態支援シート」の共有②

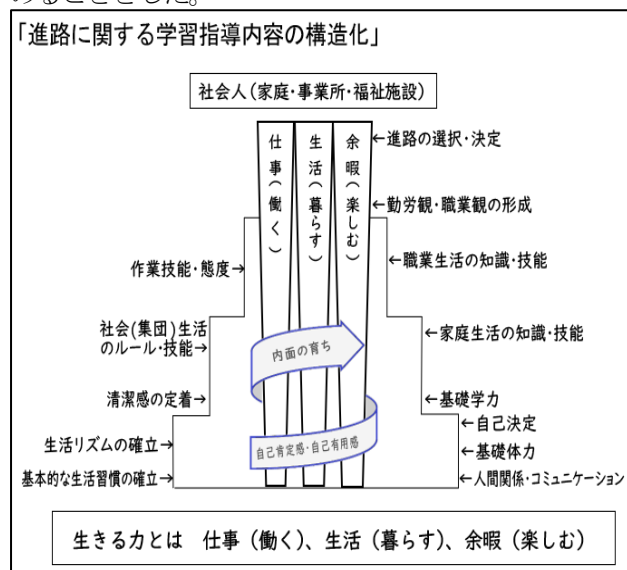
資料8 研修計画

（3）高等部の研究

①研究内容について

高等部には、対人関係の構築や感情のコントロールが難しい生徒、人間関係で悩んでいる生徒、また高等部から本校に入学してきた生徒のなかには成功体験が

積み重ねられておらず少しの失敗や注意にも気持ちが折れてしまう生徒がいる。努力して企業に就職しても卒業後数年で離職するケースもあり、高等部ならではの様々な問題が起こっている。そのような問題を受け、高等部では卒業後を見据え、「仕事（働く）」「生活（暮らす）」「余暇（楽しむ）」の3本柱のバランスを重視した指導を行っている。そこで、従来の研究で作成した「進路に関する学習内容の構造化」（資料9）を用いて、3本柱を大切に学習内容の検討を行い、研究を進めることとした。



資料9 「進路に関する学習指導内容の構造化」

②研究の成果と課題

学んだことが仕事、生活、余暇につながる学習内容を考えて日々の授業実践を行った。さらに、学習内容が資料9のどの項目に当てはまるかについても検討した。実践した授業の一部を資料10の表にまとめた。

教科	学習内容	3本柱	構造化の項目
国語	実習先に年賀状	仕事	基礎学力、人間関係・コミュニケーション、社会生活のルール・技能
数学	バスの時刻表	仕事・生活・余暇	基礎学力、生活リズムの確立
生単	買い物	生活・余暇	基礎学力、社会生活のルール・技能、家庭生活の知識・技能、人間関係・コミュニケーション
音楽	歌唱(カラオケ)	生活・余暇	自己決定、人間関係・コミュニケーション
家庭科	調理	生活・余暇	家庭生活の知識・技能、清潔感の定着、
美術	なりきり名画	生活・余暇	作業技能・態度、自己決定、人間関係・コミュニケーション
職業	校内実習 基礎作業 集中作業 職場見学	仕事 (生活・余暇)	勤労観・職業観の形成、 職業生活の知識・技能、 進路の選択・決定、基礎学力、 社会生活のルール・技能
総合的 探究の 時間	私服通学	生活	清潔感の定着
	職場見学	仕事	進路の選択・決定、 職業生活の知識・技能、 社会生活のルール・技能
	ボウリング	余暇	社会生活のルール・技能、 人間関係・コミュニケーション

資料10 各教科の学習内容と仕事、生活、余暇の関連

今回、「進路に関する学習内容の構造化」を用いたことで、各教科の学習内容と仕事、生活、余暇とのつながり、また学習指導内容の項目との関連性を整理することができた。今後も構造化の図を基に学習内容を検討していき、高等部卒業後の仕事、生活、余暇につなげていくことができる指導を行っていくことが大切であると考えている。

5 研究のまとめ

「児童生徒の「学び」をつなぐ授業づくり」という研究テーマの下、各部、「学び」の連続性を意識した実践を進めてきた。その結果、それぞれの部で「学び」をつなぐためのツール(以降、「つなぐツール」と記述)を作成したり活用したりしたことで、指導者間で共通理解しながら授業づくりを行うことができた。

小学部では「特別活動で大切にしている学習内容や学習活動の設定、支援や手立て」の表(資料3、資料4)が基となり、下学年と上学年の「学び」をつなぐ授業づくりを進めることができた。中学部では、「生徒の実態・支援シート」(資料6)を作成したことで、生徒の「学び」をつなぐ授業づくりを行うことができた。そして高等部では、「進路に関する学習指導内容の構造化」の図(資料9)を活用して、学校から卒業後の社会や家庭へと「学び」をつなぐ授業づくりを行うことができた。以上のように、「つなぐツール」が基となり、縦や横方向に「学び」をつなぐ観点で授業づくりに取り組むことができた。現在、「進路に関する学習内容の構造化」の図(資料9)は、研究授業の学習指導案を作成する際、高等部のみならず中学部でも学習内容をチェックするために活用している。各部の研究の成果物が、部を越えて活用されていることも成果として付け加えておきたい。

6 おわりに

研究当初と現在を比べると、児童生徒の既習の学習内容を指導者間で確認し合ったり、学んだことを次の学習にどのように生かしていくかを検討したりする場面が以前よりも多く見られるようになった。これは、学校全体として指導者の意識の変化がみられ、児童生徒の学びを縦や横方向につなごうとする意識が高まっていることを実感している。今後も、児童生徒の自立や社会参加に向けて学びをつなぐ授業の実現を目指し、引き続き研究を深めていきたい。

<文責> 校長 内山宜子、教諭 小島慶子

あとがき

令和2、3年度の教育実践を掲載した「青の山の教育」第36集が発刊されました。今回の全校研究テーマは、「児童生徒の『学び』をつなぐ授業づくり～主体的・対話的で深い学びの視点に立って～」です。

これまで本校は、平成26年度から児童生徒自己肯定感や自己有用感を高めることで内面の育ちを育む取組を4年間実践し、平成30年度からの2年間は、内面を育て、生活する力と働く力を培う「丸養流生きる力」を高める実践を三つの部でつないで取り組んでまいりました。

令和2年度より、新学習指導要領が小学校で全面実施、令和3年度より中学部で全面実施、令和4年度より高等部が年次進行で実施になることを受けて、サブテーマを新学習指導要領のキーワードでもある『主体的・対話的で深い学び』の視点に立って」とし、メインテーマを「児童生徒の「学び」をつなぐ授業づくり」として取り組みました。この「学びをつなぐ」については、前回の取り組みである「三つの部をつなぐ」を踏襲したものもありますが、今回は「三つの部」に加えて、前の学年から次の学年へ、学校から卒業後の社会や家庭といった時系列の縦の学びをつなぐと、授業から日常生活場面、教科単元から他の教科や単元へという横の学びをつなぐという意味も含まれ、縦と横の学びをつなぐのが今回の特徴です。

また、令和元年の12月に文部科学省から発表された「GIGAスクール構想」は、5年間かけて順次ICTのハード環境を整備する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて、オンラインを活用した授業や学習への必要性が高まったことから、端末導入のスケジュールを大幅に前倒しして整備が行われました。本校では、令和3年度より小・中学部の児童生徒には一人1台、高等部の生徒には3人に1台の割合でタブレット端末が支給されたり、高速大容量回線を使用した校内ネットワークが整備されたりしました。オンラインを活用した学校と家庭を結んだ学習活動については、まだまだ課題が多く進んでいるとはいえませんが、校内の学習状況は大きく変わり始めています。

小学部では、令和3年度の研究の3本柱の一つに「タブレット端末の活用」として取り組み、「国語・算数」や「体育」「図工」などの授業で、タブレット端末により様々なアプリを活用して児童が主体的に活動することが増え、言語とともに映像で活動の振り返りをすることが聴覚よりも視覚優位な情報収集能力の児童にとっては、特に有効であることが分かりました。

中学部の音楽の合奏の指導では、友達と色々なパートで演奏をする前の初めの段階で、タブレット端末の動画の手本を見ながら練習することから始めました。自分のパートのイメージをつかみながら、生徒それぞれのペースで主体的に何回も練習に取り組むことができました。

高等部の職業のポチ袋づくりやシール貼りなどの基礎作業の授業では、自分でタブレット端末の動画を確認しながら一人で作業を進めたり、正しい作業方法の動画を見ることで注意すべきことに気付किながら作業したり、タブレット端末の映像を確認することで自分の作業の進め方について振り返ったりし、より効率的で正確な作業について主体的に深めながら取り組むことができました。

「GIGAスクール構想」については、急ピッチで進んでいるためICTに関する分野はまだまだ課題が多いところですが、校内でのICTに関する職員向け研修を、令和3年度は年間5回程度実施するなど、職員のスキルアップにも努めているところです。

ご一読いただき、本校の取組にについてご指導、ご助言いただければ幸いと存じます。

令和4年3月

教 頭 香川 昌久

編 集 委 員

< 小学部 >	平居 規子	高木麻千子	橘 紀子
	小島 慶子	尾崎 沙織	高尾 朋代
< 中学部 >	木下 賢二	岡本 真紀	大川 拓馬
	稲葉絵梨香		
< 高等部 >	山下 博幹	塩田 容子	矢島 宏子
	田中 星悟	森 裕輔	

青の山の教育 第36集

令和4年3月発行

香川県立香川丸亀養護学校

〒763-0085

香川県丸亀市飯野町東分592-1

TEL 0877-24-1215

FAX 0877-24-7318

HP URL <http://www.kagawa-edu.jp/maruyo01>

E-MAIL maruyo01@kagawa-edu.jp

(表紙は 高等部1年 美術ABグループ作品 「文字のデザイン」)